

うし くび いし ざか かま あと ぐん  
牛頸石坂窯跡群 3

— D・F地点 —

大野城市文化財調査報告書 第210集



2023

大野城市





1



2



3



4



1. 円形硯 (D 5号窯跡)
2. 中空硯 (F 1号窯跡)
3. 圈足円面硯 (D 5号窯跡)
4. ヘラ書き須恵器 (F 1号窯跡)

## 序

福岡県大野城市は福岡平野南部に位置し、市域は中央がくびれ、南北に細長いひょうたん形をしています。その市名は日本最古の朝鮮式山城「大野城跡」に由来し、東部に大野城跡、中央に水城跡、南部に牛頸須恵器窯跡とそれぞれ国指定史跡を配し、それらを中心に数多くの文化財が残る歴史豊かな街です。

石坂窯跡群は市域南部、牛頸山麓の丘陵上に位置しています。石坂窯跡群を含む牛頸地区では、これまでにたくさんの須恵器窯跡が発掘調査され、一部はその重要性から平成21年2月に「牛頸須恵器窯跡」として国の史跡に指定されました。

今回報告する石坂窯跡群D地点・F地点では、奈良時代を中心とした窯跡が確認されています。なかでも、D地点では多数の硯を生産したことが明らかとなりました。また、D・F地点では大型の食器を生産しており、硯とともに大宰府との関係を考える上で非常に重要な資料といえます。

遺跡は土地に刻まれた歴史であり、我々にたくさんのことを教えてくれます。心のふるさと館では、こうした遺跡を記録し、報告書というかたちで広く一般に公開するとともに、後世へと伝えていけるよう努めています。本書が文化財の理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究や教育の面で広く活用していただけたら幸いです。

最後になりましたが、事業関係者及び地元の方々にご理解とご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

令和5年3月31日

大野城心のふるさと館  
館長 赤司 善彦

## 例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が発掘調査を実施した大野城市大字牛頭所在の「石坂窯跡群D地点・F地点」の報告書である。
2. 発掘調査は、各事業者の委託を受け、大野城市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、徳本洋一が担当した。
4. 遺構写真は、調査担当者が撮影した。
5. 遺物実測・拓本・製図、遺構図の製図は縣島田組に委託した。
6. 遺物写真は、牛嶋茂（写測エンジニアリング株）が撮影した。
7. 遺構実測図は、調査担当者が作成した。
8. 遺構実測図中の方位は、磁北を示す。
9. 遺物観察表は、縣島田組が作成した。
10. 本書に掲載した遺跡分布図のうち第1図は、国土地理院発行の1/25,000地形図『福岡南部』『太宰府』を一部改変して使用した。第2図は、大野城市が発行した『牛頭窯跡群—総括報告書I—』を一部改変（原図は国土地理院発行の1/50,000地形図『福岡南部』『太宰府』）して使用した。
11. 本書に掲載した資料は、すべて大野城市が管理・保管している。
12. 本書に使用する土色名は、『新版標準土色帖』農林水産省技術会議事務局監修を使用している。
13. 本書の文章のうち遺物文章は、柳本照男・深町祥子（縣島田組）が執筆し、澤田康夫が点検・加筆・修正した。V章4は山元瞭平が、他は上田龍児が執筆した。
14. 編集は上田・澤田監修のもと柳本・深町がおこなった。
15. 本書のタイトルは、過去に「牛頭石坂窯跡-C地点-」、「牛頭石坂窯跡-E地点-」の2冊の報告書が刊行されていることから、巻次を「3」とし、遺跡の正式名称を採用し、「牛頭石坂窯跡群3-D・F地点-」とする。
16. 報告書作成に関しては以下の方々から、ご教示を得た。（五十音順・敬省略）  
牛嶋茂・酒井芳司・松川博一

# 本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制	3
II. 位置と環境	
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	5
III. 石坂窯跡D地点	
1. 調査の概要	11
2. 0-A号窯跡	11
3. 0-B号窯跡	13
4. 1号窯跡	16
5. 2号窯跡	19
6. 3号窯跡	19
7. 4号窯跡	24
8. 5号窯跡	24
9. 5号窯跡周辺土坑 (P1・P2)	38
IV. 石坂窯跡F地点	
1. 調査の概要	43
2. 1号窯跡	44
3. 2号窯跡	53
4. 3号窯跡	54
5. 4号窯跡	58
V. 総括	
1. 各窯跡の年代	61
2. 中・大型供膳具の検討	61
3. 稜椀とへら書き須恵器	64
4. 陶硯の位置付け	67

## 挿 図 目 次

第1図	石坂窯跡群周辺の遺跡分布図 (1/25,000).....	2
第2図	遺跡分布図 (1/62,500).....	7・8
第3図	D地点窯跡位置略図 .....	11
第4図	0-A号窯跡実測図 (1/60) .....	11
第5図	0-A号窯跡表土層出土遺物実測図 (1/3・1/6) .....	12
第6図	0-A号窯跡窯体内埋土出土遺物実測図 (1/3).....	13
第7図	0-B号窯跡実測図 (1/60) .....	14
第8図	0-B号窯跡窯体内埋土出土遺物実測図 (1/3).....	14
第9図	0-A・B号窯跡灰原出土遺物実測図 (1/3).....	15
第10図	1号窯跡実測図 (1/60).....	16
第11図	1号窯跡表土層出土遺物実測図① (1/3) .....	17
第12図	1号窯跡表土層出土遺物実測図② (1/3) .....	18
第13図	1号窯跡窯体内埋土出土遺物実測図 (1/3) .....	18
第14図	2号窯跡窯体内埋土出土遺物実測図 (1/3) .....	19
第15図	3号窯跡表土層出土遺物実測図 (1/3) .....	20
第16図	3号窯跡灰原上層出土遺物実測図① (1/3) .....	21
第17図	3号窯跡灰原上層出土遺物実測図② (1/3) .....	22
第18図	3号窯跡灰原上層出土遺物実測図③ (1/3) .....	23
第19図	5号窯跡実測図 (1/60).....	25
第20図	5号窯跡表土層出土遺物実測図 (1/3) .....	26
第21図	5号窯跡窯体内埋土出土遺物実測図① (1/3) .....	27
第22図	5号窯跡窯体内埋土出土遺物実測図② (1/3) .....	28
第23図	5号窯跡窯体内埋土出土遺物実測図③ (1/3) .....	29
第24図	5号窯跡窯体内埋土出土遺物実測図④ (1/3) .....	30
第25図	5号窯跡灰原出土遺物実測図① (1/3) .....	31
第26図	5号窯跡灰原出土遺物実測図② (1/3) .....	33
第27図	5号窯跡灰原出土遺物実測図③ (1/3) .....	35
第28図	5号窯跡灰原出土遺物実測図④ (1/3) .....	36
第29図	5号窯跡灰原出土遺物実測図⑤ (1/3) .....	37
第30図	5号窯跡灰原出土遺物実測図⑥ (1/3) .....	38



第31図	5号窯跡周辺地形測量図、P1・P2配置図(1/100)	39
第32図	5号窯跡P1出土遺物実測図①(1/3)	41
第33図	5号窯跡P1出土遺物実測図②(1/3)	42
第34図	5号窯跡P2出土遺物実測図(1/3)	42
第35図	F地点遺構配置図(1/100)	43
第36図	1号窯跡表土層出土遺物実測図(1/3)	45
第37図	1号窯跡遺構検出時出土遺物実測図(1/3)	46
第38図	1号窯跡埋土出土遺物実測図(1/3)	47
第39図	1号窯跡灰原出土遺物実測図①(1/3)	49
第40図	1号窯跡灰原出土遺物実測図②(1/3)	51
第41図	1号窯跡灰原下層出土遺物実測図①(1/3)	52
第42図	1号窯跡灰原下層出土遺物実測図②(1/3)	53
第43図	3号窯跡実測図(1/60)	54
第44図	3号窯跡窯体内埋土出土遺物実測図①(1/3)	55
第45図	3号窯跡窯体内埋土出土遺物実測図②(1/3)	57
第46図	3号窯跡灰原出土遺物実測図(1/3)	58
第47図	4号窯跡実測図(1/60)	59
第48図	4号窯跡遺構検出時出土遺物実測図(1/3)	59
第49図	4号窯跡窯体内埋土出土遺物実測図(1/3)	60
第50図	7～8世紀の中・大型供膳具(牛頭窯跡群周辺)(1/10)	63
第51図	牛頭窯跡群周辺の稜椀・へら書き須恵器「五」(1/6)	66
第52図	大宰府出土円形硯の諸例(1/6)	68
第53図	筑前国出土把手付中空円面硯の諸例(1/6)	69

## 表 目 次

表1	筑前国出土把手付中空円面硯	69
表2	石坂窯跡D地点出土遺物観察表	71
表3	石坂窯跡F地点出土遺物観察表	80

## 図 版 目 次

- 図版 1 (1) D地点0号窯跡～4号窯跡全景(北東から)  
(2) D地点0-A号窯跡・0-B号跡窯全景(南から)  
(3) D地点0-A号窯跡全景(南から)
- 図版 2 (1) D地点0-A号窯跡左側壁(北西から)  
(2) D地点0-B号窯跡全景(南から)  
(3) D地点0-B号窯跡右側壁(南東から)
- 図版 3 (1) D地点0-B号窯跡左側壁(南西から)  
(2) D地点0-A号窯跡・0-B号窯跡検出状況(北から)  
(3) D地点0-A号窯跡・0-B号窯跡検出状況
- 図版 4 (1) D地点1号窯跡全景(北から)  
(2) D地点1号窯跡天井部遺存状況(北から)  
(3) D地点1号窯跡煙道部(北から)
- 図版 5 (1) D地点1号窯跡煙道部(北西から)  
(2) D地点1号窯跡煙道部(東から)  
(3) D地点1号窯跡焼成部遺物出土状況(北から)
- 図版 6 (1) D地点1号窯跡焼成部床面断ち割り(北から)  
(2) D地点1号窯跡焼成部床面断ち割り(北東から)  
(3) D地点1号窯跡左壁断ち割り(北から)
- 図版 7 (1) D地点2号窯跡検出状況(東から)  
(2) D地点3号窯跡検出状況(東から)  
(3) D地点4号窯跡検出状況(東から)
- 図版 8 (1) D地点5号窯跡全景(北東から)  
(2) D地点5号窯跡焼成部遺物出土状況(北東から)  
(3) D地点5号窯跡焚口部付近遺物出土状況(北東から)
- 図版 9 (1) D地点5号窯跡煙道部(西から)  
(2) D地点5号窯跡左側壁断ち割り状況(北から)  
(3) D地点5号窯跡右側壁断ち割り状況(北東から)

- 図版 10 (1) D地点5号窯跡灰原土層(東から)  
(2) D地点5号窯跡P1(北東から)  
(3) D地点5号窯跡P2全景(北東から)
- 図版 11 (1) D地点5号窯跡P2遺物出土状況(北東から)  
(2) D地点5号窯跡検出状況(北東から)  
(3) D地点5号窯跡作業風景(北東から)
- 図版 12 (1) F地点全景(北東から)  
(2) F地点全景(東から)
- 図版 13 (1) F地点全景(東から)  
(2) F地点全景(上空から:右が北)
- 図版 14 (1) F地点1号窯跡検出状況(東から)  
(2) F地点1号窯跡検出状況(西から)  
(3) F地点2号窯跡検出状況(北から)
- 図版 15 (1) F地点3号窯跡全景(東から)  
(2) F地点3号窯跡床面(東から)  
(3) F地点3号窯跡窯体内土層(東から)
- 図版 16 (1) F地点3号窯跡焚口側遺物出土状況(南東から)  
(2) F地点3号窯跡遺物出土状況(北東から)  
(3) F地点3号窯跡窯体断ち割り(南東から)
- 図版 17 (1) F地点3号窯跡窯体断ち割り(南東から)  
(2) F地点3号窯跡窯体断ち割り(北東から)  
(3) F地点3号窯跡窯体断ち割り(北東から)
- 図版 18 (1) F地点4号窯跡全景(東から)  
(2) F地点4号窯跡左側壁~天井部(北東から)  
(3) F地点4号窯跡右側壁~天井部(南東から)
- 図版 19 (1) F地点4号窯跡天井部~煙道部(東から)  
(2) F地点4号窯跡左側壁~奥壁(北東から)  
(3) F地点4号窯跡右側壁~奥壁(南東から)
- 図版 20 (1) F地点4号窯跡断ち割り状況(南東から)  
(2) F地点4号窯跡断ち割り(北東から)  
(3) F地点4号窯跡窯体内土層(東から)

- 図版 21 D地点5号窯出土遺物集合①  
D地点5号窯出土遺物集合②
- 図版 22 D地点杯蓋集合  
D地点杯・杯身集合
- 図版 23 D地点・F地点土師器杯集合  
F地点高杯集合
- 図版 24 出土遺物①
- 図版 25 出土遺物②
- 図版 26 出土遺物③
- 図版 27 出土遺物④
- 図版 28 出土遺物⑤
- 図版 29 出土遺物⑥
- 図版 30 出土遺物⑦
- 図版 31 出土遺物⑧
- 図版 32 出土遺物⑨
- 図版 33 出土遺物⑩
- 図版 34 出土遺物⑪
- 図版 35 出土遺物⑫
- 図版 36 出土遺物⑬
- 図版 37 出土遺物⑭
- 図版 38 出土遺物⑮
- 図版 39 出土遺物⑯
- 図版 40 出土遺物⑰
- 図版 41 出土遺物⑱

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

牛頭窯跡群は、福岡県大野城市上大利・牛頭を中心に、一部に春日市や太宰府市を含む東西4km、南北4.8kmの範囲に広がる須恵器窯跡群である。現在までに300基を超える窯跡が調査され、6世紀中頃から9世紀中頃の約300年にわたり操業されたことが明らかとなっている。窯の総数は未調査のものも含めると600基に迫ると考えられる。長期間にわたり大規模な操業を行った九州最大の須恵器窯跡群であることから、平成21年に「牛頭須恵器窯跡」として国指定史跡に指定されている。史跡指定地は全12地区に分かれており、いずれも大野城市内に位置する。

石坂窯跡群は大野城市大字牛頭に所在する。牛頭山から北側に派生する丘陵上に広がる古代の須恵器窯跡群で、一部は国指定史跡「牛頭須恵器窯跡」にあたる。これまでに、C地点（文献1）や牛頭窯跡群最新段階の窯跡であるE地点（文献2）が調査されたほか、史跡整備に伴いⅢ地区（文献3）が調査され、奈良時代を中心とした窯跡であることが明らかになっている。これ以外は現地踏査により窯跡の分布が把握され、その成果は「牛頭窯跡群総括報告書」（文献4）に所収されている。本書で報告する石坂窯跡D地点・F地点は、牛頭山北麓にある小ピークから派生する丘陵斜面に位置する。以下に地点毎に調査の経緯と経過を記す。

### 【石坂窯跡D地点】

対象地では土砂採掘が計画され、平成2年4月に人力による試掘調査を実施した結果、窯跡が確認された。事業者から発掘届が提出され、福岡県教育委員会あてに進達したところ、平成2年5月21日付けで発掘調査を実施する旨の通知があった。発掘調査は平成2年5月22日から着手し、同6月12日に完了した。

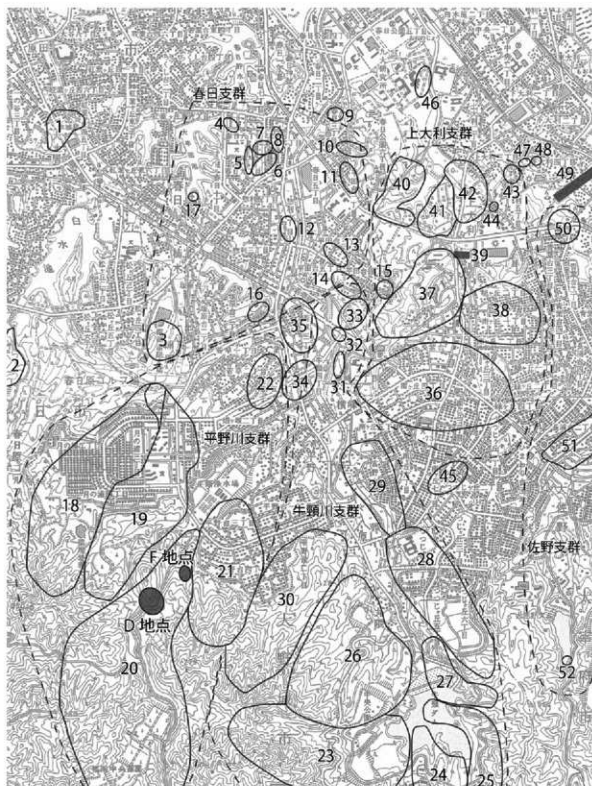
なお、整理作業は令和4年度に大野城市の一般財源を用いて実施した。

### 【石坂窯跡F地点】

対象地では砂防ダム建設が計画され、事業者である福岡県から発掘届が提出され、福岡県教育委員会あてに進達したところ、発掘調査を実施する旨の通知があった。発掘調査は平成17年6月9日から着手し、同8月4日に完了した。

なお、整理作業は令和4年度に大野城市の一般財源を用いて実施した。

- 文献1 大野城市教育委員会 1985『牛頭石坂窯跡－C地点－』（大野城市文化財調査報告書第14集）  
文献2 大野城市教育委員会 1997『牛頭石坂窯跡－E地点－』（大野城市文化財調査報告書第49集）  
文献3 大野城市教育委員会 2021『史跡牛頭須恵器窯跡1－石坂窯跡群Ⅲ地区・長者原窯跡群Ⅰ地区－』（大野城市文化財調査報告書第186集）  
文献4 大野城市教育委員会 2008『牛頭窯跡群－総括報告書Ⅰ－』（大野城市文化財調査報告書第77集）



- 1: 大土居水城跡、2: 西浦古墳群、3: 浦ノ原塚跡、4: 惣利1号塚跡、5: 惣利西遺跡、6: 惣利東遺跡、7: 惣利跡、8: 惣利北遺跡、9: 向谷北遺跡、10: 向谷古墳群、11: 平田北遺跡、12: 円入遺跡、13: 春日平田遺跡、14: 春日平田西遺跡、15: 春日平田北遺跡、16: 塚原古墳群、17: 大牟田塚跡、18: 後田塚跡群、19: 小田浦塚跡群、20: 石坂塚跡群、21: 大谷塚跡群、22: 畑ヶ坂遺跡、23: 足洗川塚跡群、24: 菅原塚跡群、25: 長者原塚跡群、26: 井手塚跡群、27: 道ノ下塚跡群、28: ハセムシ塚跡群、29: 中浦塚跡群、30: 原浦塚跡群、31: 原岡田遺跡、32: 筆無尾遺跡、33: 筆無尾塚跡、34: 塚原遺跡群、35: 日ノ浦遺跡群、36: 平田塚跡群、37: 野添遺跡群、38: 大浦塚跡群、39: 上大利小水城跡、40: 梅津遺跡群、41: 本堂遺跡群、42: 上園遺跡、43: 出口塚跡、44: 出口遺跡、45: 上平田遺跡、46: 池田・池の上遺跡、47: 唐土遺跡、48: 谷川遺跡、49: 水城跡、50: 神ノ前塚跡、51: 宮ノ本遺跡群、52: 野口塚跡

第1図 石坂窯跡群周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

## 2. 調査体制

### 【平成2年度（D地点発掘調査）】

大野城市教育委員会教育長	久野 英彦
教育部長	後藤 幹生
社会教育課長	岡部 弥之助
課長補佐	白水 岩人
主 査	舟山 良一
主 事	浦山 敏弘（庶務担当）
技 師	向 直也
	徳本 洋一（調査担当）
囑 託	岸野 和子

### 【平成17年度（F地点発掘調査）】

大野城市教育委員会教育長	古賀 宮太
教育部長	小嶋 健
社会教育課長	水野 邦夫
文化財担当係長	舟山 良一
主 査	徳本 洋一（調査担当）
	石木 秀啓
	緒方 一幹（庶務担当）
	丸尾 博恵
主任技師	林 潤也
	早瀬 賢
囑 託	西堂 将夫
	井上 愛子
	北川 貴洋
	栗津 剛史（庶務担当）

### 【令和4年度（整理作業）】

大野城市長	井本 宗司
地域創造部長	増山 竜彦
大野城心のふるさと館長	赤司 善彦
文化財担当課長	石木 秀啓
文化財担当係長	林 潤也
	上田 龍児
主査	徳本 洋一

主任主事	秋徳 敏明 (庶務担当)
主任技師	山元 瞭平
技師	齋藤 明日香
会計年度任用職員	澤田 康夫
	石川 健
	山村 智子
	深町 美佳
	照屋 真澄
	清水 康彰 (庶務担当)
	大塚 健三 (庶務担当)
整理作業員	小畑 貴子
	古賀 栄子
	小嶋 のり子
	篠田 千恵子
	白井 典子
	津田 りえ
	仲村 美幸
	水室 優
	松本 友里恵



## Ⅱ．位置と環境

### 1．地理的環境

大野城市が位置する福岡平野は、南を脊振山地、東を三郡山地に挟まれ、北は博多湾に面している。平野中央部を那珂川・御笠川が貫流し、広大な沖積平野を形成する。大野城市は福岡平野南東の最奥部に位置し、最も平野が狭くなる地峡部にあたる。古代以来この地峡部は交通の要衝で、現在でも九州縦貫自動車道・JR鹿児島本線・西鉄天神大牟田線・国道3号など九州の南北を結ぶ幹線道が走っている。市域の東側は月隈丘陵に連なる乙金山・四王寺山、南側は牛頭山に挟まれ、その中央を御笠川が貫流する。山地は早良花崗岩からなり、風化が著しく真砂土となっており、山麓部から平地丘陵部にかけて段丘が発達する。高位段丘は開析がすすみ、中位段丘は平坦部も多く、平野部では沖積地が広がる。

### 2．歴史的環境

**旧石器時代** 市域北東部の松葉園遺跡、薬師の森遺跡、原口遺跡、雉子ヶ尾遺跡、釜蓋原遺跡や市域南部の出口遺跡、横峰遺跡、本堂遺跡など丘陵上の遺跡でナイフ形石器・細石刃が確認される。周辺では南八幡遺跡、諸岡遺跡、井尻B遺跡、門田遺跡などで後期旧石器時代の遺物が分布する。

**縄文時代** 市域で草創期の遺構・遺物は確認されていないが、周辺では門田遺跡で爪形文土器が出土している。早期になると遺跡の数が増加し、市域北東部の善一田遺跡、古野遺跡、薬師の森遺跡、雉子ヶ尾遺跡、釜蓋原遺跡や市域南部の本堂遺跡といった丘陵地で押型文土器や石器が出土するほか、石勺遺跡などの平野微高地にも遺跡が分布する。前期から中期の遺跡は市域では確認されておらず、周辺でも遺跡の数が減少する。後・晩期の遺跡として牛頭塚原遺跡・日ノ浦遺跡で後期後半から晩期の住居などが確認されるほか、善一田遺跡、古野遺跡、原口遺跡、薬師の森遺跡で後・晩期の遺物が分布する。なお、薬師の森遺跡や石勺遺跡では落とし穴状遺構を確認しており、これらは縄文時代の所産である可能性が高い。

**弥生時代** 弥生時代には福岡平野全域で遺跡が増加し、沖積地にも遺跡が広がる。市域では北部から中央部の丘陵・平野部に遺跡が多い。

**【前期】** 川原遺跡や薬師の森遺跡で板付Ⅰ式期にさかのぼる集落がある。墳墓は御陵前ノ後遺跡（前期中頃）、中・寺尾遺跡（前期中頃から中期）、塚口遺跡（前期後半から末）で甕棺墓・土坑墓・木棺墓などが営まれる。南部では牛頭日ノ浦遺跡で前期後半の甕棺墓・土坑墓がある。また御陵遺跡では前期中頃から末の集落が確認されている。前期末頃には仲島遺跡、石勺遺跡、ヒケシマ遺跡など平野部で集落の数が増加し、これらの多くは中期へと続く。なお、周辺地域では板付遺跡や那珂遺跡で早・前期の環濠集落が成立し拠点集落となる。

**【中期】** 市域では平野部の仲島遺跡、石勺遺跡、ヒケシマ遺跡が前期末から中期を通して継続する集落である。丘陵地でも北部の中・寺尾遺跡、森園遺跡で中期前半から後半に集落が営まれ、南部でも本堂遺跡で小規模な集落がある。墳墓遺跡は前期から継続する中・寺尾遺跡や、森園遺跡で中期後半を中心にした甕棺墓群があるほか、平野部の石勺遺跡や瑞穂遺跡で甕棺墓を主体とする墳墓がある。周辺では春日丘陵に大規模な集落・墳墓が出現し、青銅器生産も開始される。特に須玖岡本遺跡D地点甕棺は約

30 面の前漢鏡・ガラス璧・多数の青銅器を副葬し「王墓」と称される。

【後期】 中期以来の集落である仲島遺跡、石勾遺跡、中・寺尾遺跡、森園遺跡、松葉園遺跡、本堂遺跡などが存続するほか、村下遺跡、榎町遺跡で新たな集落が出現する。仲島遺跡では貨布・銅鏡片や青銅器鍔型などが出土しており拠点的な集落となる。周辺地域では中期以降、春日丘陵一帯や那珂・比恵遺跡群が拠点集落として継続しており、特に春日丘陵一帯は『三国志』『魏書』東夷伝倭人条に記された「奴国」の中心的な地域と位置づけられる。

## 古墳時代

【前期】 古墳時代になると福岡平野でも前方後円墳が出現し、那珂川流域を中心に首長墓級の前方後円墳が分布する。福岡平野最古式の前方後円墳として、三角縁神獣鏡が出土した那珂八幡古墳（全長 75 m）がある。これに後続する盟主墳として安徳大塚古墳（全長 62 m）や三角縁神獣鏡が出土したとされる卯内尺古墳がある。市域において明確な前方後円墳は確認されていないが、御陵古墳群周辺にはかつて前方後円墳があったという指摘があるほか、江戸時代には三角縁神獣鏡が出土しており、有力な在地勢力が存在したと考える。

集落では、福岡平野の拠点集落として博多湾沿岸の西新町遺跡、博多遺跡群や那珂・比恵遺跡群がある。市域では仲島遺跡、石勾遺跡、村下遺跡が弥生時代後期から営まれ、瑞穂遺跡、原ノ畑遺跡などでも集落が出現する。この他、森園遺跡や本堂遺跡でも再び集落の形成が認められる。

【中期】 福岡平野の盟主墳として初期横穴式石室を導入した老司古墳（全長 76 m）があり、博多遺跡群でも博多 1 号墳（全長 56 m）が築造される。また、剣塚北古墳、井尻 B 1 号墳、野藤 1 号墳、貝徳寺古墳など中規模の前方後円墳・円墳がある。市域では 5 世紀前半の笹原古墳（円墳：30 m）があり、隣接して 5 世紀後半の成屋形古墳（帆立貝式前方後円墳：32 m、太宰府市）が築造され、御笠川流域の盟主墳と考えられている。5 世紀後半には牛頭塚原古墳群や古野古墳群で群集墳の形成が始まる。このうち古野古墳群では、鏡・鈴・鉄剣・農具類といった豊富な副葬品を有する古墳もあり、成屋形古墳に次ぐような有力な人物がいたことを示す。

集落遺跡は福岡平野全域で非常に希薄で、前代までの拠点集落である那珂・比恵遺跡群や西新町遺跡は消滅する。周辺では高畑遺跡、立花寺 B 遺跡などで滑石製品の生産を伴う集落が展開する。市域では石勾遺跡が弥生終末から続く大規模な集落で、初期のカマドや朝鮮半島系の軟質土器が出土し、滑石製品の生産も伴うことから拠点集落と位置づけられる。このほか仲島遺跡、中・寺尾遺跡、森園遺跡、金山遺跡、原田遺跡、上園遺跡などで集落が営まれる。

【後期】 福岡平野の盟主墳として 6 世紀中頃築造の東光寺剣塚古墳（全長 75 m）や日拜塚古墳（全長 46 m）といった前方後円墳がある。6 世紀後半には大型前方後円墳は姿を消し、これに代わり 6 世紀後半以降、福岡平野一帯の丘陵上には直径 10 m ほどの小円墳を主体とした群集墳が爆発的に増加する。市域では月隈丘陵から乙金山・四王寺山麓にかけて大規模な群集墳が築造され、善一田古墳群・王城山古墳群をはじめとする乙金山古墳群がこれに該当する。善一田古墳群は朝鮮半島系資料や鉄器生産に関わる資料が豊富であり、王城山古墳群では 7 世紀を中心とした新羅土器が集中することが特徴である。このうち、善一田 18 号墳が最古・最大（6 世紀後半築造・直径約 25 m）の円墳で、豊富な副葬品を有することから当地域の盟主的な墳墓に位置づけられる。また、市域南部では須惠器工人の墓と考えられる



牛頭中通・後田・小田浦古墳群や、6世紀後半の大型円墳である日ノ浦1号墳がある。また、特殊な墳墓として、梅頭窯跡では窯跡を転用した墳墓があり象嵌大刀を副葬する。これらの横穴式石室を主体部とする古墳や群集墳は6世紀後半から7世紀にかけて築造し、8世紀代まで追葬を行うものもある。

集落は6世紀中頃以降、福岡平野の各地で再び増加する。比恵遺跡群では6世紀後半に大型建物群が出現し、「那津官家」の可能性が指摘される。市域では仲島遺跡、塚原遺跡、日ノ浦遺跡、上園遺跡、梅頭遺跡、本堂遺跡、粟師の森遺跡などで集落が営まれ、7世紀代まで存続するものが多い。仲島遺跡は集落規模が大きく、多数の掘立柱建物の存在や多量の馬骨・子持ち勾玉などの存在から、拠点的な集落と考えられる。牛頭窯跡群周辺の塚原遺跡、日ノ浦遺跡、上園遺跡、梅頭遺跡、本堂遺跡などは須恵器工人集落と位置づけられる。また、粟師の森遺跡は一部に渡来人が居住し、鉄器生産・須恵器生産に関わる集落であることが明らかになっており、先述の乙金古墳群との対応関係が確実視できる。

なお、牛頭窯跡群の開始は6世紀中頃に求められ、乙金・四王寺山麓の乙金窯跡・雉ヶヶ尾窯跡もこれに近接した時期に須恵器生産を開始する。

**飛鳥時代** 7世紀前半代は集落・墳墓ともに古墳時代後期の様相を踏襲する。墳墓で注目すべきは大野城市と福岡市博多区の境界に位置する今里不動古墳で、7世紀前半前後の大型円墳(直径約30m)とされ、御笠川右岸地域の盟主墳である。また、6世紀後半の比恵遺跡群に展開した大型建物群は那珂遺跡群に移動する。この時期、牛頭窯跡群の須恵器生産はひとつのピークをむかえる。また、野添窯や月ノ浦窯などでは初期瓦を生産しており、那津官家比定地の那珂遺跡に供給されたことが知られる。牛頭窯跡群周辺では集落の数や住居の数が飛躍的に増加し、牛頭塚原遺跡、日ノ浦遺跡などは前代から続く須恵器工人集落と考えられている。

7世紀中頃から後半には、中国・朝鮮半島を含む東アジア世界が激動の時代をむかえる。日本も白村江の戦(663年)で敗戦を経験し、日本史上初の国際的な危機に直面する。これに伴い664～665年にかけて水城・大野城が相次いで築造される。国内情勢でも壬申の乱(672年)が起り、これを機に律令体制に基づく本格的な中央集権国家を形成していくことになる。また、大宰府では第1期政庁が成立する。

このような時代背景の中で、市域全体で遺構・遺物の減少が認められる。例えば、粟師の森遺跡では7世紀中頃から後半にかけて一時的に遺構・遺物が希薄となり、乙金古墳群では6世紀末から7世紀前半に古墳築造のピークをむかえ、7世紀後半にかけて順次築造数が減少していく。また、牛頭窯跡群における窯の数も減少し、一時的に須恵器生産も停滞期をむかえる。

**奈良時代** 奈良時代になると律令国家が成立し、九州も大宰府を中心とした支配体制が整い、各地に官衙が設置される。また、この時期には官道も整備され、井相田C遺跡、板付遺跡、那珂久平遺跡や谷川遺跡、先ノ原・春日公園内遺跡などで道路状遺構が確認されている。集落遺跡として市域では仲島遺跡や隣接する井相田C遺跡で掘立柱建物を中心とした集落が形成される。周辺の高畑遺跡は「高畑廃寺」あるいは「那珂郡衙」の可能性が指摘され、麦野遺跡・南八幡遺跡で大規模な村落が成立し、御笠川中流域の官道沿いに官衙や村落が営まれた景観が復元できる。牛頭窯跡群では8世紀前半に窯の数が増加し、供膳具を中心に大量生産が行われる。このほか、本堂遺跡群では村落内寺院と考えられる遺構が確認されている。また、粟師の森遺跡では集落の経営を再開し、鈎帯金具・ヘラ書き須恵器・越州窯系青磁・製

塩土器などの特殊遺物が出土する。鍛冶炉に加え、須恵器窯に関連する遺構もあり、古墳時代に引き続き手工業生産に関わる集落と考えられる。

なお、水城では8世紀前半に門の建て替えがあり、東西門や欠堤部周辺を中心に水城に関わる遺構・遺物が確認されている。

**平安時代** 平安時代前半の9～10世紀代は福岡平野全域で遺跡数が減少する。牛頭窯跡群も規模が縮小し、9世紀中頃には操業を停止する。市域の遺跡も減少し、前代に見られた仲島遺跡、井相田C遺跡や表野遺跡の集落も9世紀代に消滅する。9～10世紀代では牛頭月ノ浦窯跡、本堂遺跡、塚口遺跡、中・寺尾遺跡で土坑墓、薬師の森遺跡で土坑墓や掘立柱建物を検出している。

なお、9世紀前半に改称した鴻臚館は対外交渉の窓口として機能し、9世紀後半以降は中国商人の滞在・交易施設となり、初期貿易陶磁器が大量に出土している。

平安時代後半になると、11世紀中頃から後半に大宰府政庁・鴻臚館が廃絶し、代わって博多遺跡群において中世都市「博多」が成立する。律令制は完全に崩壊し、各地で武士が活躍する時代をむかえる。市域においては塚口遺跡、森園遺跡、松葉園遺跡で輸入陶磁器を埋納する土坑墓が確認されており、有力者の存在を示す。集落は松葉園遺跡、御笠の森遺跡、宝松遺跡、上園遺跡で確認されている。なお、水城の外濠は平安時代末頃にほぼ埋没し、西門周辺では経塚の形成や棒状土製品など土器生産に関わる遺物が集中することから、律令制の弛緩とともに本来的な役割が終焉をむかえていくこととなる。なお、土師器・瓦器焼成に関わる棒状土製品の出土は、水城西門周辺から上園遺跡、本堂遺跡周辺にかけて濃密に分布し、牛頭窯跡群終焉以降の土器生産の再開を示す。

**鎌倉時代～戦国時代** 市域では御笠の森遺跡、本堂遺跡、石匂遺跡、川原遺跡、薬師の森遺跡などで当該期の遺構が確認されている。薬師の森遺跡では12世紀後半から14世紀にかけての中世墓が多数営まれ、集落を囲むと考えられる区画溝やピット群が広がっており、比較的有力な集団が存在していたと考えられる。御笠の森遺跡は11世紀後半以降継続して集落が営まれる。16世紀後半から17世紀中頃に多数の方形区画溝が展開し、有力農民層の集落跡と考えられている。また、戦国期の山城として乙金の唐山城、牛頭の不動城があるが詳細は不明である。

**近世** 後原遺跡、御笠の森遺跡、雑餉隈遺跡、村下遺跡、川原遺跡、屏風田遺跡などで遺構・遺物が確認されるが、当該期の遺跡の多くは現在の集落域と重複していると考えられる。このうち、市域中央部の後原遺跡は「白木原村」の本村にあたり、屋敷地や墓地在確認されており、地祇神社を中心とした集落景観が復元できる。また、市域北東部の薬師の森遺跡、原口遺跡、古野遺跡では近世から近現代にかけての墓地が造られ、乙金村の集団墓地として位置づけられる。

**近代・現代** 市域北東部の王城山遺跡、古野遺跡、原口遺跡で太平洋戦争時の防空壕跡を調査しており、このうち王城山遺跡のものは規模や遺物の内容から地下疎開工場と位置づけられる。また、市域中央部の野添遺跡では、本土決戦に備え野砲を設置したと考えられる洞窟壕が確認されている。

### Ⅲ. 石坂窯跡D地点

#### 1. 調査の概要

石坂窯跡群は牛頭須志器窯跡の一支群（平野川支群）にあたる。調査地は牛頭山から北側に派生する丘陵のうち、南側～東側斜面に位置する（大字牛頭2352番5）。発掘調査は土砂採取工事に伴い実施した。平成2年5月22日から着手し、同6月12日に完了した。調査面積は890㎡で、出土遺物は須志器を中心にパンケース45箱分出土した。

5号窯跡は南側に、それ以外は谷を挟んだ北側に位置する。5号窯跡は比較的残りが良いが、それ以外の窯跡は林道の設置に伴い調査前には既に削平を受けていたため急傾斜地を呈しており、窯の残存状況は極めて悪い。5号窯跡以外は地形測量図・遺構

配置図がないため、それぞれの窯跡の詳細な位置関係は不明な点が多い。調査時のメモから遺構配置図を復元し、第3図に掲載した。これによると、北側から4号窯跡・3号窯跡・2号窯跡の一群があり焚口が東側を向く。このうち、2・3号窯跡はほぼ接するように位置する。この一群とやや離れた南側に、北側から1号窯跡・0-A号窯跡・0-B号窯跡があり、焚口が東側を向く。このうち、0-A号窯跡・0-B号窯跡はほぼ接するように位置する。

5号窯跡は完存、1号窯跡は大半が完存、0-A・0-B号窯跡は部分的に残存し、これらについては全面的に調査を実施した。2・3・4号窯跡は調査区壁面で窯体の断面が観察されたのみで、写真による記録だけが残る。

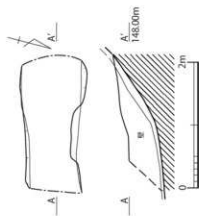
#### 2. 0-A号窯跡

##### (1) 窯の構造（第4図、図版1～3）

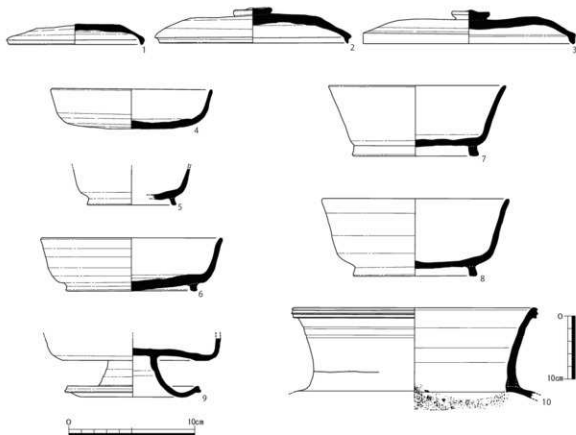
西側に0-B号窯跡が近接する。削平が著しく、燃焼部及び焼成部のそれぞれ一部のみが遺存する。地下式窖窯と考えられ、焼成部から燃焼部にかけての2.1mを検出した。燃焼部の幅は0.8m、焼成部の幅は0.9～0.95m、平面は寸胴形を呈する。燃焼部はほぼ水平、焼成部の傾斜角度は約33度、窯の主軸方位はN-103°-Eである。操業回数や灰原の範囲等は不明である。表土から蓋杯・杯・甕・短頸壺、0-A・0-B号窯跡灰原から蓋杯・杯・台付皿・長頸壺・高杯などが出土した。



第3図 D地点窯跡位置略図



第4図 0-A号窯跡実測図 (1/60)



第5図 O-A号窯跡表土層出土遺物実測図(1/3・1/6)

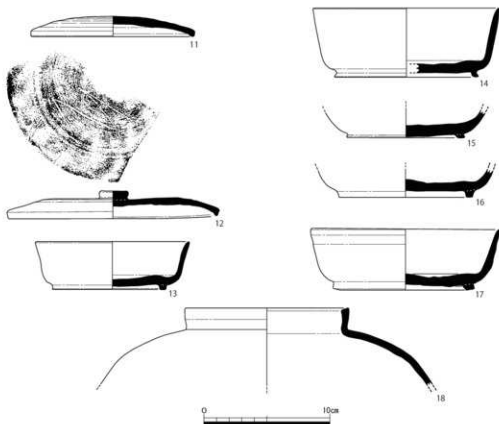
(2) 出土遺物 (第5・6図、図版24)

【O-A号窯跡表土層】

**須恵器 (1～10)** 1～3は杯蓋で、口縁部は端部を小さく折り曲げ、断面三角形を呈する。1はつまみを有しないもので、2・3は扁平な擬宝珠様のつまみをつける。いずれも天井部外面上半は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデを施す。4は杯である。丸みを帯びた底部から直立気味に立ち上がる口縁部は端部を丸く収める。底部外面はヘラ切り後ナデ、他は回転ナデである。5～8は杯身で、断面方形の短い外開きの高台が付く。5・6は口縁部が短く直立する。6は底部外面が回転ヘラ切り後ナデ、他は回転ナデである。7・8は深めの杯で、やや外反気味に直立する。7の底部外面は回転ヘラケズリを、8は回転ヘラ切り後ナデを施す。底部内面はいずれも回転ナデ後ナデである。9は高杯であるが焼け歪みによる変形がある。脚裾端部は断面三角形に引出し、端部平坦面は中央を窪ませ擬凹線文状を呈する。杯底部外面はヘラケズリ後回転ナデを、内面は回転ナデ及びナデをそれぞれ施す。10は甕で、口径40cm前後を測る。口縁端部を肥厚させ端部外面に2条、頸部外面に2条の沈線をそれぞれ巡らす。頸部内外面には板状工具による横方向のナデを施し、体部内面には同心円文の当具痕が残る。

【O-A号窯跡竈体内埋土】

**須恵器 (11～18)** 11・12は杯蓋である。11はつまみが無く、丸みのある天井部からのびる口縁端部は折り曲げが弱く肥厚しない。12はボタン様のつまみを有し、口縁端部は短く折り曲げて断



第6図 O-A号窯跡室内埋土出土遺物実測図 (1/3)

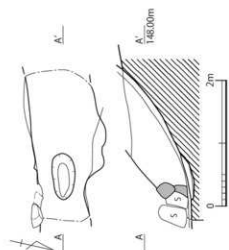
面三角形に肥厚させる。いずれも天井部外面上半は回転ヘラケズリし、内面は回転ナデ後ナデである。12は天井部外面にヘラ記号を有する。13～17は杯身である。断面方形の低い高台が付くもので、小型(13)と中型(14～17)がある。いずれの口縁部も直線的にのび、直角近くに立ち上がる。底部内面は回転ナデ後ナデで、外面は13・14が回転ヘラケズリ、15はヘラ切り未調整、17がヘラ切り後ナデである。18は短頸壺で、口縁部が膨らみ気味に直立する。口縁端部は内湾する平坦面を有し、中央がわずかに窪む。

### 3. O-B号窯跡

#### (1) 窯の構造 (第7図、図版1～3)

東側にO-A号窯跡が近接する。削平が著しく、燃焼部及び焼成部のそれぞれ一部のみが遺存する。地下式窖窯と考えられ、焼成部から燃焼部にかけての2.4mを検出した。燃焼部の幅は0.75m、焼成部は奥壁側に向かって「ハ」の字形に開き、最大幅は1.25mである。平面形は不明である。燃焼部はほぼ水平、焼成部の傾斜角度は約35度、窯の主軸方位はN-78°-Eである。燃焼部と焼成部の境界付近の床面には、長さ0.75m、幅0.35m、深さ0.1mほどの舟底状ピットがある。また、燃焼部の左側壁には高さ0.3～0.5mほどの人頭大の石を立てており、側壁の補強の石材と考えられる。操業回数や灰原の範囲等は不明である。窯体内から蓋杯・皿・甕・短頸壺などが出土した。



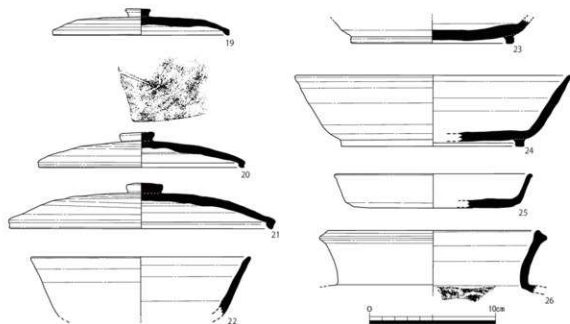


第7図 O-B号窯跡実測図 (1/60)

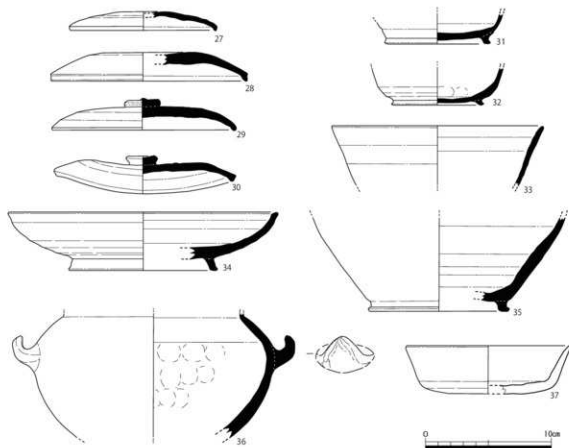
面は回転ナデ後ナデで、外面は23・24がヘラ切り後ナデである。25は皿である。平坦な底部にやや外反気味に立ち上がる口縁部で、端部はわずかに外方へ突き出す。底部外面は丁寧なヘラケズリで、他は回転ナデである。26は甕である。外反する口縁部は端部を内外に肥厚させる。体部内面に同心円当具痕が残り、他は口頸部内外面とも回転ナデである。

#### 【O-A・B号窯跡灰原】

**須恵器 (27～36)** 27～30は杯蓋である。いずれも口縁端部を折り曲げ突出させるもので、27・29は突出が弱い。つまみは27・28が天井部中央を欠損しているため、つまみの有無は不明だが、29は扁平な擬宝珠様、30はボタン様のつまみを有する。いずれも天井部外面上半は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ後ナデである。31～33は杯身である。31・32は端部を外方へ引き出し、踏ん張る



第8図 O-B号窯跡窯体内埋土出土遺物実測図 (1/3)



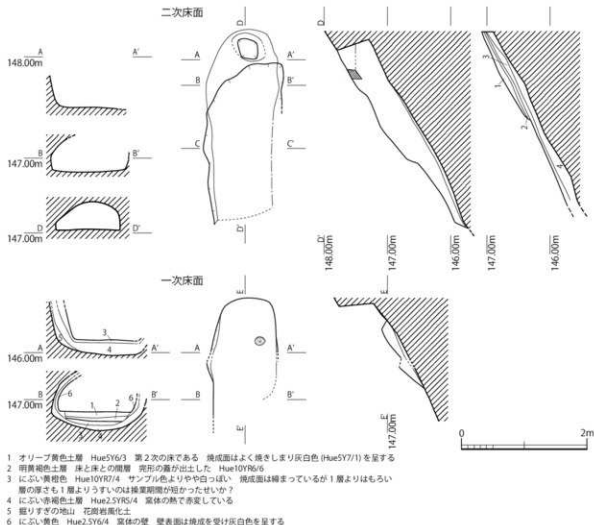
第9図 O-A・B号窯跡灰原出土遺物実測図(1/3)

形態の高台を有す。体部は湾曲しながら立ち上がる。31は底部外面が回転ヘラケズリ、内面には強いナデを施す。32は底部外面をヘラケズリ後ナデ、内面には指頭痕が残る。33は底部を欠く資料で、口縁部は直線的に開き、内外とも回転ナデされる。34は高台付の皿である。口径21.4cmを測り、口縁端部は内湾気味に立ち上がり、端部を面取りし内傾する平坦面に仕上げる。高台は高さ1cmほどで、端部は小さく外方へ突き出し、踏ん張る形状を示す。35・36は壺である。35は長頸壺の体部下半である。高台端部はわずかに外方へ突き出す。外面下半は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。36は口縁部と底部を欠損するが、上方へ跳ねる把手を有する短頸壺である。体部下半は回転ヘラケズリ、他は回転ナデで、体部内面中位に指頭痕が顕著に残る。

**土師器(37)** 37は杯である。底部はわずかに丸みを持ち、体部は外反気味に立ち上がる。底部外面はヘラ切り後ナデ、底部と体部の境周辺はヘラケズリ、他は回転ナデである。黄褐色を呈し、外底部に酸化炎焼成時の煤痕が残る。

### (3) 小結

O-A・O-B号窯跡ともに残存状況が悪いがいずれも8世紀に操業した小型の窯跡である。良好な出土状況ではないがO-A号窯跡ではVII A期、O-B号窯跡ではVII B期を中心とした土器群が出土している。近接して立地するものの、同時操業ではなく、異なる時期に操業した可能性が高い。



第10図 1号窯跡実測図 (1/60)

## 4. 1号窯跡

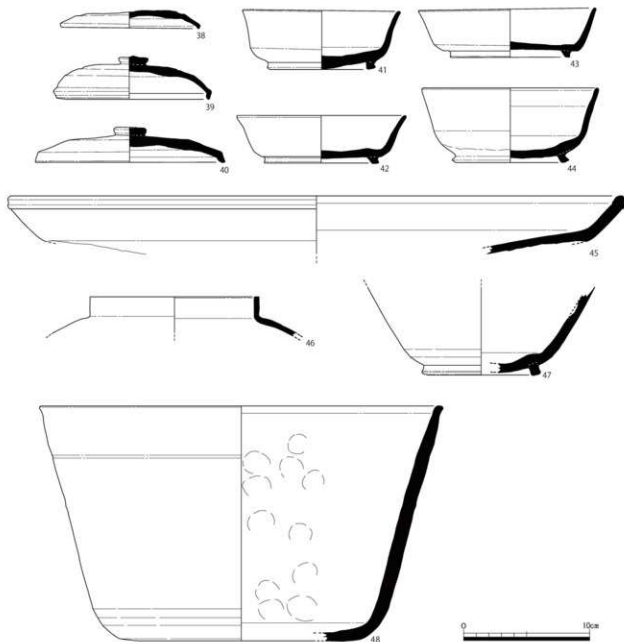
## (1) 窯の構造 (第10図、図版4～6)

O-A・O-B号窯跡と2号窯跡の間に位置する。燃焼部及び右側壁が削平のため消滅する。地下式竈室で、残存長3.05m、焼成部幅0.9～1.15m、平面寸胴形を呈する。床面の傾斜角度は27度ほどで、原因に方位の記録がないため窯の主軸方位は不明であるが、焚口が東側を向く。煙道は直立し、上面の直径は0.4mほどである。一部に天井部が残存し、床面からの高さは0.4mで、横断面はかまぼこ形を呈する。2次の作業面が確認でき、最終作業面は地山由来と考えられる明黄褐色土でかき上げし、当初作業面の左右壁を5～10cmほど拡張している。灰原の範囲等は不明である。

## (2) 出土遺物 (第11～13図、図版24～26)

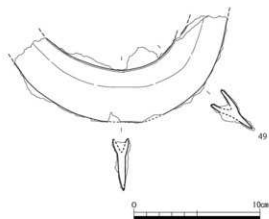
## 【表土層】

須恵器 (38～48) 38～40は杯蓋で、口縁端部を折り曲げるものである。38はつまみが無く、口縁端部の突出は弱い。天井部外面上半はヘラ切りで、内面は回転ナデである。39は扁平な擬宝珠様のつまみが付く。天井部の高まりが強く、口縁端部の折り曲げは長い。40はボタン様のつま



第11図 1号窯跡表土層出土遺物実測図①(1/3)

みを有する。いずれも天井部外面上半は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ後ナデである。41～44は杯身である。いずれも断面方形の低い高台を有する。口縁部は43が直線的に立ち上がるが、他はやや湾曲しながら開く。いずれも底部外面はヘラ切りで、41・44はヘラ切り後ナデている。43は底部内面に回転ナデ後、工具ナデを施す。45は盤で、口径49.0cmを測る大型のものである。底部は焼け歪みの為か膨らみ気味となる。口縁部は直線的に開き端部を瘤状に肥厚させ、外側に1条の擬凹線縁を作り出す。底部から口縁部下位の外面にヘラケズリ、他は回転ナデを施す。46・47は壺である。46は口縁部が内傾気味に直立する短頸壺で、口体部内外面に回転ナデを施す。47は体部下半から底部の資料で、膨らみ気味の胴部である。胴部外面下位に回転ヘラケズリを施し、底部外面中央はヘラ切り後ナデ、他は回転ナデである。48は口径32cm、器高8.7cmを測る大型の鉢



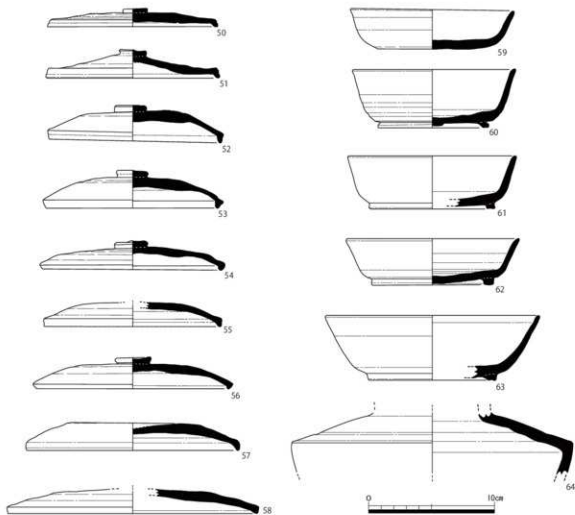
第12図 1号窯跡表土層出土  
遺物実測図② (1/3)

である。底部は平底で体部は直線的に開き、口縁端部をわずかに薄くし、小さく外反させる。外面の口縁部下4cm程の位置に1条の沈線を巡らす。底部外面は回転ヘラケズリされ、他は回転ナデである。体部内面には多くの指頭痕が残る。

**鉄製品 (49)** 49は鉄製U字型鋤先である。刃部の大部分を残すが他は欠損する。残存幅は約3.9cm、刃部の幅約2.7cmを測る。

**【窯体内埋土】**

**須恵器 (50～64)** 50～58は杯蓋で、口縁端部を嘴状に折り曲げるものであるが、58は突出が弱い。57はつまみが剥離しているがほぼ完形品である。50～53・56はボタン様、54は擬宝珠様のつまみを有する。55・58はつまみの有無は不



第13図 1号窯跡窯体内埋土出土遺物実測図 (1/3)

明である。51は笠状の断面形を呈し、特異な形である。天井部外面は54がヘラ切り未調整である。他は、いずれも天井部外面上半は回転ヘラケズリを行う。天井部内面はいずれも回転ナデ後ナデである。59は杯で、器壁がやや厚めの平底から口縁部が直線的に開く。底部外面はヘラ切り未調整、他は回転ナデである。60～63は杯身である。高台は断面四角形の低いもので、60はわずかに外方へ踏ん張る。口縁部は直線的に開くが、63は内湾気味に立ち上がる。底部外面は60がヘラ切り未調整の他はヘラケズリである。いずれも内面は回転ナデされ、底部内面にはナデが認められる。64は長頸壺の肩部の資料である。肩部は稜を成し、下半の胴部は丸みを帯びる。肩部に沈線を巡らす。内外とも回転ナデを主に行うが、頭部内面には指頭痕が残る。

### (3) 小結

1号窯跡は全長3.05m以上、平面寸胴プランの小型の直立煙道窯である。操業時期は窯体内出土遺物からⅦB期と考えられる。

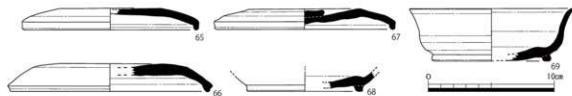
## 5. 2号窯跡

### (1) 窯の構造 (図版7)

北側に3号窯跡が接する。断面の一部のみを確認したに留まるため詳細は不明であるが、小型の窯跡であることは間違いない。

### (2) 出土遺物 (第14図)

#### 【窯体内埋土】



第14図 2号窯跡窯体内埋土出土遺物実測図(1/3)

**須恵器 (65～69)** 65～67は杯蓋である。いずれも口縁端部を折り曲げて肥厚させるものである。65・66はつまみの有無は不明であるが、67はボタン様のつまみを付ける。いずれも天井部外面上半はヘラケズリをし、内面は回転ナデ後ナデである。68・69は杯身である。断面方形の低い高台が付く。69は口縁部がS字状に湾曲しながら外反する。いずれも底部外面はヘラ切り未調整、他は回転ナデである。

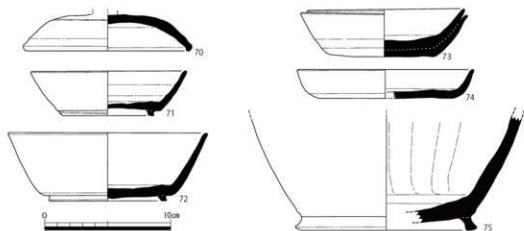
### (3) 小結

規模・構造などの詳細は不明であるが、操業時期は窯体内出土遺物からⅦB期と考えられる。

## 6. 3号窯跡

### (1) 窯の構造 (図版7)

南側に2号窯跡が接する。断面の一部のみを確認したに留まるため詳細は不明であるが、小型の窯跡であることは間違いない。



第15図 3号窯跡表土層出土遺物実測図(1/3)

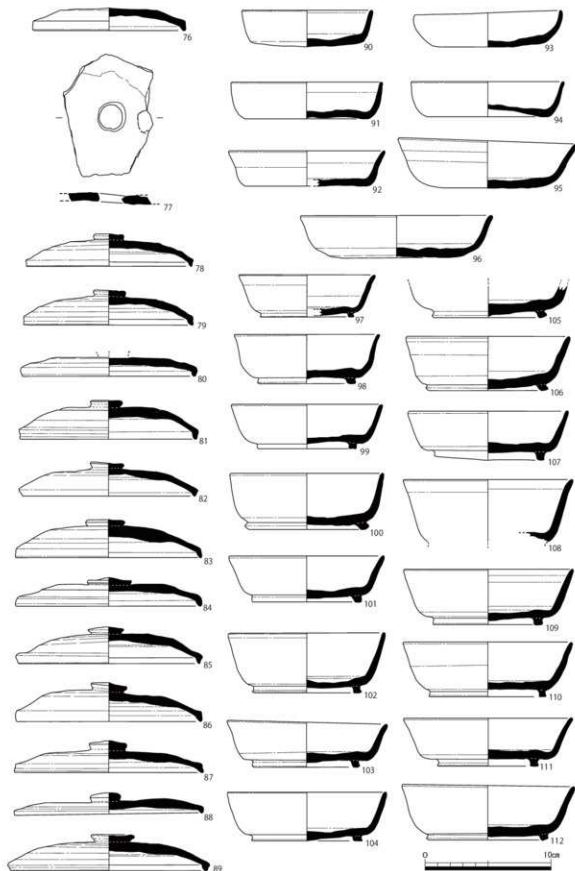
(2) 出土遺物 (第15～18図、図版26・27)

【表土層】

**須恵器 (70～75)** 70は杯蓋である。丸味のある天井部で、口縁部端をわずかに折り曲げて肥厚させる。天井部につまみの剥離痕が残る。天井部外面はヘラ切り後ナデを、内面は回転ナデ後ナデを施す。71・72は外方に突き出した高台を持つ杯身である。口縁部は直線的に開き、底部との境に稜を作る。いずれも底部外面はヘラ切り後ナデで、底部内面は回転ナデ後ナデ、他は回転ナデである。71には底部外面に工具によるナデが格子状に残る。73は杯で、重ね焼きにより2点が融着したものである。内面に火櫛様の痕跡が残る。底部及び口縁部下半はヘラケズリされ、内面は回転ナデである。74は皿である。底部外面はヘラ切り後ナデを、内面には回転ナデ後ナデを施す。75は壺である。底部中央及び体部上半を欠く。高台は外方へ踏ん張り、端部を肥厚させる。底部外面には回転ヘラケズリを施し、体部内面は回転ナデ後縦方向の工具によるナデが施される。

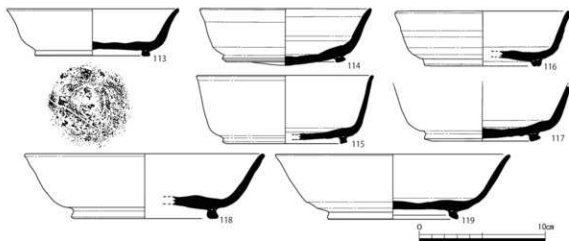
【灰原土層】

**須恵器 (76～134)** 76～89は杯蓋で、いずれも口縁端部を折り曲げて嚙状に肥厚させるものである。76はつまみの無いもので、天井部外面はヘラ切り後ナデを、内面は回転ナデ後ナデである。77はつまみの剥離痕がある天井部で、径2cm弱の円孔が焼成前に穿たれる。80はつまみがあるが形状不明。81・83～87は擬宝珠様、78・79・82・88・89はボタン様のつまみを有する。78～89はいずれも天井部外面上半は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ後ナデである。全体的に丸味のある形態であるが、78・84・88は比較的扁平である。80・81・84・85・88はほぼ完形である。90～96は杯である。90・91・94は底部からほぼ直角に立ち上がる口縁部で、底部外面は94が回転ヘラケズリ、他はヘラ切り後ナデである。91は工具状の当りを残す。93は口縁部が内湾して立ち上がるもので、底部外面はヘラ切り後工具様のナデがある。92・95は口縁部を中位で外反させる。底部外面は92はヘラ切り後工具様のナデ、95が回転ヘラケズリである。95の底部には板状圧痕が残る。96は中型品で、口縁部は丸みを持ちながら立ち上り、端部付近をわずかに外反させる。底部外面はヘラ切り未調整である。いずれも底部内面は回転ナデ後中央付近をナデている。93～95はほぼ完形である。97～119は杯身で、断面方形の低い高台を有する。100・102・104～106・114・117～119のよう



第 16 图 3号窑跡灰原上層出土遺物実測図① (1/3)



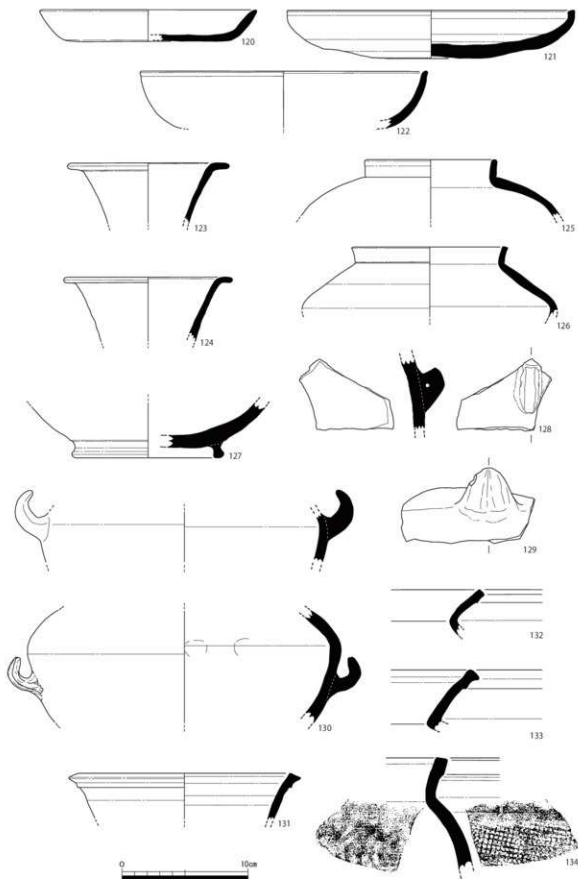


第 17 図 3号窯跡灰原上層出土遺物実測図②(1/3)

に端部を外方へ引き出すものもある。いずれも口縁部から体部は直線的に開くが、98・113のように中位でさらに外反するものがある。口径より小型(97・98)、大型(118・119)、中型に分けられ、108・115・117は深めである。底部外面は回転ヘラケズリ後ナデが多く、98・100・101・103・105～107・109・112・116・117はヘラ切り後ナデである。99・113はヘラ切り未調整、114はヘラ切り後ハケ状工具によるナデ、118はヘラ切り後回転ナデをそれぞれ施す。119は底部から体部との境までヘラケズリを施す。いずれも内面は回転ナデが主で、底部中央付近はナデである。120～122は皿である。120は口縁部が直線的に開き、底部外面はヘラ切り、内面は回転ナデ後ナデを施す。121は丸味のある底部を内湾させて引き上げ、端部を直に折り曲げて口縁部としている。口縁端部はやや内傾する平坦面を作り出し、形面的には高杯の杯部に似る。底部外面はヘラ切り後ヘラ状工具によるナデ、内面は回転ナデ後ナデを施す。122は内湾する口縁部で、底部を欠く。口縁端部はわずかに外方へ折り曲げる。内外面ともに回転ナデを施す。形態から盤とすべきかもしれない。123～130は壺である。123・124は長頸壺の口縁部の資料である。直線的にのびる口縁部は端部を水平に折り曲げ、外方へ引き出す。内外とも回転ナデである。125・126は短頸壺である。口縁部は短く直立するが、126は外方へ開き気味となる。内外とも回転ナデである。127は壺の底部で、端部が肥厚し外方へ踏ん張る高台が付く。底・体部外面はヘラケズリ、高台部周辺は強いナデを施す。128～130は把手付きの壺である。128は把手である。上方はヘラで面取り、中央から下方まではヘラケズリ後ナデを施し、中央に穿孔をおこなう。129・130は同じ形の把手が付くもので、129は壺の肩部、130は肩部よりやや下がったところに貼り付ける。129は体部内外面ともに回転ナデを施す。130は体部外面上半に回転ナデ、下半にナデを施し、体部内面は回転ナデである。内面肩部には把手貼付け時の指痕が残る。131～134は甕の口縁部である。131は端部を引出し断面三角形とする。132～134は端部を方形に肥厚させ、端部外面を窪ませる。口縁部内外面ともに回転ナデ仕上げである。134は体部外面に格子目タタキ痕、内面に同心円の当具痕が残る。

### (3) 小結

規模・構造などの詳細は不明であるが、操業時期は大半が灰原出土のものであり、明確ではないが、ⅦA～ⅦB期と考えられる。



第 18 图 3 号窑跡灰原上層出土遺物実測図③ (1/3)

## 7. 4号窯跡

### (1) 窯の構造 (図版7)

3号窯跡の北側に位置する。断面の一部のみを確認したに留まるため詳細は不明である。出土遺物はなく、作業期間等は不詳。

## 8. 5号窯跡

### (1) 窯の構造 (第19図、図版8～11)

比較的残存状況が良好で、全形を知ることができる。平面寸胴形の地下式窖窯で、奥壁から2.05mの位置でやや絞りこみがあり傾斜が変わることから、焼成部と燃焼部の境にあたと考えられる。この付近の床面には長軸1.0m、短軸0.5m、深さ0.2mの落ち込みがあり、舟底状ビットの可能性があり、作業時には埋め戻されていたと考えられる。焼成部幅は1.0～1.05m、長さ2.05mで、傾斜角度は25度である。焼成部床面には焼台が設置され、床面上で蓋杯を中心に須恵器が出土した。奥壁側の一部に天井部が残り、床面から天井部までの高さは約0.8mである。煙道は直立し、上面は直径0.4mほどの円形を呈する。焼成部境から北側は「ハ」字形に開き前庭部を形成する。窯の下方及び左右が土坑状に落ち込み、この部分には灰層を形成する。土層層を確認する限り、作業面は1面と考えられる。窯の主軸方位はN-37°-Eである。なお、後述するように、窯の南側(P1)北西側(P2)に土坑がある。

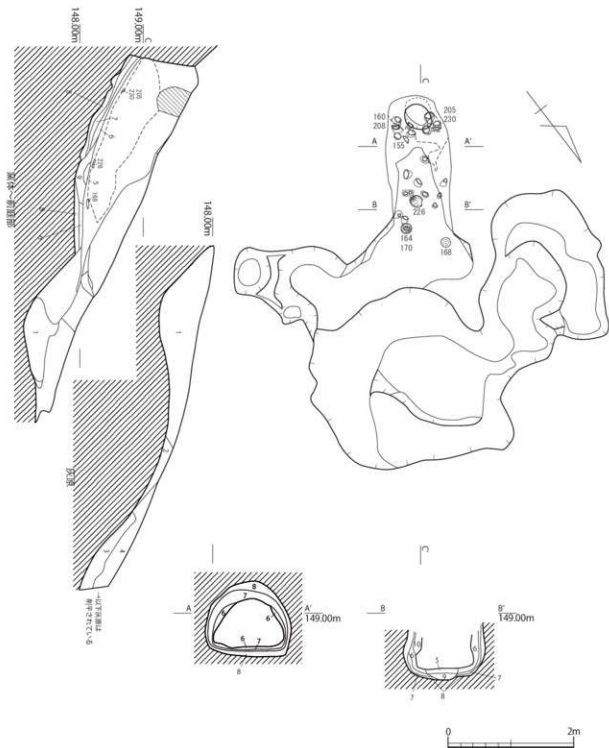
### (2) 出土遺物 (第20～29図、図版28～35)

#### 【表土層】

**須恵器 (135～145)** 135・136は杯蓋である。135は口縁端部を折り曲げるが突出は弱い。高めのボタン様のつまみを有し、天井部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ後ナデを施す。136は口縁部にカエリを付けるものである。擬宝珠様のつまみを有し、天井部外面は回転ヘラケズリ後ナデ、内面は回転ナデ後ナデである。別個体の残片が天井部に付着しており、重ね焼きの痕跡が認められる。137～139は杯で、口縁部はいずれも直線的に開く。137は底部外面に不定方向のヘラケズリ、内面はナデである。138・139は底部外面にヘラ切り後ナデを施すが、138の底部は丁寧なナデである。140・141は杯身で、口縁部は直線的に外方へのびる。140は断面四角の短い高台が付く。底部外面はヘラ切り後ナデを施す。141は底部を欠く。口縁部内外面ともに回転ナデを施す。142・143は皿である。どちらも口縁部は直線的で、短く外反する。いずれも内面と口縁部外面は回転ナデを施す。142の底部外面はヘラ切り未調整で、143は底部外面に板状圧痕が残る。144は壺の蓋で、扁平な擬宝珠様のつまみを有する。口縁部はほぼ直角に折り曲げ端部は丸く仕上げる。天井部外面中央はヘラ切り後ナデ、口縁基部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ、天井部内面には回転ナデ後ナデを施す。145は把手片である。ヘラにより耳形に成形され、上位に穿孔がある。水瓶等に付く把手か。

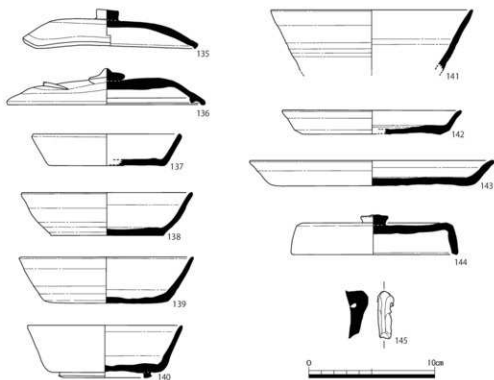
#### 【窯体内埋土】

**須恵器 (146～234)** 146～185は杯蓋である。155はつまみが剥離して不明だが、147～154・156～159は擬宝珠様のつまみを、他はボタン様のつまみを付ける。天井部が膨らみを持つもの



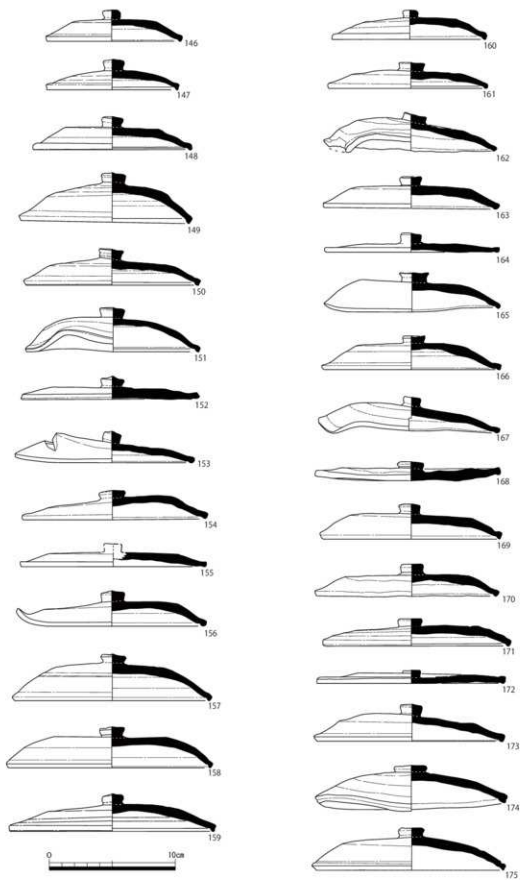
- 1 黒色土層 Hue10YR1/7/1 純粋な灰原 色調は 10YR1/7/1 よりむしろ鉛線の色といった方が近い 焼土(窯体の部分)と地山の土がブロック状に混入する
- 2 黄褐色土層 Hue10YR5/6 地山と灰層の混雑層 10YR5/6 の地山に灰原の土がしみ状に混ざる
- 3 黒色土層 Hue10YR1/7/1 基本的には 1 層に同じだが窯体の部分・地山の土等の混入量が多い
- 4 黒色土層 Hue10YR1/7/1 3 層よりも混入物が多く灰原の方が少ない むしろ焼土及び壁・天井の土などの層というべきであろうか
- 5 黄褐色土層 Hue2.5Y5/2 この 5 層と 9 層の部分はこちらだけ土を入れ替えたものと思われる
- 6 灰白色土層 Hue2.5Y8/1 花崗岩/イラン土が混雑混成をうけた部分 ブルーチーズのような色調である
- 7 に近い赤褐色土層 Hue5YR4/3 焼成を受けて赤変している
- 8 明赤褐色土層 Hue5YR5/6 この層までが赤変している
- 9 粉灰色土層 Hue10YR4/1 灰化物が混入する土層 窯やカマでからかき出したような土である この部分にピットを掘りこの 9 層の土をつめ、それが直接火を受けて 5 層のように変わったのであろうか?

第 19 図 5 号窯跡実測図 (1/60)

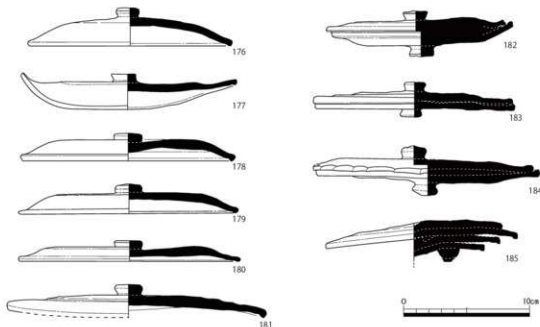


第 20 図 5号窯跡表土層出土遺物実測図(1/3)

が大勢であるが、扁平なもの(152・155・164・168・172・182～185)がある。扁平なものは口縁端部の折り曲げは弱く、端部内面に沈線を巡らすものがある。天井部外面は回転ヘラ切り後ナデを施すものが多いが、147・148・150は回転ヘラケズリ、153は天井部調整後にカキメ状圧痕が残る。157・159・168・169はヘラ切り後工具様ナデ、158はヘラ切り後丁寧なナデを施す。146・178～180は回転ヘラケズリ後ナデ、165・174・175・181は回転ヘラケズリ、166は板状圧痕が残る。167はヘラ切り未調整、172はハケ状圧痕が残る。182～185は重ね焼きで融着した資料である。いずれも扁平な蓋を重ねたもので、内面どうしを重ねたものが多いが、185は外面を5～6点重ねて焼いている。いずれも天井部外面は回転ヘラ切り後ナデ、他は回転ナデである。186～193は杯である。ほぼ同様な形態で、口縁部は直線的に開く。190は焼け歪みがある。186はヘラ切り後ハケ状工具でナデている。187は底部外面にヘラ切り後ナデを施し、底部と体部の境にケズリを施す。188はヘラ切り後板状工具によるナデ、190の底部外面はヘラ切り後ナデている。189・191～193は底部外面をヘラ切り後工具状でナデる。194～213は杯身である。口径により小型、中型、大型がある。いずれも口縁部は直線的にのびる形態であるが、202は内湾気味に立ち上がる。また、212は中位でわずかに外反する。底部外面の調整はヘラ切り後ナデ、底部内面は回転ナデ後ナデであるが、194は底部外面がヘラケズリである。199はヘラ切り後板状工具によるナデを施し、200はヘラケズリ後ヘラ状工具によるナデである。203は底部外面にヘラケズリを施し、板状圧痕が残る。ヘラ記号を有する。208は底部内面に工具によるナデを施す。209は底部外面にヘラ切り後のハケ状工具痕が多く残る。211は高台貼付け時の工具によるオサエ痕が残る。214～228は皿である。214・223は底部が丸くなる形態で、他の物とは形態を異にするがここで扱う。214は底部外面



第 21 图 5号窟跡窟体内埋土出土遺物実測図①(1/3)

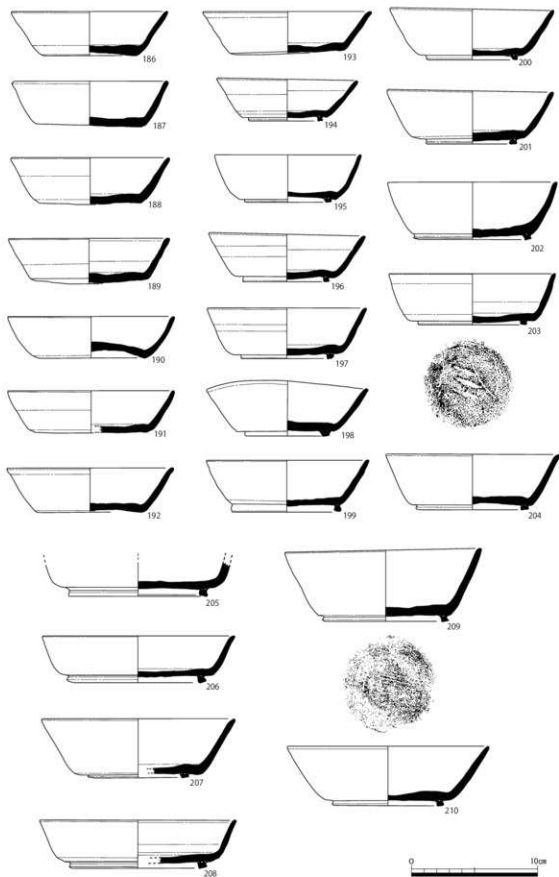


第22図 5号窯跡窯体内埋土出土遺物実測図②(1/3)

をヘラ切りし、その後にハケ状工具痕が残る。223は焼け歪みの影響があるかもしれないが、尖り気味の丸底となる。底部外面はヘラ切り後ナデ、他は回転ナデである。215～222・224・225は平坦な底部で、直線的に短く開く口縁部を持つもので、ほぼ同様の形態を示す。底部外面はヘラ切り後ナデ、内面は回転ナデ後中央部をナデる。226はやや尖り気味の底部で、底部外面はヘラ切り後工具によるナデを施す。内面は回転ナデ後ナデを施す。227は重ね焼きの例で同器種2枚が融着している。228は高台の付く大型のもので、高台端部はわずかに外に開く。底部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ後ナデを施す。229は短脚の高杯である。杯部を欠く資料で、脚部は横方向に引き出され、端部は外側に平坦面を作る。脚部内面は回転ナデ、外面は上半が回転ナデ、下半はナデである。脚部から裾部へかけてシボリ痕が残る。230～232は壺である。230は底部のみの資料で、四角形でやや外に開く低い高台を有する。底部内面は回転ナデ後ナデ、外面はヘラ切り後ナデを施す。231は長頸壺の体部で、肩部が屈曲して稜を成す。内面と外面上半は回転ナデ。外面下半はヘラケズリを施す。232は短頸壺で、口縁端部及び底部を欠く。口縁部はほぼ垂直に立ち、肩部が丸みを帯び、底部に向かってすぼまる形態を示す。体部内面上位から中位は回転ナデ、内面下位は縦方向の工具によるナデである。体部外面は上位が回転ナデ、中位から下位は回転ヘラケズリを施す。233・234は圓足円面碗である。いずれも細片であるが、復元脚部径約16cm前後である。脚部は裾部に向かって緩く外反し、端部を肥厚させる。どちらも長方形の透かしを施す。それぞれの辺をヘラにより丁寧に面取りする。透孔の幅は3.5cmで、端部の形状も随伴する。透かし穴は8カ所と推測される。

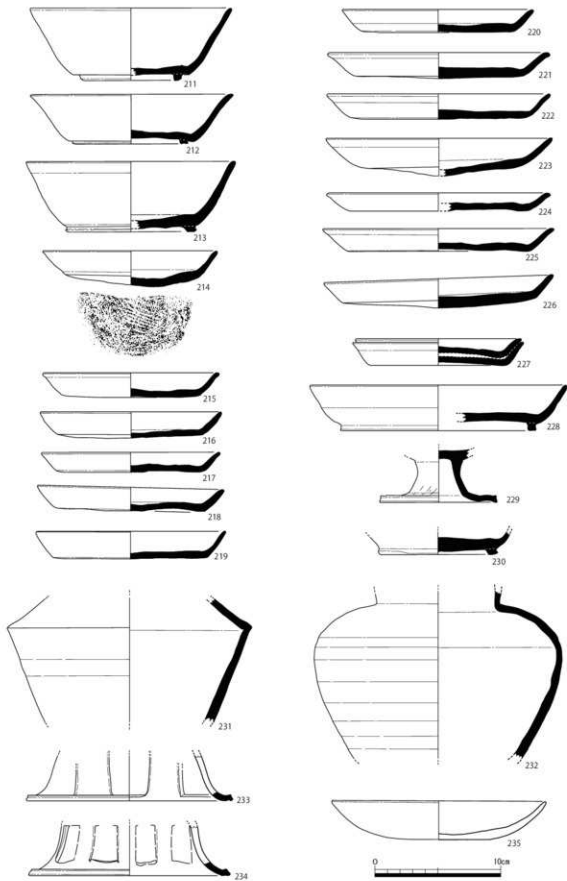
なお床面出土の遺物は第19図に示す通りである。

**土師器(235)** 235は杯である。平坦にヘラケズリされた底部から緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部に至る。体部内外とも回転ナデを行うが、一部研磨痕が残る。

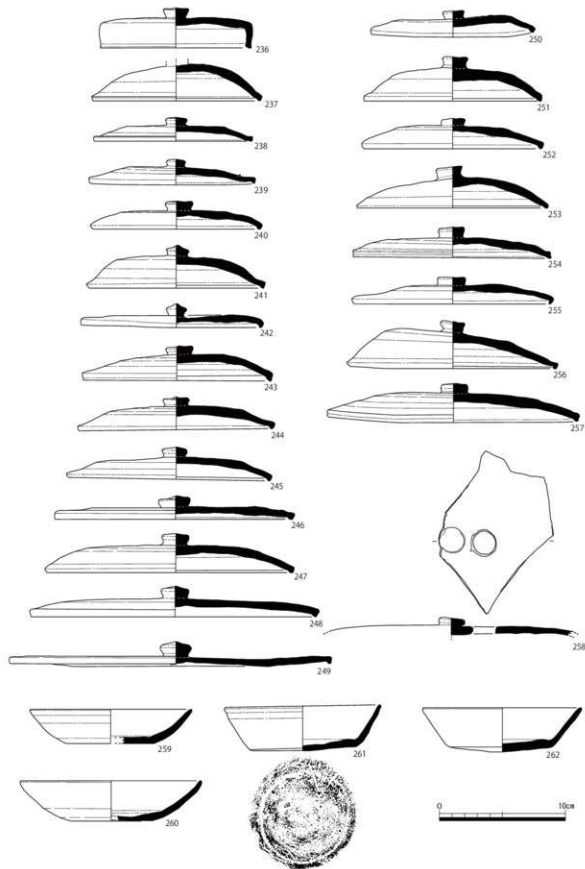


第 23 图 5号窯跡窠体内埋土出土遺物実測図③ (1/3)





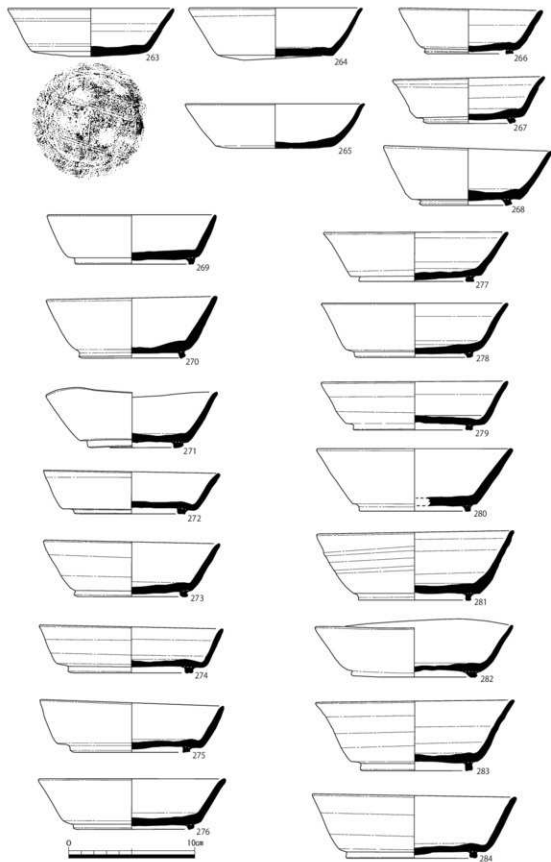
第 24 图 5 号窑迹窑体内埋土出土遗物实测图④ (1/3)



第 25 图 5 号窑跡灰原出土遺物実測図① (1/3)

## 【灰原】

**須恵器 (236～319)** 236は蓋である。擬宝珠様のつまみを有し、口縁部は直角に折り曲げ、端部は平坦面となす。天井部内面は回転ナデ後ナデである。237～258は杯蓋である。237はつまみが剥離しているが全てつまみが付く。238～249は擬宝珠様、250～258はボタン様のつまみを有す。天井部が丸みを帯びるもの(237・241・251・253・256)と扁平なもの(242・246・248・249)、その中間的なものがある。いずれも口縁端部の屈曲は弱く、嘴状に突出させるものは少ない。239・240・244～249は天井部外面をヘラケズリする。いずれも天井部内面は回転ナデ後ナデである。250～258は天井部外面がヘラ切り後ナデ、天井部内面は回転ナデ後ナデを行う。252・254・255・258は天井部外面をヘラケズリ、257は天井部外面をヘラ切り後板状工具でナデている。258は口縁端部を欠く。つまみの横に径2cm弱の穿孔を焼成前に穿っている。250・251・254～256はほぼ完成品である。259～265は杯である。259・260は平坦な底部から口縁部が緩やかに内湾して立ち上がるものである。土師器杯Dの模倣品と思われる。259は底部外面を水平にヘラケズリし、底部内面にナデを施す。260は底部外面中央に回転ヘラケズリ、底部と体部の境に回転ヘラケズリ後ナデを施し、底部内面は回転ナデ後ナデである。261～265は口縁部が直線的に開く。264・265は口縁端部がわずかに外方に突き出す。底部外面は261がヘラ切り後ナデだが、原体不明の圧痕が多く残る。底部内面はいずれも回転ナデ後ナデを施す。262・264はヘラ切り後ナデ、263はヘラケズリ後ナデで、原体不明の圧痕が残る。265はヘラ切り後板状工具によるナデを施す。266～288は杯身である。口縁部は直線的にのびるが、272・279・283は口縁部の中位でさらに外反する。口径により小型、中型、大型がある。また、283・286・287・288のように深めのものがある。いずれも底部外面は回転ヘラ切り後ナデ、底部内面は回転ナデ後ナデが主である。他は、279が底部外面に回転ヘラケズリ後ナデ、267・270・276・277・279～281・285・287は底部内面にナデを施す。289～296は皿である。289・294・295は底部が直線的であるが、290～293は底部が丸みを持つ。口縁部は直線的に開いて立ち上がるが、上半は外反す。289は回転ヘラ切り後工具状のナデ、294はヘラ切り後ナデ、295はヘラ切り後板状工具によるナデを施す。いずれも底部内面は回転ナデ後中央部ナデである。292の底部外面はヘラ切り後板状工具によるナデ、他はヘラ切り後ナデを施す。291・294・295はほぼ完成品である。296は高台を有するもので、口縁部は直線的に立ち上がる。底部外面はヘラケズリ、内面には板状工具によるナデを施す。297・298は高杯である。297は短脚の高杯脚部である。脚端部は上下に拡張し、外面平坦部は凹線状を呈する。脚部内面は回転ナデとナデを施し、指頭痕跡が残る。脚部外面には回転ナデを施す。298は長脚の高杯で、脚端部を下方に拡張し外方に平坦面をつくる。脚部内面はナデ、脚部外面は回転ナデで、脚部内外面にシボリ痕が残る。299～307は壺である。299～301は短頸壺である。口縁部が直立し、口縁端部に平坦面を有する。299は低く踏ん張る形態の高台が付く。口縁部は直立し、胴部最大径は上位にある。体部内面は回転ナデ、底部内面はナデを施す。体部外面上位は回転ナデ、体部外面中位はヘラケズリ後ナデ、体部外面下半から底部外面は回転ヘラケズリを施す。300は口縁部・体部内外面ともに回転ナデ、301は口縁部・体部内面と外面上半に回転ナデ、体部外面下半に回転ヘラケズリを施す。302・303は壺の口縁部で、口縁端部を上方につまみ上げる。いずれも口縁部内外面とも回転ナデ

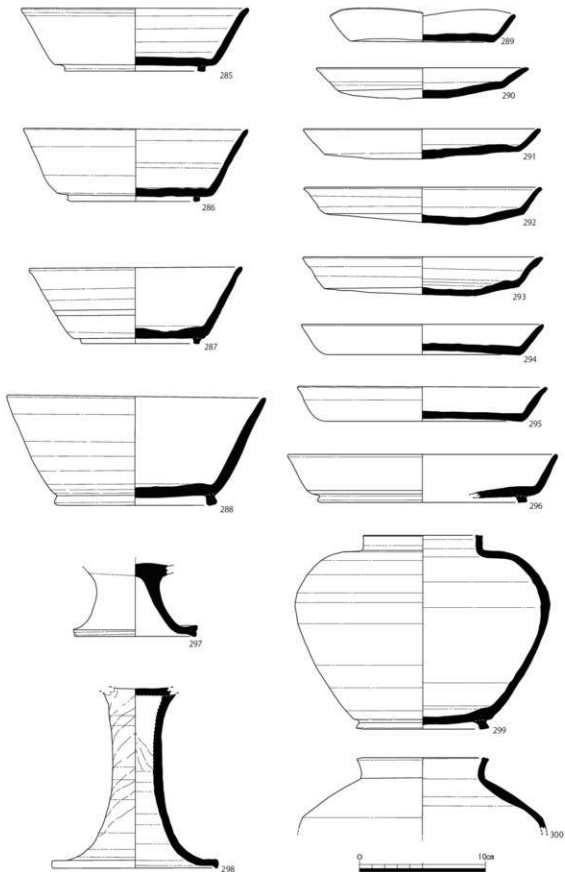


第 26 图 5 号窯跡灰原出土遺物実測図② (1/3)

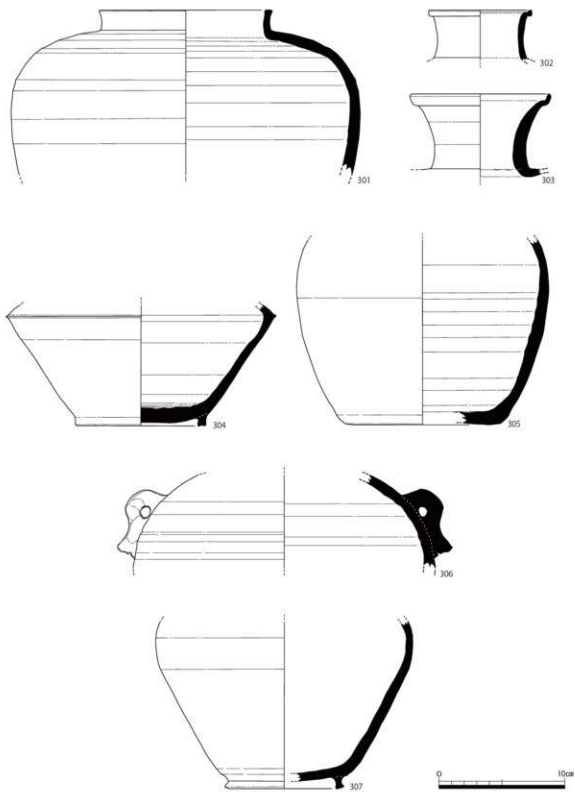
を施す。304は長頸壺の体部である。直立する高台を底部と体部の境に貼り付ける。体部から底部内面は回転ナデ、体部外面中位が回転ヘラケズリ後ヘラ状工具によるナデ、下半は回転ヘラケズリを施す。外底部は回転ヘラケズリ後ナデ、中央部は回転ヘラケズリ後ヘラ状工具によるナデを施す。305は平底の体部で、口頸部を欠く。体部内外面とも回転ナデ、底部内面は回転ナデ後ナデである。底部外面は工具によるナデ、底部と体部の境の外面には回転ヘラケズリを施す。306は双耳付瓶子である。体部内面は回転ナデ、体部外面はヘラケズリを施す。耳部は穿孔を有し、耳部上面と耳部穿孔横を面取りする。耳部穿孔横は指オサエ痕が残る。307は高台を有する体部である。高台は外方に突き出し、体部から底部内面は回転ナデ後ナデ、体部外面上半は回転ナデ、下半は回転ヘラケズリを施す。308は甕である。口縁部を帯状に厚く作り、凹線状に仕上げる。口縁部は内外面ともに回転ナデ、体部外面は格子目タタキ、体部内面は同心円の当具痕が残る。309～311は鉢である。309は口縁部から体部が直線的で、口縁部・体部内面と体部外面上半は回転ナデ、体部外面下半はヘラケズリを施す。底部外面はヘラ切り後丁寧なナデで仕上げる。310は鉄鉢形で、底部を欠く。体部は内湾しながら伸び、上位を大きく内湾させ、口縁部を作る。口縁部は端部をわずかに肥厚させて内傾する平坦面を作る。体部内面上半は回転ナデ、体部内面下半は縦方向のナデである。口体部外面下半は回転ヘラケズリを施し、中位は研磨している。311は「く」の字に屈曲する口縁部で、体部は丸みを帯びている。口縁部は内外面ともに回転ナデ、体部内面は縦方向のナデ、体部外面は板状工具による回転ナデを施す。312・313は稜椀である。底部を欠く資料で、直線的のびる体部の先端を外方へ折り曲げ口縁部とする。口縁端部は外傾する平坦面をなす。体部中位を屈曲させ、外側に明瞭な稜を作り出す。体部内外面ともに回転ナデである。312・313は同じような形態だが細部をみると別個体である。314は陶臼で、基底部のみの資料である。外底面に刺突が顕著に認められ、内面は平滑である。315～317は不明製品である。315は薄く小さな耳に似た形態のもので、器物に貼り付ける把手様のものである。手づくね成形だが縁辺部はヘラケズリ、ナデ等で整えている。316は筒に鏝を取り付けた状態で、類例不明である。内外面ともに回転ナデを施す。317は細長い板状のもので、一端は直角に折れ曲がる。各辺をヘラにより面取りし、他は丁寧にナデしている。ナデと指頭痕が残る面がある。平瓶等の把手か。318・319は硯である。318は円形硯で、一部を欠くが、ほぼ完形である。皿の底部内面の周縁部を窪ませ海とし、中央部分を陸とする。陸のいか所を底部ごと押し下げて墨溜の窪みを作ると同時に、底部外面に小突起をつくり脚の一つとする。底部外面には高さ1cmほどの柱状の粘土塊を2ヶ所貼付し、先の小突起と合わせて三脚とするが、小突起（墨溜）が低い斜めの状態で、風字硯のような使い方となる。319は圓足円面硯で、脚裾部の復元径22cmを測る。脚は直立気味で、裾を横方向に引出し、端部を小さく丸める。脚に長方形・円形の透孔を交互に施す。また、円孔上位に沈線を通らす。

### (3) 小結

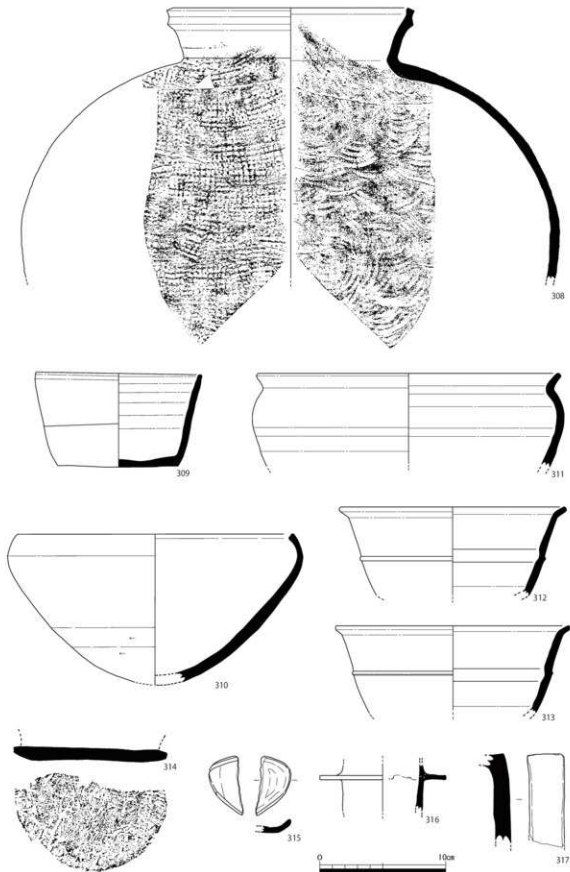
5号窯跡は全長約3m、平面寸胴プランの小型の直立煙道窯である。作業時期は焼成部床面出土遺物からVII B期と考えられる。



第 27 图 5 号窑跡灰原出土遺物実測図③ (1/3)

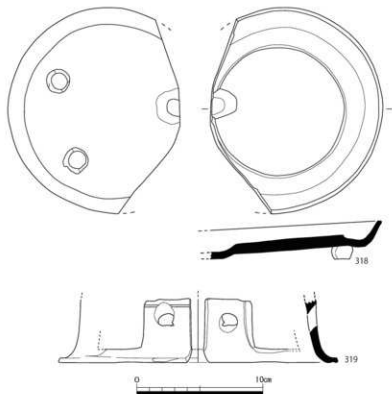


第 28 图 5号窯跡灰原出土遺物実測図④ (1/3)



第 29 图 5 号窯跡灰原出土遺物実測図⑤ (1/3)





第30図 5号窯跡灰原出土遺物実測図⑥(1/3)

## 9. 5号窯跡周辺土坑（P1・P2）

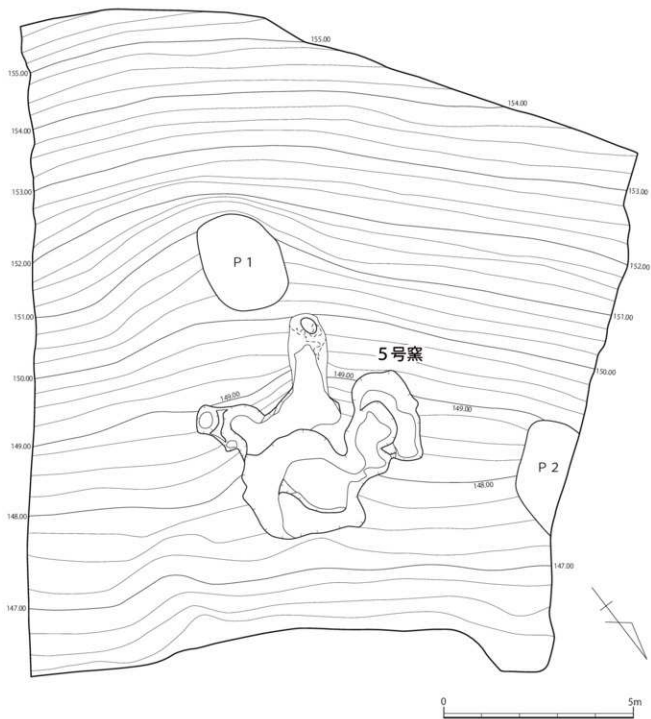
### （1）遺構の構造（第31図、図版10）

5号窯の南側と北西側に土坑があり、それぞれP1、P2と遺構番号を付している。P1は長軸2.8m、短軸2.0mの楕円形である。P2は一部調査区外に広がるため全形は不明であるが、長軸2.7m、短軸1.3m以上の楕円形である。埋土中から5号窯跡と同時期の須恵器が出土しており、窯の操業に関わる遺構と考えられるが詳細は不明である。

### （2）出土遺物（第32～34図、図版35・36）

#### 【P1】

**須恵器（320～334）** 320～323は杯蓋で、口縁端部の嘴状の突起は弱いものである。322は天井部を欠き、つまみの有無は不明である。320はつまみが剥離しており、形態は不明である。321・323はボタン様につまみを付ける。いずれも天井部外面はヘラ切り後ナデと回転ナデ、天井部内面は回転ナデ後ナデを施す。323はほぼ球形である。324は杯である。丸みを帯びた底部から直線的に外方へのびる口縁部である。底部外面はヘラ切り後ナデ、底部内面は回転ナデ後ナデである。325・326は杯身である。325は球形であるが焼け歪みが著しい。口縁部は直線的に外方へのびる。底部外面はヘラ切り、内面はナデである。326は口径20.6cmを測る大型の深いもので、直線的にのびる口縁部は端部を小さく外方へ丸める。高台はずんぐりとして、口縁と底部の境に貼付する。底部外面は回転ヘラ切り、内面はナデ、体部外面は回転ヘラケズリを施す。327・328は皿である。327は口縁部がわずかに外反する。底部外面はヘラケズリ後ナデ、内面は回転ナデ後ナデを施す。

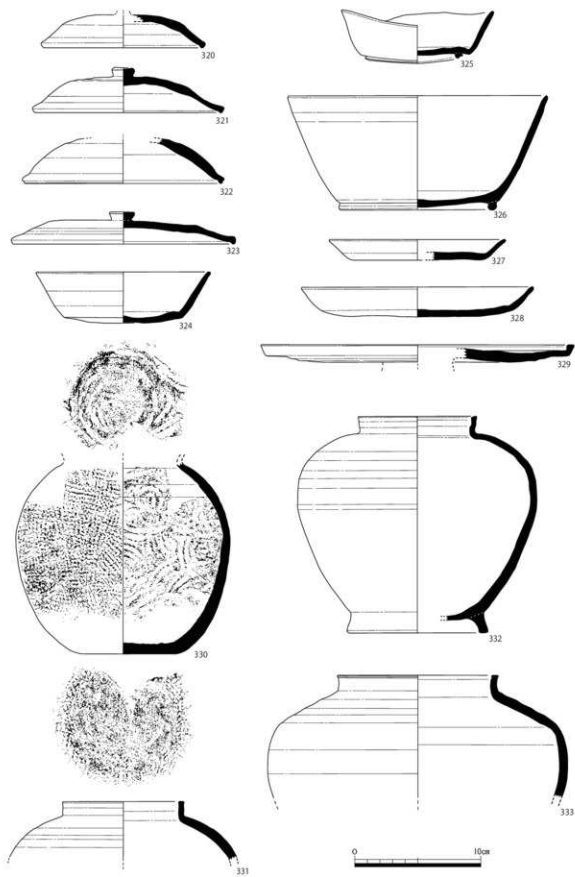


第 31 图 D 地点 5 号窟迹周边地形测量图、P 1 · P 2 配置图 (1/100)

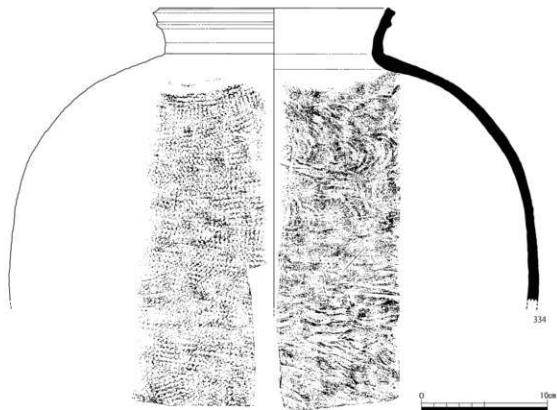
328 は底部が丸みを帯び、口縁部は緩やかに立ち上るため、口縁部と底部との境の屈曲が弱い。底部外面はヘラ切り後ナデ、内面はナデ、体部内外面は回転ナデ後ナデを施す。329 は高杯である。杯部片の資料で、脚部を欠く。口縁端部を上方に小さく折り曲げ、端部は拡張させ面をなす。底部外面は回転ヘラケズリ、内面はナデである。330～333 は壺である。330 は平底の広口壺で、口頸部を欠く。胴部最大径を中位に置く。外面は体部が格子目タタキ、底部がタタキ後不定方向のナデを施す。内面は同心円文の当具痕が底部まで残り、底部は当具の後ナデを施す。331～333 は短頸壺である。331 は口縁部がわずかに内傾する。体部内面と外面上位は回転ナデ、体部外面中位は回転ヘラケズリを施す。332 は内湾する口縁部を持つ。肩は張らず最大径を上位に置く。やや高めのだんぐりとした高台を付ける。体部外面中位以下を回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。333 は外反気味に直立する口縁部である。やや肩が張る胴部である。体部内面と外面上半は回転ナデ、体部外面下半はヘラケズリを施す。334 は甕で、胴部最大径以下を欠く資料である。口縁部はゆるく外反し端部は断面四角にするが、口縁部下端に1条の突線を巡らす。体部外面は格子目タタキ、体部内面は同心円文の当具痕があり、その上から横方向にナデる。

## 【P2】

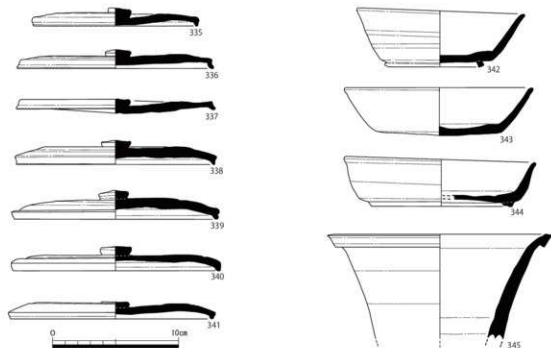
**須恵器 (335～345)** 335～341 は杯蓋で、全て扁平な形態のものである。いずれもつまみが付き、336～340 は擬宝珠様、335・341 はボタン様のつまみである。口縁端部の嘴状の突起は認識でき、336・337 の口縁端部は外方に突き出している。ほとんどの調整は天井部外面が回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ後ナデであるが、338 の天井部内面は回転ナデ後不定方向のナデ、335・339 には天井部外面にヘラ切り後ナデを施す。336・338・340 はほぼ完形である。342・344 は杯身である。342 は口縁部が直線的に開き、底部との境に稜を成す。小さく外へ開く高台が付く。底部外面にヘラ切り後板状圧痕が残る。344 は器壁を薄くしながら湾曲する口縁部である。低い幅広の高台が付けられる。底部外面はヘラ切り後ナデ、内面は回転ナデ後ナデを施す。343 は杯である。やや丸みのある底部から直線的に外方へ開く口縁部を持つ。底部外面はヘラ切り後ナデ、他は回転ナデで、底部内面にナデが認められる。345 は壺の口頸部で、直線的に開く口縁部は端部を断面四角形に肥厚させ、上端を水平にする。内外ともに回転ナデである。



第 32 图 5 号窯跡 P 1 出土遺物実測図① (1/3)



第 33 图 5号窯跡 P 1 出土遺物実測図② (1/3)

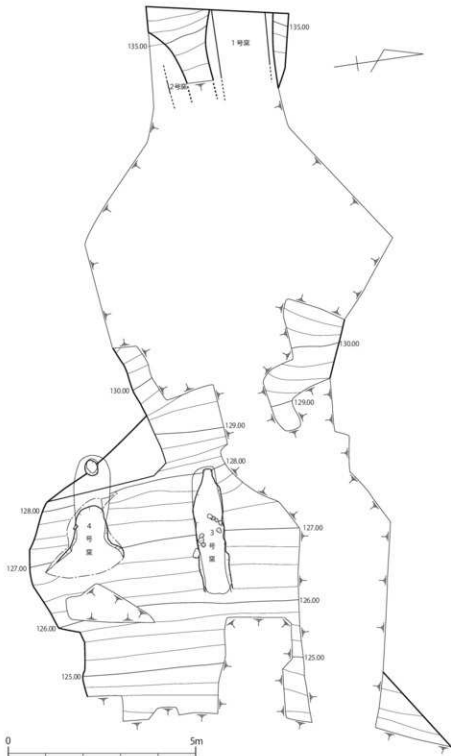


第 34 图 5号窯跡 P 2 出土遺物実測図 (1/3)

## IV. 石坂窯跡F地点

### 1. 調査の概要

石坂窯跡群は牛頭須志器窯跡の一支群（平野川支群）にあたる。牛頭山から北側に派生する丘陵のうち、北側斜面に位置する（大字牛頭 2190 番 1 ほか）。発掘調査は砂防ダム建設工事に伴い実施



第 35 図 F地点遺構配置図 (1/100)

したもので、発掘調査は平成17年6月9日から着手し、同8月2日に完了した。調査面積は350㎡で、出土遺物は須恵器を中心にバンケース12箱分出土した。

4基の窯跡が確認され、いずれも東側斜面に位置する。1・2号窯跡は調査区西端部に位置し、一部のみを検出したに留まるため、詳細は不明である。3・4号窯跡は調査区東側に位置し、残存状況は比較的良好である。

## 2. 1号窯跡

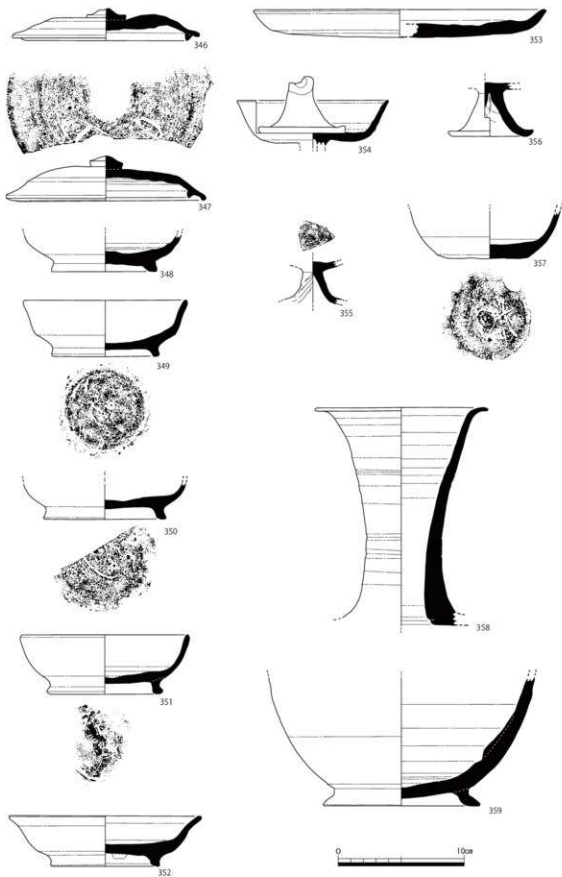
### (1) 窯の構造 (第35図、図版14)

調査区西端部の標高135m付近に位置し、南側に2号窯跡が近接する。大半が調査区外に広がり一部を検出したにとどまるため、全容は不明である。幅1.8mほどの小型窯と考えられる。須恵器蓋杯・高杯・皿・杯・鉢・甕・長頸壺・中空硯などが出土した。

### (2) 出土遺物 (第36～42図、図版37～39)

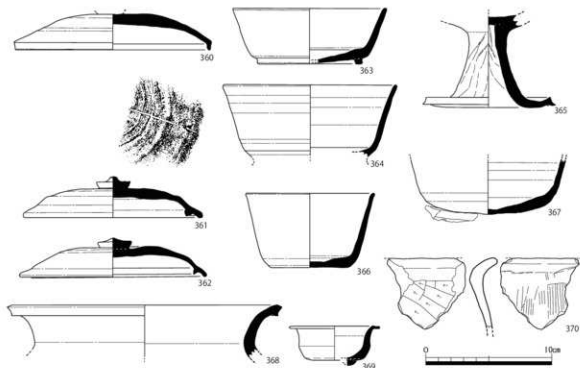
#### 【表土層】

**須恵器 (346～359)** 346・347は杯蓋である。いずれもカエリを持ち、擬宝珠様のつまみを付ける。346はカエリが口縁下に突き出す。天井部外面は回転ヘラケズリ後ナデを施す。347はカエリが口縁部より突出しない。天井部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ後ナデを施すが凹凸が著しい。348～352は杯身である。348・350は口縁部を欠く資料である。いずれも高台はためで、外方へ踏ん張る形態のものである。いずれも底部内外面ともナデ仕上げで、350は底部外面にヘラ記号を有する。349は口縁部が中位で屈曲し、直立気味となる。底部内外面ともナデを施す。底部外面にヘラ記号がある。351は口縁部が内湾しながら立ち上がり。端部はわずかに肥厚させて丸く仕上げる。高台はやや高めで、端部を外方へ引き出す。底部内面はナデ、外面はヘラ切り未調整である。底部外面にヘラ記号がある。352は口縁部が中位でさらに外反する。底部内面はナデ、外面には砂粒が多量に付着して調整は不明である。353は皿である。口縁部は直線的で、端部をわずかに外方に引き出す。底部内面は回転ナデ後ナデを、外面は回転ヘラ切り後ナデ、底部と口縁部の境付近の外面は回転ヘラケズリを施す。354～356は高杯である。354は高杯の杯部の上に小型高杯の脚部が融着し、重ね焼きの一形態を示す。口縁部は斜め上方に直線的に開く。杯部内面は回転ナデで、底部と口縁部の境の内面に指頭痕が残る。杯底部外面中央は回転ナデ、下半は回転ヘラケズリを施す。355・356は小型高杯である。355の杯部内面はナデ仕上げでヘラ記号を有する。外面は回転ナデ、脚部外面はシボリ痕が残る。356は脚部内外とも調整不明だが脚部内面に工具痕が残る。357は鉢で、口縁部を欠く。内面は回転ナデ、外面はヘラ切り未調整である。底部と口縁部の境は手持ちヘラケズリを施す。底部外面にヘラ記号を有する。358・359は壺である。358は長頸壺の口頸部で、口縁端部は外方に引き出すように外反させる。頸部内外面に回転ナデを施し、頸部に接合痕が見られる。359は壺の体部下半である。高台は外方に大きく引き出す形態である。体部内外面は回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデである。



第36图 1号窑跡表土层出土遺物実測図(1/3)





第 37 図 1号窯跡遺構検出時出土遺物実測図 (1/3)

#### 【遺構検出時】

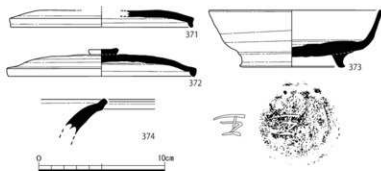
**須恵器 (360～369)** 360～362は杯蓋である。360はつまみが剥離している。口縁端部を折り曲げ下方に突き出す。天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面は回転ナデ後不定方向のナデを施す。361・362はカエリが付くもので、いずれもカエリは口縁内に収まり、擬宝珠様のつまみを有する。天井部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデを施す。362は天井部外面にヘラ記号を有する。363・364は杯身である。いずれも口縁部が直線的に開くものである。363は低い高台が付く。底部内面は回転ナデ後ナデ、外面は回転ヘラケズリである。364は高台を欠く。内外面とも回転ナデを施す。365は高杯である。杯部を欠く資料で、杯底部の一部を残す。脚裾は外方に引出し、端部は上下に肥厚させ、擬凹線状に仕上げる。外面は回転ナデ、内外面にはシボリ痕を有す。366・367は椀もしくは鉢である。366は平底で、口縁部は直線的に開く。底部内面中央にナデ、外面はヘラ切り後ナデで、他は回転ナデである。367は底部が丸みを帯び、口縁部は直線的に引き上げられる。底部内外面ともナデである。体部外面に灰黒色の自然軸が部分的にかかる。368は甕である。口縁部は大きく外反し、口縁端部は下方に拡張し面を持つ。口縁部内外面ともに回転ナデを施す。369は口径7.2cmと小型で、口縁端部を折り曲げ、外方に引き出した杯状の器形である。口縁部内面上半はナデアゲており、下半から底部内面は強いナデを施す。底部外面は回転ヘラ切りされるが、切り損じの粘土塊が付着している。

**土師器 (370)** 370は甕の口縁部片である。口縁部は「く」の字状に外反する。体部外面は縦ハケ、体部内面は斜め方向のケズリを施す。口縁部内外面はヨコナデ、頸部外面の一部にヘラ状工具痕が残る。

## 【埋土】

## 須恵器 (371～374) 371・

372は杯蓋である。いずれも口縁端部を折り曲げ、嘴状にするものである。371は中央部が欠損しており、つまみの有無は不明だが、372はボタン様のつまみを有する。いずれも天井部外面は回転ヘラケズリ、内面はナ



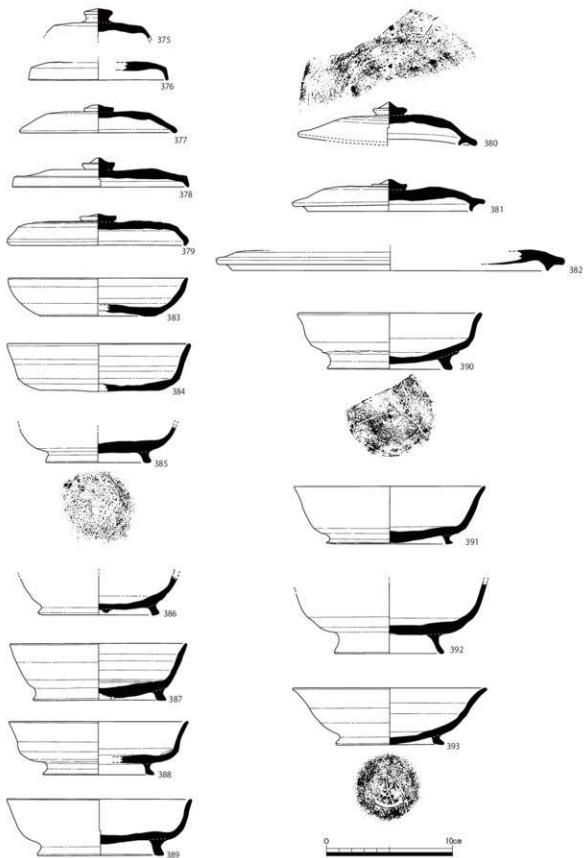
第38図 1号窯跡埋土出土遺物実測図(1/3)

デを施す。373は杯身である。やや細身で高い高台は端部を外方へわずかに跳ねる。器壁の厚い底部から口縁部が直線的にのびるが、端部をわずかに肥厚させる。底部内面はナデ、他は回転ナデである。底部は回転ヘラ切りで、底部と体部の境付近は回転ヘラケズリを施す。底部高台内にはヘラ書きにより、漢字の「五」が手慣れた筆跡で刻まれている。374は甕の口縁部片である。口縁部は外反してのび、端部は外上方に引出して、外傾する平坦面を作る。内外面とも回転ナデを施す。

## 【灰原】

須恵器 (375～413) 375～382は杯蓋である。376・382のつまみの有無は不明であるが、他は擬宝珠様のつまみを付ける。カエリを持つもの(380～382)と口縁端部を折り曲げるもの(375～379)がある。375は肩が張るもので、口縁部を欠く。天井部外面は回転ヘラケズリを施し、天井部内面は回転ナデである。376は端部を折り曲げ下方へ長く引き出す。天井部外面に回転ヘラケズリ、内面中央には一定方向のナデを施す。377は天井部外面にヘラ切り後ナデ、内面は不定方向のナデを施す。378は口縁端部が下方に突き出し、外方に平坦面を作る。天井部外面はヘラケズリ後研磨を施し、内面は不定方向のハケ状痕が残る。ほぼ完形である。379は天井部外面に回転ヘラケズリ、口縁端部付近はヘラ状工具による面取りを行う。天井部内面は一方方向ナデが部分的に認められる。380はカエリが口縁内部に収まるもので、天井部外面にヘラ記号を有する。どちらも天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面はナデである。381はカエリが口縁下に突き出すもので、天井部は回転ヘラケズリ、内面はナデである。382は口径25.0cmを測る大型品である。扁平な作りで、カエリが口縁下に突き出している。蓋又は大皿の蓋かと思われる。口縁部外面は回転ナデ、口縁部内面は不定方向のナデを施す。383・384は杯である。383は口縁部が内湾して立ち上がる。底部内面は回転ナデ後ナデ、外面はヘラ切り後不定方向のナデを施す。384は口縁部が外反気味に立ち上がるもので、底部外面は回転ヘラケズリを施す。他はナデである。385～393は杯身である。いずれも外方へ踏ん張る形態の高台を付ける。385は口縁部を欠く。底部は回転ヘラケズリされ、底部内面中央に不定方向のナデを施す。386は口縁部を欠く。丸い底部に断面長方形の高台が外開きに付けられる。底部外面にヘラ記号があるが、降灰のため不明瞭である。387は直線的にのびる口縁部で、底部内面に回転ナデ、外面にはヘラ切り後ナデを施す。388は口縁部が基部から外反する。底部と口縁部の境内面に指頭痕が残る、外面には回転ヘラケズリを施す。389は口縁部が内湾気味に立ち上がる。やや太めの高台は端部を肥厚させ、外へ突き出す。底部内面がナデ、底部外面は

ヘラ切り未調整である。390は中位で外反する口縁部で、太めの高台を付ける。底部は回転ヘラ切り、底部内面にナデを施す。391は底部内面に不定方向のナデ、外面は回転ヘラケズリ後ナデ、底部と体部の境は回転ヘラケズリされる。他は回転ナデである。392は丸く立ち上がる口縁部で、やや高め細い高台が付けられる。底部内面は回転ナデ後ナデ、外面はナデで、中央に指頭痕が残る。393は底部から大きく開く口縁部で、高台端部は外方に引き出される。底部は回転ヘラケズリ、内面に回転ナデ後ナデを施す。385・390・393はヘラ記号を有する。394・395は盤である。394は口縁部片である。口縁部は内湾し、端部の上面に平坦面を作り、外方へ突き出す。口縁部内外面に回転ナデを施す。395は大型の皿かもしれない。平坦な底部から内湾しながら立ち上がる口縁部は先端を外方へ広げる。口縁部内外面は回転ナデ後ナデを施す。底部内面に板状工具痕が残り、底部と体部の境はナデ仕上げ、底部外面にハケ状工具によるケズリを施す。396～402は高杯である。396～400はいずれも脚部で、397～399の脚裾は402と同様であるが、399は下方への突き出しは弱い。400は脚端下方に小突起を作る。いずれも脚部内外面とも回転ナデで、396・397・399・400は脚部内面にシボリ痕が残る。401は脚を欠く資料である。口縁部は器壁を薄くしながら直立する。底部内面は回転ナデ後ナデ、外面は回転ヘラケズリを行い、他は回転ナデである。402は脚裾部が反り上がり、端部を下方に突き出して断面三角形にする。端部外面は回転ナデにより平坦面をつくる。杯部は平坦な底部からほぼ直角に立ち上がる口縁部を持ち、端部は外反気味に丸く仕上げる。杯底部中央は回転ナデ後不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。口縁基部内面は強く押さえた回転ナデの痕跡が残る。対応する外面は回転ヘラケズリし、脚部内面にはシボリ痕が残る。403は壺である。口縁部の資料で、頸部以下を欠く。やや外反気味に開く口縁部は端部を短く外方へ水平に引き出す。頸部外面に1条の沈線を巡らす。内外面とも回転ナデである。404～406は大型甕の口縁部である。406は小片で、大きく外方へ引き出された口縁端部の資料である。端部下端に1条の突帯を巡らす。内外面とも回転ナデである。405は大きく外反する口縁部で、端部を肥厚させ、下方に突起を引出し、突帯状とする。中位に2条の沈線を巡らし、その間を櫛掻き波状文で埋める。内外面とも回転ナデであるが、内面の一部に縦方向のナデが残る。406は直立気味に緩く外反する。端部を長方形に肥厚させ、帯状に巡らせる。そこに1条のヘラ描き波状文、その下方には2条のヘラ描き波状文を施す。内外面とも回転ナデで、内面に斜め方向のナデ痕跡が認められる。407～411は鉢である。410以外はいずれも口縁部を欠く。体部が直線的に開くもの(407～409)、直立するもの(410)、中位がくびれるもの(411)がある。407は底部内面中央にナデ、体部外面上半は横方向のハケ後ナデ仕上げ、下半は横方向の手持ちヘラケズリ、底部はヘラ切り未調整である。409はやや大型である。体部外面上位に沈線を巡らす。内面は回転ナデ、体部外面は板状工具によるナデ、底部外面はヘラ切り後板状工具によるケズリを施す。底部外面にヘラ記号がある。410は口縁端部が肥厚して先端が尖り気味となる。底部外面はヘラ切り後研磨を施し、体部外面は回転ナデの後、ハケ状痕が一部に残る。411は一且すばまった体部が緩やかに外反する。底部内面は回転ナデ後ナデ、外面はヘラ切り後ナデを施す。底部外面に砂が付着する。412は把手片で、把手部上面はヘラケズリ、他の面は工具ナデを施す。413は中空硯の把手で、断面八角形に面取りされる。上面に長方形の孔を穿ち、その孔は長辺中心部を貫通している。



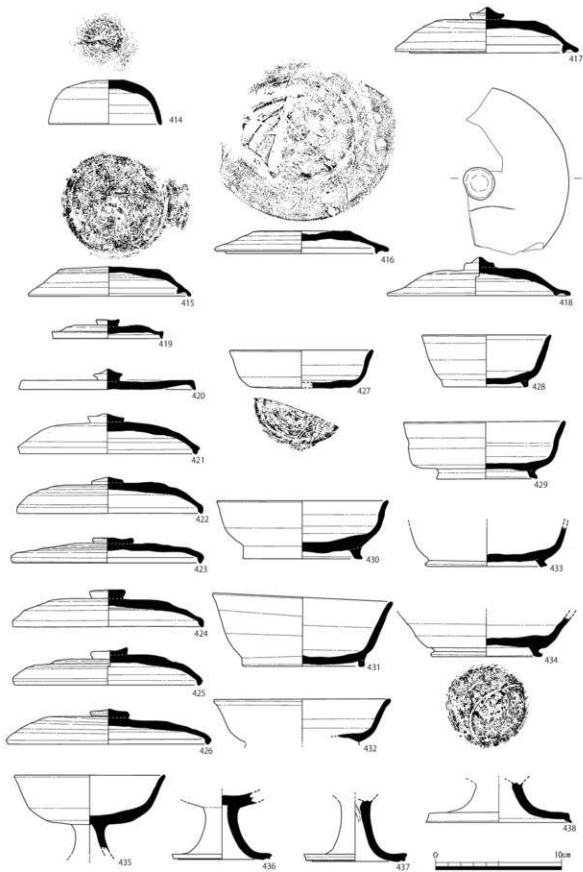
第 39 图 1 号窑迹灰原出土文物实测图① (1/3)

## 【灰原下層】

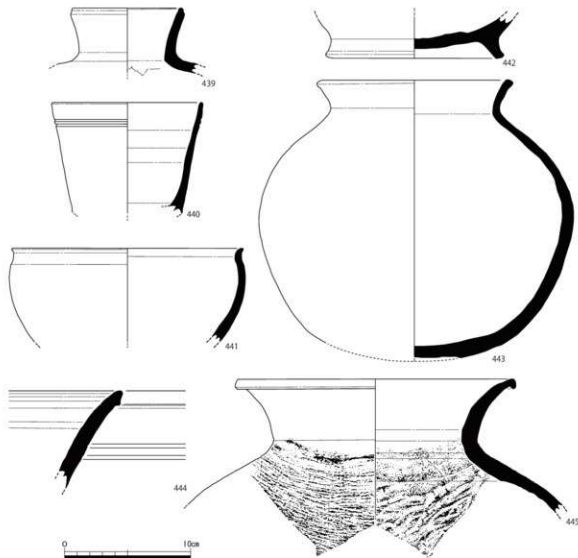
**須恵器 (414～445)** 414は蓋である。丸みのある天井部から直線的に下る口縁部で、端部は丸く収める。天井部外面は回転ヘラケズリ、内面はナデを施す。415～426は杯蓋である。415～418はカエリが付くもので、カエリは416が口縁部から突出する以外は口縁内に収まる。415・416はつまみが付かず、417・418は擬宝珠様のつまみが付く。415は天井部外面をヘラ切りし、内面は回転ナデ後ナデを施す。完形品である。416は天井部外面を回転ヘラケズリ後ナデ、内面は回転ナデ後ナデを施す。417は天井部外面を回転ヘラケズリ、内面には回転ナデ後ナデを施す。418は天井部外面が回転ヘラケズリ、内面はナデを施す。415・416・418には天井部外面にヘラ記号を有する。419～426は口縁部端を折り曲げて嘴状にするものである。419・423～425にはボタン様のつまみが、420～422・426には擬宝珠様のつまみが付く。421・422・425・426は天井部外面に回転ヘラケズリ、内面には回転ナデ後ナデを施す。419・420は扁平な器形で、口縁部を下方に鋭く引出す。天井部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ後ナデを施す。423は天井部から口縁部外面に回転ナデを施し、天井部外面中位付近は回転ヘラケズリを施す。424は天井部外面が回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ後ナデである。427は杯である。底部は平坦で、直立気味に立ち上がる口縁部は中位でさらに外反する。底部外面にカキメ状の調整を施す。他は回転ナデで、底部内面中央部はナデである。428～434は杯身である。口縁部は直線的に広がるもの(428・431・433・434)と中位で屈曲するもの(429・430・432)がある。429・430・433・434は端部が外方に引き出す形態の高台で、いずれも底部内面はナデ、外面はヘラ切り後ナデが施される。434の底部外面にヘラ記号を有する。428・431は断面方形の短い高台が直立する。428は底部外面に回転ナデを施す。431は底部内面中央と底部外面はヘラ切り後ナデ、外面にヘラ状工具によるナデが見られる。435～438は高杯である。435は脚裾を欠く資料で、杯部は内面をナデ、他は回転ナデである。外面に別個体の破片が付着している。436～438は脚部片である。436・437は脚裾を横方向へ引き出し、端部内面に沈線状の窪みを作りだす。いずれも内外面に回転ナデを施し、437の脚部内面にシボリ痕が残る。438は端部を下方に折り曲げ尖らす。脚部内外面上半はナデ、他は回転ナデを施す。439は口縁部破片で、壺もしくは横瓶である。口縁部は直立気味に外反し、端部は上方に突き出す。内外面ともに回転ナデを施す。440・441は鉢である。440は底部を欠く資料で、口縁部が直線的に立ちあがる。外面口縁部下に2条の沈線を巡らす。内外面とも回転ナデで、回転ナデ後外面にナデを施す。441は内湾する体部に短く外反する口縁部で、底部を欠く。口縁部内面と外面上半は回転ナデ、体部外面下半は回転ヘラケズリを施す。442・443は壺である。442は底部片で、緩やかに外方に引き出すための高台を有する。底部内面は回転ナデ、外面はヘラ切り後ナデである。443は広口壺で、口縁部は緩やかに外反し、端部を丸く仕上げる。体部外面下半から底部にかけて回転ヘラケズリし、他は回転ナデである。完形品で、橙褐色を呈する。444・445は甕である。444は大甕の破片である。口縁部端は丸くするが、外面に小突起を作る。外面に2条の沈線を巡らす。口頸部内面上半と口頸部外面は回転ナデ、口頸部内面下半は回転ナデ後ナデを施す。445の口縁部は大きく外反し、端部は下方に折り曲げ丸く仕上げる。口頸部内外面は回転ナデ、体部外面には平行タキを施し、内面には同心円の当具痕を残す。



第 40 图 1 号窑跡灰原出土遺物実測図② (1/3)



第 41 图 1号窯跡灰原下層出土遺物実測図① (1/3)



第 42 図 1号窯跡灰原下層出土遺物実測図② (1/3)

### (3) 小結

1号窯跡は、幅1.8m前後の小型の窯と考えられる。操業時期は出土遺物からVI～VIIA期と考えられる。

## 3. 2号窯跡

### (1) 窯の構造 (第35図、図版14)

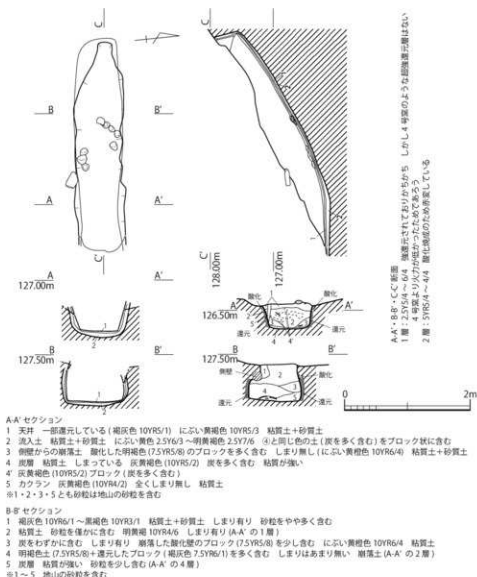
調査区西端部の標高135m付近に位置し、北側に1号窯跡が近接する。大半が調査区外に広がり一部を検出したにとどまるため、全形は不明である。幅0.8m以上の小型窯と考えられる。出土遺物はなく、操業時期は不明である。



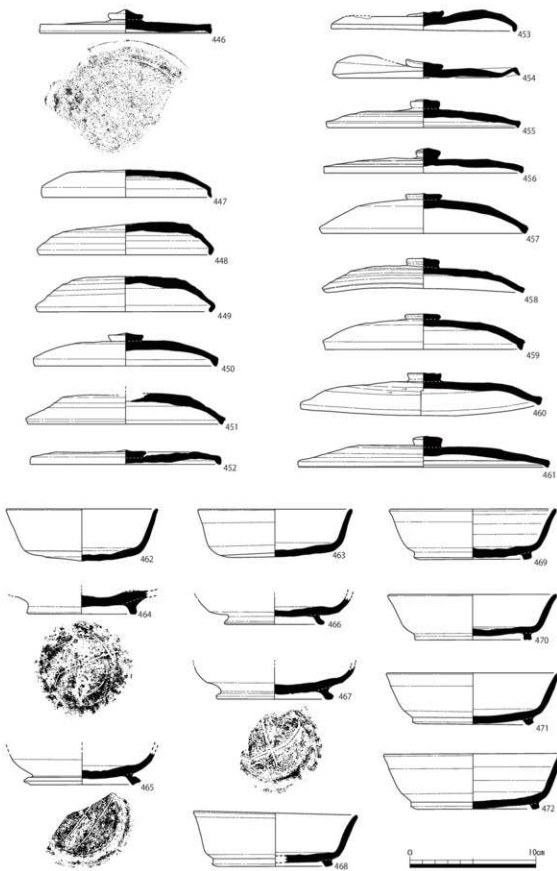
## 4. 3号窯跡

## (1) 窯の構造 (第43図、図版15～17)

調査区東側の標高127m付近に位置し、南側に4号窯跡が近接する。東端部の一部が消滅するが、残存長3.35m、焼成部幅0.6～0.75m、平面寸胴形を呈する。奥壁から東へ2.35mの地点で傾斜変換点があり、この付近が焼成部境と考えられる。焼成部床面の傾斜角度は焼成部側で25度、煙道側で33度ほどで、焼台と考えられる拳大の礫が置かれている。窯の主軸方位はN-95°-Eである。煙道の天井部は削平を受けるが、奥壁に向かって絞り込まれており(幅0.25mほど)、直立煙道になるものであろう。焼成部・燃焼部ともに床面・壁面が強い還元を受けている。灰原の範囲等は不明である。



第43図 3号窯跡実測図 (1/60)

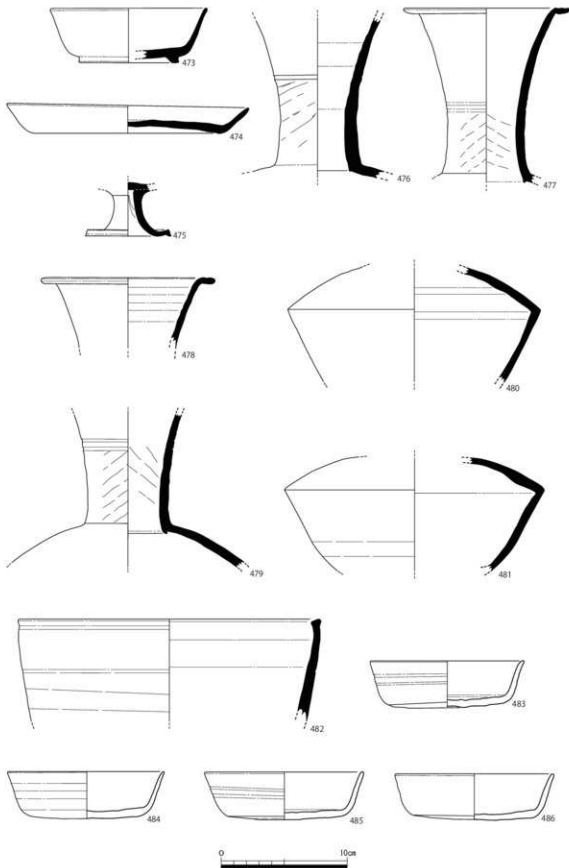


第 44 图 3 号窟跡窟体内埋土出土遺物実測図① (1/3)

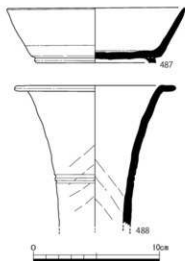
## (2) 出土遺物 (第44～46図、図版39～41)

### 【窯体内埋土】

**須恵器 (446～482)** 446～461は杯蓋である。447～449はつまみを付けられないもので、口縁端部をやや長めに折り曲げる。いずれも天井部外面はヘラ切り未調整、内面はナデである。448の天井部にはヘラ切り後ナデが認められる。447はほぼ完形品である。447～449以外はつまみの付くものである。451はつまみの有無は不明であるが、446・450・452～457は擬宝珠様、453・454・458～461はボタン様のつまみを付ける。擬宝珠様のつまみが付くもののうち、450・452・454は扁平な形態で、口縁端部の折り曲げは弱い。いずれも天井部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデを施す。450には天井部に横方向のハケ状ケズリ痕がある。451は天井部外面が回転ヘラケズリ、天井部内面に回転ナデ後ナデを施す。453は天井部外面を回転ヘラ切り後、板状工具による不定方向のナデを施す。455は天井部外面が回転ヘラケズリ、内面は工具様のナデである。456は天井部外面に回転ヘラケズリ後ナデを施す。457・458は焼け歪みが大きい。口縁端部の形状から天井部が丸みを持つものと思われる。天井部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデを施す。459は口縁端部の折り曲げは目立たず、端面内面に沈線を有するものである。天井部外面に回転ヘラケズリ後ナデ、内面はナデを施す。460・461はいずれも天井部外面が回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ後ナデを施す。453・459・460はほぼ完形品である。462・463は杯である。いずれも丸味のある底部から直線的に立ち上がる口縁部であるが、463は屈曲気味である。462はほぼ完形品で、底部内面は回転ナデ後ナデ、外面はヘラ切り後ナデを施す。463は底部内面に回転ナデ、外面はヘラ切り未調整である。464～473は杯身である。464～467は高台が高めで外に開く形態であるが、468～472は短く断面方形の高台がやや開き気味に付く。473は口縁部の器壁が薄い作りで直線的のびる。464・465・467は底部外面にヘラ記号を有する。いずれも底部外面は回転ヘラ切り、底部内面は464が回転ナデ、465がナデ、467が不定方向ナデである。21は底部内面がナデ、底部と体部の境外面は回転ヘラケズリ、底部外面はヘラ切り後ナデであり、工具痕が残る。468～472は口縁部が直線的のび、端部がわずかに外反するものである。468・469・471は底部内面が回転ナデ後ナデ、外面はヘラ切り後ナデを施す。470は底部外面がヘラ切り未調整、内面は一方のナデを施す。472は焼成が甘く、内面が橙色で、外面がにぶい橙色を呈する。底部外面はヘラ切り、内面はナデである。473は底部がヘラ切り未調整で、他は内外面ともナデを施す。474は皿である。口縁部は直線的に広がる。ほぼ完形品である。底部内面は回転ナデ後ナデ、外面はヘラ切り後ナデを施す。475は高杯である。小型のもので、杯部を欠く。脚裾はわずかに跳ね上げ、端部は折り曲げて断面三角形とする。内外面とも回転ナデを施し、脚柱部内面にはシボリ痕が残る。476～481は壺である。いずれも長頸壺で、476～479は口頸部、480・481は胴部の資料である。477・478は緩く外反する頸部の先端を水平方向に引出し、口縁部とする。どちらも内外面に回転ナデを施す。477は頸部に2条の沈線を巡らし、頸部内外面下半にシボリ痕が残る。476・479は頸部内面上半に強い回転ナデ、外面は回転ナデ後ナデを施す。頸部外面下半にシボリ痕が残る。頸部外面中位に476は1条、479は2条の沈線をそれぞれ巡らす。480・481は肩部が張り、稜を成す形態である。480は体部内面が回転ナデ、外面は体部下位をヘラケズリする。他は回転ナデであるが、上半部にナデを施す。



第 45 图 3号窟跡窟体内埋土出土遺物実測図② (1/3)



第46図 3号窯跡灰原出土  
遺物実測図(1/3)

481は体部上半が丸みを帯びて下がり気味となり、肩の稜を鋭くする。体部外面下半にヘラケズリを施し、他は回転ナデである。482は甌である。口縁部はわずかに内傾し、端部を肥厚させて上端に平坦面を作る。体部上位に1条の沈線を巡らす。体部外面下半は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。  
**土師器(483～486)** 483～486は平底の杯である。直線的に立ち上がる口縁部である。483・485は口縁部中位に沈線を有する。いずれも底部内面は回転ナデ後ナデ、外面はヘラ切り後ナデを施す。ほぼ完形品である。色調は明黄褐色を呈し、意識的に酸化炎下で焼成されたものと思われ底部外面に黒班が残るものがある。

## 【灰原】

**須恵器(487・488)** 487は杯身である。口縁部は直線的に開く。低い断面四角形の高台が付く。底部外面はヘラ切り未調整、内面は回転ナデ後ナデを施す。488は長頸壺の口頸部で、口縁端部は水平方向に大きく引き出す。頸部中位には2条の沈線を巡らす。頸部内外面は回転ナデで、シボリ痕が残る。

## (3) 小結

3号窯跡は残存長3.35m、平面寸胴形の小型の直立煙道窯である。操業時期は窯体内埋土出土遺物からVII B期と考えられるが、一部VI～VII A期の資料も含む。

## 5. 4号窯跡

### (1) 窯の構造(第47図、図版18～20)

調査区東側の標高127m付近に位置し、北側に3号窯跡が近接する。東端部の一部が消滅するが、残存長2.85m、焼成部幅0.7～0.95m、平面寸胴形を呈する。奥壁から東へ2.2mの地点で絞込みがあり、この付近が焼成部境と考えられる。焼成部床面の傾斜角度は奥壁側で28度である。窯の主軸方位はN-98°-Eである。焼成部の西側半分は天井部が残り、床面からの高さは0.6m、横断面形は三角形で、燃焼部側の壁面は直立する。焼成部床面には焼台と考えられる拳大の礫が置かれている。焼成部境から燃焼部側にかけては「ハ」字形に開き、前庭部の平坦面へと連なる。煙道は直立し上面の直径は0.35mほどとなる。焼成部・燃焼部ともに床面・壁面が強い還元を受けている。灰原の範囲等は不明である。

### (2) 出土遺物(第48・49図、図版41)

#### 【遺構検出時】

**須恵器(489～492)** 489は杯蓋である。笠状の形態で、ボタン様のつまみが付く。口縁端部の折り返しは弱く、端部内面に沈線が巡る。天井部外面はヘラ切り後ナデ、他は回転ナデであるが、

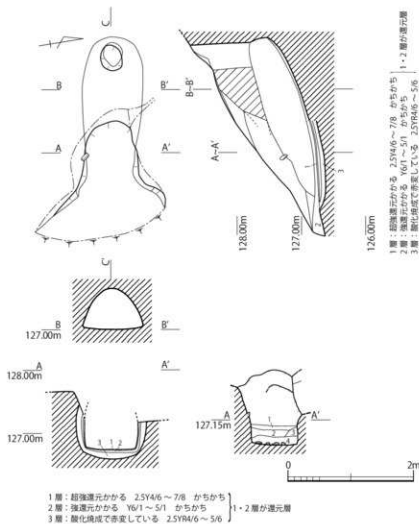
天井部内面には工具様の回転ナデを施す。490・491は杯身である。490は低い方形の高台を有し、口縁部は内湾気味に上方にのびる。底部内面はナデ、外面はヘラ切り後ナデを施す。491は丸味のある底部から外反気味に開く口縁部である。高めの高台が付き、端部を外方へ引き出す。底部外面はヘラケズリ後ナデ、他は回転ナデを施す。底部高台内にヘラ記号がある。492は長頸蓋の口縁部で、端部は水平方向に引き出すが、中央を窪ませ受け口状としている。内外面とも回転ナデを施す。

### 【窯体内埋土】

### 須恵器 (493～501)

493～495は杯蓋である。

493・494はカエリが付くもので、493は不明だが、494には高い擬宝珠

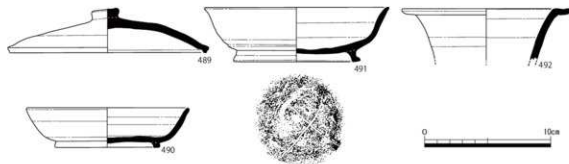


- 1層：窑体還元から 2.5Y4/6～7/8 かちかち }  
2層：還元元から Y6/1～5/1 かちかち } 1・2層が還元層  
3層：酸化焼成で変質している 2.5Y8/6～5/6 }

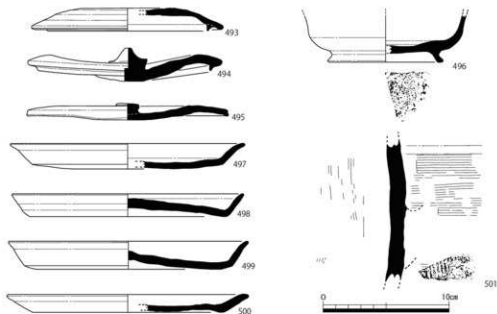
- 1 粘質土 砂粒を少し含む(径2～4ミリ) 黄褐色 10YR5/6 2・3・4に比べたらしまりがある  
2 粘質土 しまりのない 明黄褐色 2.5Y6/6 砂質土 砂粒を少し含む(径2～4ミリ)  
3 粘質土 しまり無し にぶい黄色 2.5Y5/4 砂粒を少し含む(径2～4ミリ)  
4 粘質土 しまり無し 黄褐色 2.5Y5/4 砂粒をやや多く含む(径2～4ミリ)

※粘質土は地山のバライソ土の砂粒のような砂

第47図 4号窯跡実測図(1/60)



第48図 4号窯跡 遺構検出時出土遺物実測図(1/3)



第 49 図 4号窯跡 窯体内埋土出土遺物実測図 (1/3)

様のつまみが付く。493のカエリは口縁部からわずかに突出する。494は変形が著しいが、カエリは小さく棘状に突き出す。いずれも天井部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ後ナデを施す。495はカエリが無いもので、口縁部は折り曲げが弱く、小さな突起をつける程度である。ボタン様のつまみを有する。天井部外面はヘラ切り後ナデ、他は回転ナデを施すが、天井部内面中央には回転ナデ後ナデが施される。496は杯身である。口縁端を欠く。高台は長めで、端部を外方に引き出す。口縁部は端部を欠くが湾曲しながら立ち上がるものである。底部外面高台内にヘラ記号が付けられる。底部内面は回転ナデ後ナデ、底部外面はヘラ切り後ナデを施す。497～500は皿である。497は丸味のある底部に外反する口縁部が付く。底部内面は回転ナデ後ナデ、外面はヘラ切り後ナデを施す。498は直立する口縁部である。底部内面は回転ナデで、中央はナデている。外面中央はヘラ切り後工具状の粗いナデ痕跡がある。499は外反気味に立ち上がる口縁部である。底部内面は回転ナデ後一定方向のナデ、外面はヘラ切り後ナデで、中央部には板状圧痕が残る。498・499は焼け歪みが著しい。500は口縁部の器壁が他より少し厚い。底部内面は不定方向のナデ、外面はヘラ切り未調整である。501は体部の破片資料である。外面には把手の貼付痕が残り、甗かと思われる。体部外面は上位に横方向のハケと下位に格子目タタキ痕、体部内面は縦方向のハケ状工具痕がある。色調は橙色を呈する。

### (3) 小結

4号窯跡は残存長 2.85 m、平面寸胴形の小型の直立煙道窯である。窯体埋土の土器は、VI期～VII B期までのものを含み、明確な操作時期は不明である。

## V. 総括

石坂窯跡D地点では7基の窯跡、F地点では4基の窯跡が確認された。このうち、D5号窯跡では複数の陶硯や稜碗、F1号窯跡では中空硯やへら書き須恵器「五」が出土したほか、複数の窯跡で中・大型の供膳具を生産していることが明らかとなった。以下では、各窯跡の操業年代を提示した上で、中・大型供膳具、稜碗、へら書き須恵器、陶硯について検討し、報告のまとめとする。

### 1. 各窯跡の年代

#### (1) D地点

**0-A号窯跡**：表土中からではあるが、VIIA期の須恵器が出土しており、8世紀前半に操業した可能性がある。

**0-B号窯跡**：窯体内からVII B期を中心とした須恵器が出土しており、8世紀後半に操業したものと考えられる。

なお、0-A号・0-B号窯跡に伴う灰原からは、高台端部が外方に踏ん張る杯B身があることや、丸底で口縁端部を面取りする台付皿があることから、一部、VI期にさかのぼる可能性がある資料もある。

**1号窯跡**：窯体内埋土出土土器からVII B期の操業と考えられるが、表土出土のものにはより古相の杯Bも含む。なお、表土中からは、口径40cmを超える盤やU字鋤先が出土しており注目される。

**2号窯跡**：窯体内埋土出土土器からVIIA期の操業と考えられる。

**3号窯跡**：灰原資料が中心のため、操業期間は不明であるが、VIIA期を中心にVI期・VII B期の資料を含む。

**4号窯跡**：一部を確認したに留まるため詳細は不明で、出土遺物もない。

**5号窯跡**：焼成部床面出土土器からVII B期の操業と考えられる。また、表土からはVI期の杯B蓋が出土した。生産器種は蓋杯を中心に、杯・台付皿・長頸壺・硯があり、灰原からは稜碗・短頸壺・鉄鉢・甕などが出土した。

#### (2) F地点

**1号窯跡**：灰原出土資料から、VI～VIIA期の操業が想定される。

**2号窯跡**：出土遺物がなく、操業時期は不明である。

**3号窯跡**：窯体内埋土出土土器はVIIA期を中心に、一部VI期・VII B期の須恵器を含む。

**4号窯跡**：窯体内埋土からは、VI期の須恵器とVII B期の須恵器が出土している。

(上田)

### 2. 中・大型供膳具の検討

器高が低く、口径20cm前後を超えるものを中・大型供膳具と仮定した上で、該当資料を抽出すると、D地点では0・1・3・5号窯跡、F地点では1号窯跡に事例がある。また、D1号窯跡では口径40cmを超える超大型品が、F1号窯跡では中・大型供膳具に伴う可能性がある蓋（口径



25.0cm)がある。

近年、小田裕樹氏は飛鳥・奈良時代の古代宮都と周辺遺跡における土器様相を検討し、台付・平底の大型供膳具を上位器種と位置づけ、これらの出土量の多寡と遺跡・遺構の性格が相関する可能性を指摘した(小田2016)。また、長直信氏は古代九州の土器編年研究を進める中で、土器様相の差異と遺跡の性格差を追求していくべきと問題提起をした(長2017)。以下では、こうした視点も踏まえながら牛頭窯跡群を中心に、周辺の集落や官衙出土資料を対象として検討する。なお、口径が大きく(口径20cm前後以上)、器高が低い(径高指数20以下)、いわゆる皿・盤と表現される須恵器を主な対象とするが、一部に器高が高いものや口径が小さいものも参考資料として取り上げる。

## (1) 7世紀の事例

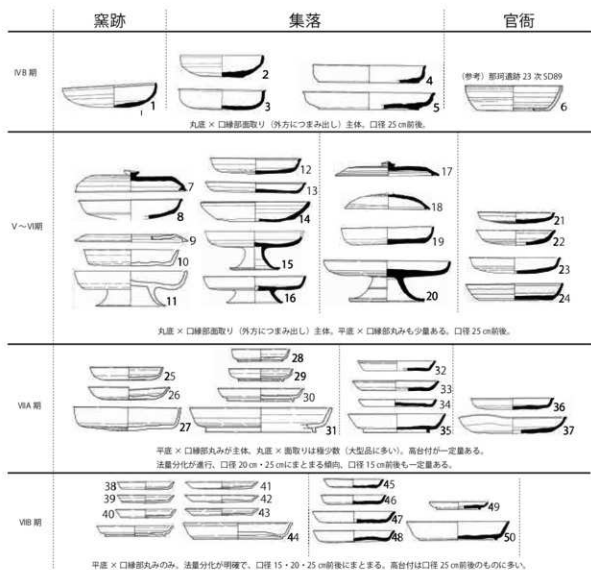
①ⅣB期(7世紀前半) 窯跡では野添窯跡7次2号窯跡で、丸底で口縁部を面取りする資料があり、現在のところ最古相に位置付けられる。集落では日ノ浦遺跡大溝や本堂遺跡7次谷部の資料があり、丸底で口縁部を面取りするものや、平底で口縁部が丸みを帯びるものがある。また、惣利西遺跡5・10号住居や仲島遺跡SD46では、器高が高い資料がある。なお、当該期の官衙関連遺跡である比叻・那珂遺跡では事例が少ないものの那珂遺跡23次SD89では平底で器高が高いものがある。当該期の資料の多くは器高4cm前後で口径25cmを超えるもの(径高指数15前後)が多い。丸底で口縁部を面取りするものが主流で、平底で口縁部が丸みを帯びるものも存在する。底部外面に手持ちヘラケズリを施すものが多い。このほか、径高指数25前後の器高が高い資料も一定量ある。資料数が少なくバリエーションも豊富で、安定した器種ではない。

②Ⅴ～Ⅵ期(7世紀中頃～後半) Ⅴ期に限定できる資料は少ない。Ⅵ期を中心とした宮ノ本窯跡・後田窯跡・平田窯跡などの資料では法量に明確なまとまりはないものの、20～25cmの間に集中する。丸底・口縁部面取りのものが主流であるが、平底で口縁部が丸みを帯びるものが増加する。径高指数は10～20の間にまとまり、器高が高いものはない。また、少数ながら高台が付くものや脚台を有すものがある。集落の事例は資料数が少ないが、窯跡と同様の傾向を示す。官衙では明確に遺構に伴う事例が少ないが、大宰府政庁周辺では丸底・口縁部面取りのものが多く、当該期に位置づけられる可能性がある。

## (2) 8世紀の事例

①ⅦA期(8世紀前半) ⅦA期の窯跡資料は少ないものの、ハセムシ窯跡や道の下窯跡では、平底で体部が直立し、口縁部が丸みを帯びるものがほとんどである。口縁部を面取りするものは口径25cmを越える大型品に多い。高台がつくものが一定量あり、脚台を有すものはない。法量は口径20～25cm、器高3cm前後にまとまるほか、口径15cm前後のものが増加する。官衙では前代同様に明確な時期が判明する事例は少ないが、大宰府政庁周辺の不庁地区SD2340では丸底・口縁部面取りするものがある。集落の事例は少ない。

②ⅦB期(8世紀中頃～後半) ⅦB期でも古相の後田窯跡77地点1号灰原資料は、口径20cm前後・器高3cm前後に集中し、口径25cm前後・器高3～4cmにもまとまりがある。平底で口縁部は丸みを帯び体部は直線的に立ち上がる。7世紀代のものとは異なり定型化し、法量分化が明瞭になる。ⅦB期新相の井手窯跡B2地区灰原資料では、口径が15cm前後、20cm前後、25cm前後でまと



1：野添遺跡 7次、2・3：惣利西遺跡、4・5：日の浦遺跡、6：那珂遺跡、7・8：瀬ノ原遺跡、9～11：平田集跡 E 地点、12～16：宮ノ本集跡、17：御笠印出土地周辺遺跡、18・19：塚原、20：龍頭遺跡、21・22：大宰府政庁跡、23：麓可跡、24：桑坊 98SX005、25～31：道ノ下集跡、32・33：日ノ浦、34・35：本堂、36・38：不丁地区、38～44：井手集跡、45～50：日ノ浦

第 50 図 7～8 世紀の中・大型供膳具 (牛頭窯跡群周辺) (1/10)

まり、器高の高低とも概ね相関する。口径 25cm 前後のものは器高 4 cm 以上になることが多く、これは高台が付くことを反映しており、口径の大小と高台の有無が相関する可能性がある。こうした傾向は集落遺跡の日ノ浦遺跡・塚原遺跡などの事例とも矛盾せず、大 (口径 25cm 前後)・中 (口径 20cm 前後)・小 (口径 15cm 前後) と明確な法量分化がうかがえる。高台が付くものは全体の 1～2割と少ない。

### (3) 中・大型供膳具の動態と石坂窯跡 D・F 地点の位置づけ

以上、中・大型供膳具について大きく 7 世紀の事例と 8 世紀の事例に分け、形態的な特徴や法量の視点から検討した。以下では、中・大型供膳具の動態を整理するとともに、石坂窯跡 D・F 地点出土資料の位置づけを行う。

初源的なものは 7 世紀前半には出現する。丸底で古墳時代的な様相を残すが、口縁部を面取りし、

口縁端部を内外面に突出させるものがあるなど、金属器的な側面もある。一方で、8世紀以降に主流となる平底のものも一定量ある。数量は少なく、形態的な変異が大きいことや法量にまとまりがないことから、安定的な存在ではない。7世紀後半には窯跡での事例が増加し、一定量の生産が見込まれる。前代に引き続き丸底・口縁部面取りのものが主流である。こうした特徴は8世紀には非常にまれであり、7世紀の特徴と考えることができる。また、脚台を有すものこの時期に限定される。牛頭周辺の集落では非常に少ない反面、大宰府政庁周辺に多い傾向があり、遺跡の性格差と器種の相違を反映する可能性がある。

8世紀前半には、7世紀にみられた丸底・口縁部面取りのものがほぼ消滅し、平底・口縁部丸みを有すものが主体となる。口径20cm前後・25cm前後にまとまる傾向があり、大型品を中心に高台が付くものが増加する。前代同様に一般集落では事例が少ない。

8世紀中頃～後半は前代の様相を踏襲するとともに、口径15・20・25cmの3群に法量分化する。また、大型品を中心に高台が付くものが一定量ある。

D0-A・B号窯跡出土の34は、底部が丸く口縁部を面取りする点や高台の形状が7世紀後半の杯B身に近い点で、7世紀後半の所産である可能性が高い。ただし、VI期の資料で高台を付すものは少なく、VIIA期までくだる可能性もある。D1号窯跡の45は、表土中の遺物であり年代的な位置づけは不明であるが、牛頭窯跡群最大級のものの一つである。D3号窯跡の121は丸底で口縁部を面取りし、底部外面手持ちヘラケズリである点で古相を呈す。VIIA期以前と考えられる。F1号窯跡表土出土の353は丸底気味で口縁端部をわずかに突出、灰原出土の394・395も口縁部面取り・外側に突出させており、VI期～VIIA期の可能性が高い。同窯の操業年代とも矛盾しない。なお、同灰原では口径25.0cmの大型蓋(382)が出ており、大型供膳具に伴う可能性もあるが、セットとなる器種は不明である。

以上、石坂窯跡群ではD・F地点でVI～VIIA期を中心に中・大型供膳具を生産していることが明らかとなった。当該期における中・大型供膳具は、一般集落では少なく大宰府政庁周辺に比較的多く分布している。牛頭窯跡群と大宰府との関係性の一旦を示す資料であり、今後、他の器種や土師器の大型供膳具も含め改めて検討を深める必要がある。

(上田)

### 3. 稜椀とヘラ書き須恵器

#### (1) 稜椀

D5号窯跡で2点の破片が出土した。石木秀啓氏の集成(石木2008)によると、牛頭窯跡群周辺では日ノ浦遺跡群で2点、本堂遺跡で2点あり、大宰府周辺を含めても類例が非常に乏しい。いずれも8世紀中頃～後半の集落出土例である。ここでは、稜椀の諸例を比較する。

**石坂窯跡の事例**(第51図5・6) 器形・調整・色調などが酷似する。体部は直線的に外方にのび、口縁部はゆるやかにL字状に屈曲する。外面の体部中位に稜が巡り、これと対応する内面は強い回転ナデにより凹面状を呈する。内面の強い回転ナデは器形に影響を及ぼすものではなく、稜は外面の回転ナデにより作出されたものと考えられる。稜付近の回転ナデは他の部位の回転ナデを切っ

おり、やや光沢があることから、ある程度乾燥が進行した段階に施した可能性がある。また、外面には降灰があるが内面にはなく、本来蓋を伴っていた可能性がある。焼成はやや甘く灰色を呈する。本例は牛頭窯跡群において確実に須恵器窯跡に伴う初めての事例である。

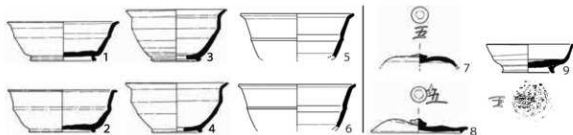
**日ノ浦遺跡の事例**（第51図1・2） SK17・SK20でそれぞれ1点ある。SK17例は、体部が直線的に外方にのび、口縁部はゆるやかにL字状に屈曲する。体部内面中位は強い回転ナデにより凹面状を呈し、これに対応する外面が緩やかに突出する。内面の強い回転ナデにより外面の稜を作出した可能性がある。口縁端部～体部外面と内面の焼成具合が異なり、本来蓋を伴っていたと考えられる。焼成不良で瓦質を呈する。SK20例は、体部が直線的に外方にのび、口縁部は強く屈曲し上面が水平となる。体部内面中位は強い回転ナデにより凹面状を呈し、これに対応する外面が緩やかに突出する。外面の稜付近には、さらに回転ナデを加えて稜を強調している。口縁端部～体部外面に降灰があるが、内面には降灰がなく、本来蓋を伴っていたと考えられる。焼成は良好である。なお、日ノ浦例は、石坂例・本堂例と比べやや器高が低い。

**本堂遺跡の事例**（第51図3・4） 6次SX06で2点報告されている。器形・調整・色調などが酷似しており、同一個体の可能性もあるが、口縁部上面の形態がわずかに異なる。体部は深く、下半部は丸みを帯び、上半部は直立する。口縁部は緩やかにL字状に屈曲し、上面は強い回転ナデにより凹線状を呈す。体部内面中位は強い回転ナデにより凹線状を呈し、これに対応する外面に稜が生じている。さらに外面の稜線から下位に回転ヘラケズリを施し、稜を強調している。外面には降灰が認められるが、内面には降灰がなく、口縁端部の一部に軸着痕があることから、本来蓋を伴う可能性がある。

以上、3遺跡の事例について概要を記した。石坂窯跡の事例は、唯一生産地の出土例であり、消費地の事例と比較することにより需給関係を明らかにできるのではないかと考えたが、製作技法や器形など三者三様であり、明確な結果を得ることができなかった。ただし、いずれも外面の稜に対応する内面に強い回転ナデをくわえることが共通しており、牛頭窯跡群の稜輪の特徴といえるかもしれない。今後、他地域の事例も検討する必要がある。

## （2）ヘラ書き須恵器

F1号窯跡で、杯B身の底部外面に「五」と記したヘラ書き須恵器がある。しっかりとした筆跡ではあるが、一般的な書き順の二画目となる縦画を最後に記す。器形からVI期の所産と考えられる。牛頭窯跡群周辺で「五」のヘラ書き須恵器は塚原遺跡で2点ある。いずれも正しい書き順で書いており、石坂例とは異なる。時期はいずれもVI期と考えられ、石坂例と同時期に位置づけられる。興味深いのが2点とも大きく歪んでいることで、特に第51図8は焼成時に割れが生じている。塚原遺跡群は須恵器工人集落と位置づけられ、ヘラ書き須恵器の文字を記した集落という意見（石木2008）や、須恵器の集積地・選別場であったという意見もある。「五」という単純な文字ではあるが、生産地と消費地で同時期の同様のヘラ書き須恵器が存在することは、須恵器の需給関係を推測する上で大きな手がかりとなる。石坂例は生産地における1次選別で廃棄したもの、塚原例は2次選別により廃棄されたものと理解することができるのであれば、石坂窯跡と塚原遺跡の需給関係を示し、塚原遺跡が須恵器の集積地・選別場であったという考えを補強する。牛頭窯跡群における生産体制



【種類】

1：日ノ浦遺跡 SK17、2：日ノ浦遺跡 SK20、3・4：本堂遺跡 6次 SX06、5・6：石坂窯跡 D 地点 5 号窯跡

【へら書き須恵器「五」】

7：塚原遺跡群 SK13、8：塚原遺跡群 P776、9：石坂窯跡 F 地点 1 号窯跡

第 51 図 牛頭窯跡群周辺の稜椀・へら書き須恵器「五」(1/6)

や生産物の管理・流通を考える上で、非常に興味深い資料といえよう。今後、牛頭周辺以外の消費地におけるへら書き須恵器「五」の発見が期待される。

(上田)

#### 【参考文献】

石木秀啓 2008 「Ⅲ. まとめ 2. 奈良時代の本堂遺跡群」(大野城市教育委員会『牛頭本堂遺跡群Ⅴ』大野城市文化財調査報告書第 76 集)

石木秀啓 2017 「牛頭窯跡群出土のへら書き須恵器について」『考古学・博物館学の風景 中村浩先生古希記念論文集』

遠藤茜 2008 「Ⅲ. まとめ 4. 牛頭塚原遺跡群出土のへら書き須恵器」(大野城市教育委員会『牛頭本堂遺跡群Ⅵ』大野城市文化財調査報告書第 81 集)

小田裕樹 2016 「古代官衙とその周辺の土器様相」『第 19 回古代官衙・集落研究会報告書 官衙・集落と土器 2』

長直信 2017 「西海道出土の土器編年研究 - 7 世紀における土器編年の現状と課題 -」『徹底追及！大宰府と古代山城の誕生』

#### 【報告書】

(大野城市) 1981 『牛頭平田窯跡 - E 地点 -』大野城市文化財調査報告書第 7 集、1991 『牛頭後田窯跡群』大野城市文化財調査報告書第 33 集、1994 『牛頭日ノ浦遺跡群』大野城市文化財調査報告書第 42 集、1995 『牛頭塚原遺跡群』大野城市文化財調査報告書第 44 集、2006 『牛頭野添遺跡群Ⅳ～第 7 次調査～』大野城市文化財調査報告書第 70 集、2008 『牛頭本堂遺跡群Ⅴ』大野城市文化財調査報告書第 76 集

(春日市) 1981 『浦ノ原窯跡群』春日市文化財調査報告書第 11 集、1985 『春日地区遺跡群Ⅲ』春日市文化財調査報告書第 15 集

(九州歴史資料館) 2002 『大宰府政庁跡』、2013 『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅳ - 不丁地区 遺物編 1 -』、2020 『大宰府政庁周辺官衙跡ⅩⅡ - 蔵司地区 平坦部編 1 -』

(太宰府市) 1992 『宮ノ本遺跡 - 窯跡篇 -』太宰府市文化財調査報告書第 10 集、1996 『大宰府条坊跡Ⅹ』太宰府市文化財調査報告書第 30 集、2000 『御笠団印出土地周辺遺跡 1 - 第 7・9・10 次 -』太宰府市文化財調査報告書第 47 集

(福岡県) 1988 『牛頭窯跡群Ⅰ』福岡県文化財調査報告書第 80 集、1989 『牛頭窯跡群Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第 89 集、1996 『龍頭遺跡』福岡県文化財調査報告書第 123 集

(福岡市) 1992 『那珂遺跡 4』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 291 集

#### 4. 陶硯の位置付け

石坂窯跡D地点5号窯およびF地点1号窯では、陶硯が出土した。牛頭窯跡群では300基を超える窯跡が調査されてきたが、陶硯の出土量は極めて少ないことが明らかとなっている（山元2021a）。報告資料は、牛頭窯跡群における陶硯生産の実態を解明する上で、重要な位置を占めるため、種類ごとに検討を加え、位置付けについて述べる。なお、牛頭窯跡群における陶硯の時期的変遷や出土状況については、すでに『史跡牛頭須恵器窯跡1』（大野城市文化財報告書第186集）にまとめているため、そちらを参照いただきたい。

##### (1) 圓足円面硯

圓足円面硯はD地点5号窯の窯体内埋土から2点、灰原から1点の計3点出土した（第24図233・234、第30図319）。共存する須恵器から、8世紀後半に位置付けられる。いずれも硯部を欠いており、全体をうかがえるものはない。脚部はL字状に屈曲し、端部がわずかに垂下するもので、須恵器高杯の脚部に類似する。透かしはいずれも長方形を呈し、319のみ円形と長方形を組み合わせた特徴的な構成である。長方形の透かしは、牛頭産の圓足硯において最も普遍的な装飾である。一方の円形透かしは、牛頭窯跡群で初めて確認された装飾である（註1）。大宰府出土資料においても、長方形透かしと円（長円）形透かしの割合は概ね10:1を示し、客体的な存在と言える（山元2021b）。なお、透かしを施す際、233・234については内面の角を丁寧に面取りしている。面取りは、7世紀後葉から8世紀前葉の古い段階の資料には普遍的に認められ、8世紀後葉段階には省略傾向にあることから、233・234は丁寧な作例と言えるだろう。

##### (2) 円形硯

円形硯は、8世紀後半に位置付けられるD地点5号窯灰原から1点出土した（第30図318）。牛頭窯跡群では、本資料が初例となる。須恵器皿をベースとしたもので、皿の中央に円形の硯面を作り出し、その周囲には海をめぐらせる。底部には円柱状の低い脚を2つ並べて貼り付け、硯面に傾斜をつける。傾斜した硯面の最も低くなる部分にはくぼみが設けられ、墨汁はまずこのくぼみに溜まる仕組みである。形態は異なるものの、構造としては風字硯に近い。牛頭窯跡群における風字硯の生産開始は8世紀後半にあたり、畿内とほぼ同時期に導入されたことが明らかになっている。今回報告した円形硯も8世紀後半に位置付けられる点を踏まえると、風字硯の構造を把握した（製作していた？）工人によって創出された陶硯である可能性が高い。

**大宰府出土事例の検討** 脚のついた円形硯は大宰府において類例が見出せるため、これらの資料と石坂例との比較を行う。大宰府出土資料は形態的特徴から、A・Bの2つに分類できる（第52図）。A類は須恵器杯蓋をベースとするもので、逆に据えた杯蓋に3つの脚がつく。脚は3箇所に均等に配置され、2つは長方形の低い脚を貼付し、残りの1つは器面をくぼませて海部兼用の脚としている。この海を兼ねる脚は、他の2脚と比べて低く作られていないため、硯面は水平に近いものと推測される（註2）。石坂例との形態的な差異は大きいものの、墨汁を溜めるくぼみを有する点は類似する。第52図2は8世紀前葉の土器群に伴うことから、当該期には存在したことは確実だが、類例が少ないため、出現時期や存続幅は不明である。

B類はいずれも全形をうかがうことはできないが、皿をベースとしたものとみられる。底面に2

つ並んで脚を貼り付け、傾斜した状態での使用を意図している点は、石坂例と一致する。一方で、突出する硯面（陸部）を持たない、脚の先端をつまみ出して獣脚状に成形するといった相違点も認められる。いずれも良好な出土状況に恵まれず、時期を特定することは難しい。

上記の比較を踏まえると、石坂例は円形硯B類に相当する資料と言えよう。石坂例は大宰府のものに比べて残存状況がよく、硯面を傾斜させて使用することが明確に分かる好例である。また、B類の年代的定点となる点も重要である。今回提示した各型式の時期幅は明らかでないが、A類は8世紀前半、B類は8世紀後半に存在したことは確実であるため、A→Bの出現順序と仮定しておく。そうであるならば石坂例は、墨汁を溜めるくぼみを作り出す古手の要素（A類）、硯面を傾斜させる新来の要素（B類）を同時に有する折衷的な存在と評価できよう。

### (3) 把手付中空円面硯

F地点1号窯から把手部分が1点出土しており（第40図413）、共伴した須恵器から7世紀後葉に位置付けられる。中央は空洞で、上面にあげられた長方形の穿孔と繋がる。おそらく硯部も中空で、把手と接続していたとみられる。表面は丁寧に面取りされ、先端が尖ることから亀をモチーフにしたものとみられるが、口や目の表現はない。窯に確実に伴う資料としては、3例目である。

**筑前国出土事例の検討** 把手付中空円面硯については、これまでも九州北部地域で多くの類例が紹介されており、本地域に分布の集中が認められる（杉本1987）。今回は牛頭産須恵器の主要な消費地である筑前国を対象を絞り、資料を集成した（表1・第53図）（註3）。

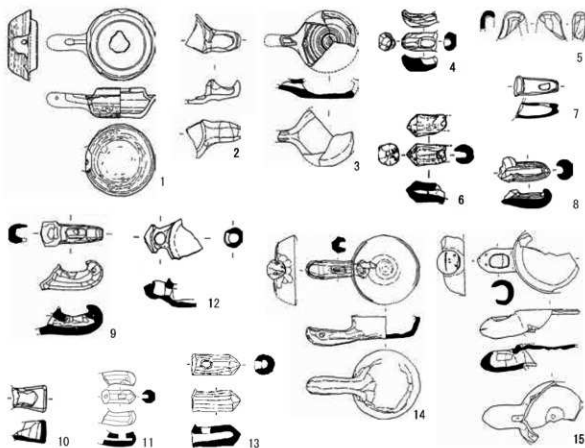
まず分布状況を見ると、大野城市南部地域、つまり牛頭窯跡群内に最も集中する。窯跡に伴うものとしては、春日市浦ノ原4号窯や大野城市ハセムシ窯のものがある。前者は7世紀後葉の資料で、口や目がヘラ描きされており、明確に亀を表現する。後者は7世紀後葉から8世紀初頭の資料で、亀形とされるが、三角形の頭部を有する点は他に類例を見出せない。その他、窯跡の一角に位置する集落遺跡である春日市惣利北遺跡や大野城市本堂遺跡群、梅頭遺跡群からも出土している。これらには、鳥（もしくは亀）をモチーフにしたものや方形のものなど、多様な把手形態が認められる。



第52図 大宰府出土円形硯の諸例 (1/6)

表 1 筑前国出土把手付中空円面碗

No	遺跡名	種別	遺構	所在地	時期	把手形態		出典
						亀	鳥 その他	
1	元岡・桑原遺跡群7次	官衙	SX123	福岡市西区元岡	7C後～	○	?	福岡市1012集
2	元岡・桑原遺跡群20次	官衙	SX002	福岡市西区元岡	7C後～8C後	○	?	福岡市902集
3	元岡・桑原遺跡群31次	厨屋	2面T-1	福岡市西区元岡	—	—	—	福岡市1103集
4	観世音寺(大宰府史跡109次)	寺院	黒褐色土	太宰府市観世音寺	—	○	—	大宰府史跡563標榜
5	大宰府政庁周辺官衙不丁地区(大宰府史跡14次)	官衙	SD320	太宰府市観世音寺	7C後～8C	○	?	大宰府政庁周辺官衙跡V
6	前田遺跡5次	官道	SD02	太宰府市大佐野	—	—	—	太宰府市63集
7	本堂遺跡群7次	家跡?	谷部B区5層	大野城市上大利	—	—	—	大野城市81集
8	本堂遺跡群7次	家跡?	反原1上層	大野城市上大利	—	○	?	大野城市81集
9	本堂遺跡群12次	家跡?	第2面包倉層	大野城市上大利	—	—	○?	大野城市80集
10	梅垣遺跡群2次	家跡?	2・3区間谷部褐色土	大野城市上大利	—	—	—	大野城市84集
11	石坂家跡群F地点	家跡	1号室	大野城市牛頭	7C後	○	?	大野城市210集
12	ハセムシ家跡群	家跡	最下段反原	大野城市牛頭	7C後～8C初	○	?	大野城市30集
13	九州大学筑紫キャンパス遺跡群	官道/寺院?	9E区層地帯	春日市春日公園	—	○	○	九州大学理工学舎6集
14	漢ノ原家跡群	家跡	4号室	春日市大土居	7C後	○	○	春日市11集
15	惣利土遺跡	集落	1号住居	春日市春日	7C後	○	○	春日市16集



※番号は表 1 に対応

第 53 図 筑前国出土把手付中空円面碗の諸例 (1/6)

牛頭窟跡群に次いで多く出土しているのが、福岡市西区の元岡・桑原遺跡群である。黒書土器や木筒を伴うことから、公的機関との関連が推測される。なお、周辺に須志器窯は見つかっていないが、焼き釜んだ須志器や当具などの土器生産に関連する木製品が出土するなど、須志器の生産が示唆されることから、陶甎も地元で生産された可能性が考えられる。

意外なことに牛頭産陶甎の一大消費地である大宰府では、不丁官衙地区で 1 点、観世音寺跡で 1



点のわずか2点しか出土しておらず、その他には府庁域から外れた太宰府市前田遺跡で1点確認できるのみである。

次に、形態に着目する。把手部分をみると、亀を模したものが最も多い。多様な表現方法が認められるが、ヘラ書きなどで亀の顔を表現したものや先端部を削り出して亀の頭だけを表現したものが多い。把手はいずれも中空で、上面に穿孔が施される点はすべてに共通する。

最後に時期について確認しておく。生産地の資料は、いずれも7世紀後葉から8世紀初頭に取まる。牛頭窯跡群における陶硯生産の開始は7世紀後葉であることから、陶硯導入期の比較的短期間に生産された可能性がある。消費地については、時期を特定できる資料が少ないものの、概ね生産地と同様の傾向を示すようである。

以上、筑前国出土の把手付中空円面硯について概要を整理した。出土量が少ないこともあり、大まかな傾向の把握に留まったが、特に亀形の把手が多い点は指摘できよう。出土遺跡の内容をみると、官衙や寺院、窯跡からの出土が多く、一般的な陶硯と同様の傾向を示すものの、筑前国最大の陶硯出土量を誇る大宰府での少なさが際立つ。短期間の生産に起因する可能性もあるが、選択的受容の結果である可能性も想定される。今後の出土例の増加を踏まえ、改めて検討したい。

#### (4) まとめ

今回報告した資料には圈足円面硯・円形硯・把手付中空円面硯がみられ、7世紀後半から8世紀後半に至るまで、多様な陶硯を生産していた様子がより鮮明になった。特に脚付きの円形硯は、牛頭窯跡群唯一の出土例で、確実な生産を示す重要な資料である。こうした特殊な円形硯は、現状のところ大宰府でのみ確認されるため、牛頭窯跡群と大宰府との密接な需給関係を補強するものといえるだろう。

(山元)

#### 【註】

- (1) 牛頭窯跡群内に位置する大野城市塚原遺跡のSK04からは、槽皿型の透かしを有した円面硯が出土している。形態や釉土、色調から牛頭産である可能性が高い。
- (2) 第52図1は、破片資料を復元しており、傾き等は明確でない。
- (3) 今回は把手が確実に伴うもののみを対象とし、把手のつかない中空円面硯は除外した。

【参考文献】 ※紙幅の都合上、報告書は割愛した。

杉本 宏 1987「飛鳥時代初期の陶硯」『考古学雑誌』第73巻2号 日本考古学会

山元瞭平 2021a「牛頭窯跡群出土の陶硯」『史跡牛頭須志器窯跡1』大野城市文化財調査報告書第186集 大野城市教育委員会

山元瞭平 2021b「大宰府の陶硯と牛頭窯跡群」『九州考古学』第96号 九州考古学

表2 石坂窯跡D地点出土遺物観察表

遺物 番号	種類	時期	出土地点	数量(m <sup>2</sup> )		形態、技法の概要	A: 胎土 B: 胎色 C: 色調	備考
				①(100g未満)	②(100g以上)			
1	磁器類	新石器	9-A等 表土層	①0.5 ②1.6	片断 陶板→フラスコ・陶板ナゲ・陶板ナゲ 片断 陶板ナゲ・陶板ナゲナゲ	A: 黄白 1mm以下・白色胎土少量 B: 良好 C: 内肌、黒色		
2	磁器類	新石器	9-A等 表土層	①14.9 ②2.8 ③→2.8(10.3)・交差 線15.5	片断 陶板ナゲ・陶板→フラスコ・陶板ナゲ 片断 陶板ナゲ・陶板ナゲナゲ	A: 黄白 1mm以下少量 B: 良好 C: 内肌、黒色		
3	磁器類	新石器	9-A等 表土層	①36.7 ②2.7 ③→2.8(10.2)	片断 陶板ナゲ・陶板→フラスコ 片断 陶板ナゲナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土少量 B: 良好 C: 内肌、黒色		
4	磁器類	新石器	9-A等 表土層	①2.8 ②3.1	片断 陶板ナゲ→フラスコナゲ 片断 陶板ナゲ・陶板ナゲナゲ	A: 黄白 1mm以下・白色胎土少量 B: 良好 C: 内肌、灰10Y5/3		
5	磁器類	新石器	9-A等 表土層	②(2.6) ③(1.6)	片断 陶板ナゲ・高台製形ナゲ・ナゲ 片断 陶板ナゲ	A: 黄白 磨面長石・磨面短石少量 B: 不良 C: 内肌、浅黄2.5Y7/3	全体の1/4程度	
6	磁器類	新石器	9-A等 表土層	①(14.4) ②(2) ③(10.4)	片断 陶板ナゲ・高台製形・陶板→フラスコナゲ 片断 陶板ナゲ・陶板ナゲナゲ	A: 黄白 磨面長石・磨面短石少量 B: やや不良 C: 内肌、灰10Y5/3	全体の1/4程度	
7	磁器類	新石器	9-A等 表土層	①4.1 ②3.6 ③3.8	片断 陶板ナゲ・高台製形ナゲ・陶板→フラスコ 片断 陶板ナゲ・陶板ナゲナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土少量 B: 良好 C: 内肌、黄灰6/1		
8	磁器類	新石器	9-A等 表土層	①(14.6) ②(6.1) ③(19.4)	片断 陶板ナゲ→フラスコ・高台製形ナゲ→陶板 →フラスコナゲ・陶板 片断 陶板ナゲ・陶板ナゲナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土少量・磨面磨面磨面 B: 良好 C: 内肌、黒色	1/4程度程度	
9	磁器類	新石器	9-A等 表土層	②(4.7) ③(10.8)	片断 陶板ナゲ→フラスコナゲ・陶板ナゲ・陶板ナゲ 片断 陶板ナゲ・陶板ナゲナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土少量 B: 良好 C: 内肌、粉赤オーパ3.5Y5/1 内肌、黒色		
10	磁器類	新石器	9-A等 表土層	①(3.8) ②(14.2)	片断 陶板ナゲ・高台製形ナゲ・高台製形ナゲ・陶板 →フラスコナゲ・陶板ナゲナゲ・洗 へ→洗 片断 陶板ナゲ・高台製形ナゲ・高台製形ナゲ・陶板 →フラスコナゲ・陶板ナゲナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土少量 B: 良好 C: 内肌、黒色		
11	磁器類	新石器	9-A等 表土層(内層)	①2.8 ②1.6	片断 陶板→フラスコ・陶板ナゲ 片断 陶板ナゲナゲ・陶板ナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土・1mm以下胎土少量 B: 不良 C: 内肌、灰10Y5/3 内肌、浅黄2.5Y7/3		
12	磁器類	新石器	9-A等 表土層(内層)	①36.6 ②2.2 ③→2.8(10.2)	片断 コップナゲ・陶板→フラスコ・陶板ナゲ 片断 陶板ナゲ・陶板ナゲナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土少量 B: やや不良 C: 内肌、灰10Y5/3 内肌、灰10Y5/3		
13	磁器類	新石器	9-A等 表土層(内層)	①32.2 ②3.8 ③9.9	片断 陶板ナゲ・高台製形ナゲ・陶板→フラスコ 片断 陶板ナゲ・陶板ナゲナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土少量 B: やや不良 C: 内肌、黒色		
14	磁器類	新石器	9-A等 表土層(内層)	①(14.8) ②(5.4) ③(11.4)	片断 陶板ナゲ・高台製形ナゲ・陶板→フラスコ 片断 陶板ナゲ・陶板ナゲナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土少量 B: やや不良 C: 内肌、灰10Y5/3 内肌、灰10Y5/3		
15	磁器類	新石器	9-A等 表土層(内層)	②(2.3) ③(9.4)	片断 陶板ナゲ・高台製形・ハタケ型土器製・コップ 片断 陶板ナゲナゲ	A: 黄白 磨面胎土胎土少量 B: 良好 C: 内肌、黒色		
16	磁器類	新石器	9-A等 表土層(内層)	②(2.3) ③(10.4)	片断 ナゲ・高台製形・陶板ナゲ 片断 陶板ナゲナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土・1mm以下胎土少量 B: やや不良 C: 内肌、灰10Y5/3 内肌、灰10Y5/3		
17	磁器類	新石器	9-A等 表土層(内層)	①5.9 ②4.9 ③11.2	片断 陶板ナゲ・高台製形コップナゲ・陶板→フラスコナゲ 片断 陶板ナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土・1mm以下胎土少量 B: やや不良 C: 内肌、灰10Y5/3 内肌、灰10Y5/3		
18	磁器類	新石器	9-A等 表土層(内層)	①(2.8) ②(6.2)	片断 陶板ナゲ 片断 陶板ナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土胎土少量 B: 良好 C: 内肌、粉赤オーパ3.5Y5/1		
19	磁器類	新石器	9-A等 表土層(内層)	①(14.6) ②(2.1) ③→2.8(10.1)	片断 陶板ナゲ・陶板→フラスコ・陶板 片断 陶板ナゲナゲ・陶板ナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土・1mm以下胎土少量 B: 良好 C: 内肌、灰10Y5/3 内肌、灰10Y5/3		
20	磁器類	新石器	9-A等 表土層(内層)	①(16.3) ②(2.8) ③→2.8(10.2)	片断 陶板ナゲ・陶板→フラスコ→フラスコ 片断 陶板ナゲナゲ・陶板ナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土少量 B: 良好 C: 内肌、灰10Y5/3 内肌、灰10Y5/3		
21	磁器類	新石器	9-A等 表土層(内層)	①20.8 ②3.6 ③→2.8(10.2)	片断 陶板ナゲ・陶板→フラスコ 片断 陶板ナゲナゲ・陶板ナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土胎土少量 B: 良好 C: 内肌、浅黄2.5Y7/3		
22	磁器類	新石器	9-A等 表土層(内層)	①(7.4) ②(4.7)	片断 陶板ナゲ 片断 陶板ナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土胎土少量 B: やや不良 C: 内肌、灰10Y5/3 内肌、灰10Y5/3		
23	磁器類	新石器	9-A等 表土層(内層)	②(1.9) ③(13.8)	片断 陶板ナゲ・高台製形コップナゲ→フラスコナゲ 片断 陶板ナゲナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土・1mm以下胎土少量 B: 不良 C: 内肌、浅黄2.5Y7/3		
24	磁器類	新石器	9-A等 表土層(内層)	①(21.8) ②(5.8) ③(14.3)	片断 陶板ナゲ・高台製形・陶板→フラスコナゲ 片断 陶板ナゲナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土胎土少量 B: やや不良 C: 内肌、粉赤オーパ3.5Y5/1 内肌、灰10Y5/3		
25	磁器類	新石器	9-A等 表土層(内層)	①(15.4) ②(2.7) ③(12.7)	片断 陶板ナゲ・フラスコ→フラスコ 片断 片断ナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土胎土少量 B: 良好 C: 内肌、粉赤オーパ3.5Y5/1 内肌、黒色		
26	磁器類	新石器	9-A等 表土層(内層)	①(8.0) ②(4.4)	片断 陶板ナゲ 片断 陶板ナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土胎土少量 B: 良好 C: 内肌、粉赤オーパ3.5Y5/1 内肌、黒色		
27	磁器類	新石器	9-A等 表土層	①(11.5) ②(1.4)	片断 陶板→フラスコ・陶板ナゲ 片断 陶板ナゲナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土胎土少量 B: 良好 C: 内肌、黒色		
28	磁器類	新石器	9-A等 表土層	①(15.5) ②(2.3)	片断 陶板→フラスコ・陶板ナゲ 片断 陶板ナゲナゲ・陶板ナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土胎土少量 B: 不良 C: 内肌、灰10Y5/3 内肌、浅黄2.5Y7/3		
29	磁器類	新石器	9-A等 表土層	①3.8 ②2.3 ③→2.8(10.2)	片断 コップナゲ・陶板→フラスコ・陶板ナゲ 片断 陶板ナゲナゲ	A: 黄白 2mm以下胎土胎土少量 B: やや不良 C: 内肌、灰10Y5/3 内肌、灰10Y5/3		
30	磁器類	新石器	9-A等 表土層	①14.8 ②3.8 ③→2.8(10.2)	片断 陶板ナゲ・陶板→フラスコ 片断 陶板ナゲナゲ・陶板ナゲ	A: 黄白 1-2mm以下胎土胎土少量 B: 良好 C: 内肌、黒色		
31	磁器類	新石器	9-A等 表土層	②(2.4) ③(4)	片断 陶板ナゲ・高台製形・陶板→フラスコ 片断 ナゲ	A: 黄白 2mm以下胎土・1mm以下胎土胎土少量 B: 良好 C: 内肌、灰10Y5/3		
32	磁器類	新石器	9-A等 表土層	②(3.0) ③(3.3)	片断 陶板ナゲ・陶板→フラスコ・高台製形ナゲ→フラスコ ナゲ	A: 黄白 1-1.5mm以下胎土胎土少量 B: 良好 C: 内肌、黒色		
33	磁器類	新石器	9-A等 表土層	①(16.7) ②(4.7)	片断 陶板ナゲ 片断 陶板ナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土胎土少量 B: 良好 C: 内肌、黒色		
34	磁器類	新石器	9-A等 表土層	①(21.4) ②(4.4) ③(11.4)	片断 陶板ナゲ・高台製形・陶板→フラスコ 片断 ナゲ・陶板ナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土胎土少量 B: 良好 C: 内肌、粉赤オーパ3.5Y5/1 内肌、灰10Y5/3		
35	磁器類	新石器	9-A等 表土層	②(7.4) ③(11.2)	片断 陶板ナゲ・陶板→フラスコ・高台製形ナゲ・陶板 →フラスコ	A: 黄白 胎土 B: 良好 C: 内肌、黒色		
36	磁器類	新石器	9-A等 表土層	②(9.8)	片断 陶板ナゲ・高台製形ナゲ・陶板 片断 コップナゲ・陶板	A: 黄白 1-2mm以下胎土胎土少量 B: 良好 C: 内肌、黒色		
37	磁器類	新石器	9-A等 表土層	①(12.0) ②(3.4) ③(10.4)	片断 陶板ナゲ→フラスコ→フラスコ 片断 陶板ナゲ	A: 黄白 3mm以下胎土胎土少量 B: やや不良 C: 内肌、灰10Y5/3 内肌、浅黄2.5Y7/3		
38	磁器類	新石器	1号裏 表土層	①0.9 ②1.9	片断 ナゲ・フラスコ・陶板ナゲナゲ 片断 陶板ナゲ・陶板ナゲナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土胎土少量 B: 不良 C: 内肌、灰10Y5/3		
39	磁器類	新石器	1号裏 表土層	①2.8 ②3.4 ③→2.8(10.2)	片断 陶板ナゲ・陶板→フラスコ・陶板ナゲ 片断 陶板ナゲ・陶板ナゲナゲ	A: 黄白 1mm以下胎土胎土少量 B: 良好 C: 内肌、灰10Y5/3 内肌、灰10Y5/3	裏面でのみ	

集約番号	種類	築地	地上地点	面積(m <sup>2</sup> )		用途、供用目的	A・B・C・D・E・F・G・H・I・J・K・L・M・N・O・P・Q・R・S・T・U・V・W・X・Y・Z	備考
				①口部面積(高層部を除く)	②口部面積(高層部を除く)			
40	建築地	計画	1号 築上層	①31.0 ②2.8 ③→2本線2.5	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・中々不具 C・内、R13YR/2 内、R13YR/2		
41	建築地	計画	1号 築上層	①22.5 ②4.7 ③4.5	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部、高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R9Y3R/1 内、R9Y3R/1		
42	建築地	計画	1号 築上層	①33.4① ②3.7 ③(9.6)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部コナナド 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R2N/1		
43	建築地	計画	1号 築上層	①4.4 ②3.8 ③9.5	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R9Y3R/2		
44	建築地	計画	1号 築上層	①34.0① ②5.9 ③(9.3)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部コナナド 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R13YR/2		
45	建築地	整	1号 築上層	①(9.0) ② (4.6)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R13YR/1 内、R9Y3R/2	大層部・中層部 計表あり	
46	建築地	建築地	1号 築上層	①33.4① ② (2.6)	外庭：コナナド→高層部コナナド 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R2YR/1		
47	建築地	整	1号 築上層	② (7.0) ③(9.3)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部コナナド 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R9Y3R/2 内、R13YR/1		
48	建築地	基	1号 築上層	①32.0① ②18.6② ③(19.0)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部コナナド 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R2YR/1 内、R2YR/1		
49	調整品	1号調整地	1号 築上層	①(積算)② ③(積算)④ ⑤(積算)⑥				
50	建築地	計画	1号 築上層	①33.1① ②(4)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・中々不具 C・内、R9Y3R/2 内、R2N/1	計表あり	
51	建築地	計画	1号 築上層	①33.8① ②(2) ③→2本線2.2	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R2N/1 内、R2N/1		
52	建築地	計画	1号 築上層	①33.9 ②2.9	外庭：コナナド→高層部コナナド 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R13YR/1 内、R13YR/1		
53	建築地	計画	1号 築上層	①33.5 ②4.0	外庭：コナナド→高層部コナナド 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R13YR/2 内、R9Y3R/2		
54	建築地	計画	1号 築上層	①4.7 ②(3)	外庭：コナナド→高層部コナナド 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R9Y3R/1 内、R13YR/2		
55	建築地	計画	1号 築上層	①34.0① ② (1.6)	外庭：コナナド→高層部コナナド 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R2N/1 内、R2N/1		
56	建築地	計画	1号 築上層	①33.9① ②(3)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R9Y3R/2 内、R13YR/1		
57	建築地	計画	1号 築上層	①3.0 ②(2.2)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R9Y3R/1 内、R9Y3R/1	→2本線	
58	建築地	計画	1号 築上層	①28.0① ② (1.9)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R13YR/1 内、R13YR/1		
59	建築地	計	1号 築上層	①33.0 ②(1)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・中々不具 C・内、R9Y3R/1 内、R9Y3R/1		
60	建築地	計画	1号 築上層	①32.9① ②4.4 ③(7)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R13YR/1 内、R13YR/1		
61	建築地	計画	1号 築上層	①33.3 ②(2) ③(10.0)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R13YR/2 内、R13YR/2		
62	建築地	計画	1号 築上層	①33.8① ②(3) ③(9.4)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R13YR/1 内、R13YR/1		
63	建築地	計画	1号 築上層	①37.0① ②(5) ③(10.0)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R2N/1 内、R13YR/2		
64	建築地	計画	1号 築上層	② (4.8)	外庭：コナナド→高層部コナナド 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・中々不具 C・内、R13YR/2 内、R13YR/2		
65	建築地	計画	2号 築上層	①34.0① ②(1)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・中々不具 C・内、R9Y3R/2 内、R9Y3R/2		
66	建築地	計画	2号 築上層	①34.2① ②(2)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R9Y3R/2 内、R9Y3R/2		
67	建築地	計画	2号 築上層	①34.3① ②(4) ③→2本線2.5	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R2N/1		
68	建築地	計画	2号 築上層	② (1.6) ③(9.2)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R9Y3R/2 内、R9Y3R/2		
69	建築地	計画	2号 築上層	①33.8① ②(4) ③(9.4)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R13YR/1 内、R13YR/1		
70	建築地	計画	2号 築上層	①33.4① ② (2.0)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R2YR/1 内、R2N/1	計表あり 計表あり	
71	建築地	計画	2号 築上層	①32.3 ②(3) ③(2)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R13YR/2 内、R13YR/2		
72	建築地	計画	2号 築上層	①33.8① ②(4) ③(9.2)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R13YR/1 内、R13YR/1		
73	建築地	計	2号 築上層	①33.2 ②(3) ③(9.4)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R13YR/1		
74	建築地	整	2号 築上層	①34.0① ②(3) ③(10.4)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R9Y3R/1 内、R2N/1		
75	建築地	整	2号 築上層	② (8.6) ③(14.4)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R9Y3R/1 内、R9Y3R/1		
76	建築地	計画	2号 築上層	①32.2① ②(4)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・計材 C・内、R9Y3R/1 内、R2YR/1		
77	建築地	計画	2号 築上層	② (8.9)	外庭：コナナド→高層部コナナド→高層部 内庭：コナナド→高層部コナナド	A・積算 100m <sup>2</sup> 白色部子量 B・中々不具 C・内、R2N/1	大層部あり	

測号	経緯	緯度	出土地点	濃度(mg/g)		形態、及びの検出	A: 鉛石 B: 黒鉛 C: 色濃	備考	
				①(1)鉛濃度(高純度鉛)最大値	②(2)鉛濃度(高純度鉛)最大値				
78	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①32.2	②2.6	①→②.6.16.24	汚染: 汚染ナゲ・汚染→ナゲナゲ・汚染ナゲ 汚染: 汚染ナゲ・汚染ナゲナゲ	A: 黒鉛 1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
79	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①33.4	②2.8	①→②.6.16.24	汚染: 汚染ナゲ・汚染→ナゲナゲ・汚染ナゲ 汚染: 汚染ナゲ・汚染ナゲナゲ	A: 黒鉛 1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
80	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①34.0	②1.3		汚染: ①→②.6.16.24 汚染→ナゲナゲ・汚染ナゲ 汚染: 汚染ナゲ・汚染ナゲナゲ・焼成前品に類する点	A: 黒鉛 1.000鉛石・1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
81	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①34.2	②3.1	①→②.6.16.23	汚染: 汚染ナゲ・汚染→ナゲナゲ・高純度・汚染ナゲ 汚染: 汚染ナゲ・汚染ナゲナゲ	A: 黒鉛 1.000鉛石・1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
82	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①34.2	②2.6	①→②.6.16.26	汚染: ナゲ→ナゲナゲ・汚染ナゲ・高純度 汚染: 汚染ナゲ・汚染ナゲナゲ・高純度	A: 黒鉛 1.000鉛石・1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
83	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①34.8	②2.0	①→②.6.16.31	汚染: 汚染ナゲ・汚染→ナゲナゲ・汚染ナゲ 汚染: 汚染ナゲ・汚染ナゲナゲ	A: 黒鉛 1.000鉛石・1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
84	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①34.8	②2.3	①→②.6.16.33	汚染: 汚染ナゲ・汚染→ナゲナゲ・汚染ナゲ 汚染: 汚染ナゲ・汚染ナゲナゲ	A: 黒鉛 1.000鉛石・1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
85	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①34.4	②2.9	①→②.6.16.28	汚染: 汚染ナゲ・汚染→ナゲナゲ・汚染ナゲ 汚染: 汚染ナゲ・汚染ナゲナゲ	A: 黒鉛 1.000鉛石少量 B: 汚染, 黒鉛237/271	
86	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①34.8	②3.1	①→②.6.16.28	汚染: 汚染ナゲ・汚染→ナゲナゲ・汚染ナゲ 汚染: 汚染ナゲ・汚染ナゲナゲ	A: 黒鉛 1.000鉛石・1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
87	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①35.0	②2.9	①→②.6.16.28	汚染: 汚染ナゲ・汚染→ナゲナゲ・汚染ナゲ 汚染: 汚染ナゲ・汚染ナゲナゲ	A: 黒鉛 1.000鉛石・1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
88	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①35.9	②1.7	①→②.6.16.24	汚染: 汚染ナゲ・汚染→ナゲナゲ・汚染ナゲ 汚染: 汚染ナゲ・汚染ナゲナゲ	A: 黒鉛 1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
89	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①35.4	②2.9	①→②.6.16.24	汚染: 汚染ナゲ・汚染→ナゲナゲ・汚染ナゲ 汚染: 汚染ナゲ・汚染ナゲナゲ	A: 黒鉛 1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
90	埋蔵品	軒	3号裏 瓦葺1層	①38.1	②2.9		汚染: 汚染ナゲ→ナゲ 汚染: 汚染ナゲ・高純度・黒鉛	A: 黒鉛 1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	全体の約7割
91	埋蔵品	軒	3号裏 瓦葺1層	①32.0	②2.9	②④.8	汚染: 汚染ナゲ→ナゲ 汚染: 汚染ナゲ・高純度・黒鉛	A: 黒鉛 1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	全体の約9割
92	埋蔵品	軒	3号裏 瓦葺1層	①32.1	②2.8	②④.8	汚染: 汚染ナゲ→ナゲ 汚染: 汚染ナゲ・高純度・黒鉛	A: 黒鉛 1.000鉛石・1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
93	埋蔵品	軒	3号裏 瓦葺1層	①31.6	②2.7	②.7	汚染: 汚染ナゲ・高純度・黒鉛 汚染: 汚染ナゲ・高純度・黒鉛	A: 黒鉛 1.000鉛石・1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
94	埋蔵品	軒	3号裏 瓦葺1層	①32.2	②2.8	②.6	汚染: 汚染ナゲ・汚染→ナゲナゲ・高純度・黒鉛 汚染: 汚染ナゲ・汚染ナゲナゲ	A: 黒鉛 1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	高純度黒鉛
95	埋蔵品	軒	3号裏 瓦葺1層	①34.2	②3.75		汚染: 汚染ナゲ・汚染→ナゲナゲ・高純度・黒鉛 汚染: 汚染ナゲ・汚染ナゲナゲ	A: 黒鉛 1.000鉛石・1.000鉛石少量 B: 汚染 C: 汚染, 黒鉛237/271	高純度
96	埋蔵品	軒	3号裏 瓦葺1層	①33.2	②2.4	②④.8	汚染: 汚染ナゲ→ナゲ 汚染: 汚染ナゲ・高純度・黒鉛	A: 黒鉛 1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
97	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①38.6	②3.3	②④.7	汚染: 汚染ナゲ・高純度・黒鉛 汚染: 汚染ナゲ・高純度・黒鉛	A: 黒鉛 2.000鉛石・1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
98	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①31.3	②2.9	②④.8	汚染: 汚染ナゲ・高純度・黒鉛 汚染: 汚染ナゲ→ナゲ・高純度	A: 黒鉛 1.000鉛石・1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
99	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①32.6	②3.1	②.8	汚染: 汚染ナゲ・高純度・黒鉛 汚染: 汚染ナゲ→ナゲ	A: 黒鉛 黒鉛石・1.000鉛石・黒鉛鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
100	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①32.3	②2.4	②④.8	汚染: 汚染ナゲ・高純度・黒鉛 汚染: 汚染ナゲ→ナゲ	A: 黒鉛 黒鉛石・1.000鉛石・1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
101	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①32.3	②2.4	②④.8	汚染: 汚染ナゲ・高純度・黒鉛 汚染: 汚染ナゲ→ナゲ	A: 黒鉛 1.000鉛石・1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
102	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①32.1	②2.4	②④.8	汚染: 汚染ナゲ・高純度・黒鉛 汚染: 汚染ナゲ→ナゲ	A: 黒鉛 1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
103	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①32.7	②2.6	②.6	汚染: 汚染ナゲ・高純度・黒鉛 汚染: 汚染ナゲ→ナゲ	A: 黒鉛 1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
104	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①32.6	②2.9	②④.7	汚染: 汚染ナゲ・高純度・黒鉛 汚染: 汚染ナゲ→ナゲ	A: 黒鉛 黒鉛石・1.000鉛石・1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
105	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	② (2.5)	②.9		汚染: 汚染ナゲ→ナゲ 汚染: 汚染ナゲ→ナゲ	A: 黒鉛 黒鉛石・1.000鉛石・1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
106	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①33.0	②4.3	②.7	汚染: 汚染ナゲ(メノウ)・高純度・黒鉛 高純度・黒鉛	A: 黒鉛 1.000鉛石少量 1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
107	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①32.7	②2.9	②④.8	汚染: 汚染ナゲ(メノウ)・汚染ナゲ(メノウ) 汚染: 汚染ナゲ→ナゲ	A: 黒鉛 1.000鉛石少量 1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
108	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①32.7	②2.9	②④.8	汚染: 汚染ナゲ・高純度・黒鉛 汚染: 汚染ナゲ→ナゲ	A: 黒鉛 1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
109	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①33.1	② (4.9)		汚染: 汚染ナゲ 汚染: 汚染ナゲ	A: 黒鉛 1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
110	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①32.1	②2.4	②.8	汚染: 汚染ナゲ・高純度・黒鉛 汚染: 汚染ナゲ→ナゲ	A: 黒鉛 1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
111	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①32.1	②4.3	②.8	汚染: 汚染ナゲ・高純度・黒鉛 汚染: 汚染ナゲ→ナゲ	A: 黒鉛 1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
112	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①32.7	②4.3	②.6	汚染: 汚染ナゲ・高純度・黒鉛 汚染: 汚染ナゲ→ナゲ	A: 黒鉛 1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
113	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①33.3	②3.5	②④.8	汚染: 汚染ナゲ→ナゲ 汚染: 汚染ナゲ→ナゲ	A: 黒鉛 1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	
114	埋蔵品	軒倉	3号裏 瓦葺1層	①33.1	②4.3	②.7	汚染: 汚染ナゲ→ナゲ 汚染: 汚染ナゲ→ナゲ	A: 黒鉛 1.000鉛石・1.000鉛石少量 B: 黒鉛 C: 汚染, 黒鉛237/271	

資料番号	種別	地域	出土地点	調査年(西暦) □□□□年(西暦)□□□□年(西暦)□□□□年(西暦)	用途、出土の状況	A) 土質 B) 土色 C) 色調	備考
115	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□1040 □254 □2090	外底：銅板ナデ・高台部分銅板ナデ→フラスコ蓋ナデ 内底：銅板ナデ・銅板ナデ蓋ナデ	A) 土質 100m石少量 B) 土質中土 C) 内、黄緑38%/ 内、黄緑25%/	
116	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□1181 □243 □2092	外底：銅板ナデ・高台部分銅板ナデ→フラスコ蓋ナデ 内底：銅板ナデナデ	A) 土質 100m白色土少量 B) 良好 C) 内、黄緑31%/ 内、黄緑33%/	
117	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□440 □391	外底：銅板ナデ・高台部分銅板ナデ→フラスコ蓋ナデ 内底：銅板ナデナデ	A) 土質 100m白色土少量 B) 土質中土 C) 内、黄緑25%/	
118	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□1090 □251 □2116	外底：銅板ナデ・高台部分銅板ナデ・銅板ナデ 内底：銅板ナデナデ	A) 土質 100m石少量 B) 土質中土 C) 内、黄緑19%/	
119	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□1084 □251 □1084	外底：銅板ナデ→フラスコ・高台部分銅板ナデ→フラスコ蓋ナデ 内底：銅板ナデ・銅板ナデ蓋ナデ	A) 土質 100m石少量 B) 良好 C) 内、黄緑41%/ 内、黄緑33%/	今様記に記してある
120	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□1071 □223 □1032	外底：銅板ナデ・銅板ナデ 内底：銅板ナデ・銅板ナデ蓋ナデ	A) 土質 100m石少量 B) 土質 C) 内、黄緑40%/ 内、黄緑31%/	
121	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□1028 □218	外底：銅板ナデ→フラスコ蓋ナデ 内底：銅板ナデ・銅板ナデ蓋ナデ	A) 土質 100m白色土少量 B) 土質中土 C) 内、黄緑47→27.5%/2 内、黄緑35%/	
122	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□1028 □245	外底：銅板ナデ 内底：銅板ナデ	A) 土質 土質 C) 内、黄緑41%/ 内、黄緑41%/	
123	銅器類	高橋郡	3号墳 瓦葺土層	□1181 □240	外底：銅板ナデ・銅板ナデ 内底：銅板ナデ	A) 土質 100m石少量 B) 良好 C) 内、黄緑38%/ 内、黄緑38%/	
124	銅器類	高橋郡	3号墳 瓦葺土層	□1034 □2 □51	外底：銅板ナデ・銅板ナデ 内底：銅板ナデ	A) 土質 100m石少量 B) 良好 C) 内、黄緑38%/ 内、黄緑31%/	
125	銅器類	高橋郡	3号墳 瓦葺土層	□1084 □244	外底：銅板ナデ 内底：銅板ナデ	A) 土質 黄緑内底・黄緑外底蓋ナデ・100m白色土少量 B) 良好 C) 内底、黄緑25.5%/	
126	銅器類	高橋郡	3号墳 瓦葺土層	□1181 □240	外底：銅板ナデ・銅板ナデ・高台部分銅板ナデ 内底：銅板ナデ	A) 土質 100m白色土少量 B) 良好 C) 内底、黄緑47%	高台部分の土質
127	銅器類	池田	3号墳 瓦葺土層	□44 □1018	外底：フラスコ・高台部分銅板ナデ→フラスコ蓋ナデ・自然蝕 内底：自然蝕	A) 土質 土質 C) 内、黄緑23.5%/	
128	銅器類	池田	3号墳 瓦葺土層	□36 □1018	外底：フラスコ蓋ナデ・フラスコ蓋ナデ・高台部分銅板ナデ 内底：土質	A) 土質 黄緑内底・100m白色土少量 B) 良好 C) 内、黄緑23.5%/ 内、黄緑23.5%/	
129	銅器類	池田	3号墳 瓦葺土層	□37	外底：銅板ナデ 内底：銅板ナデ	A) 土質 100m白色土少量 B) 良好 C) 内、黄緑23.5%/ 内、黄緑23.5%/	銅板部分付
130	銅器類	池田	3号墳 瓦葺土層	□80	外底：銅板ナデ・銅板ナデ・銅板ナデ 内底：銅板ナデ	A) 土質 100m白色土少量 B) 良好 C) 内、黄緑23.5%/ 内、黄緑23.5%/	
131	銅器類	池田	3号墳 瓦葺土層	□1084 □243	外底：銅板ナデ・銅板ナデ・銅板ナデ 内底：銅板ナデ	A) 土質 100m白色土少量 B) 良好 C) 内、黄緑47→27.5%/2 内、黄緑35%/	
132	銅器類	池田	3号墳 瓦葺土層	□36	外底：銅板ナデ・自然蝕 内底：銅板ナデ・自然蝕・付着物	A) 土質 土質 C) 内、黄緑23.5%/ 内、黄緑23.5%/	
133	銅器類	池田	3号墳 瓦葺土層	□47	外底：銅板ナデ・高台部分銅板ナデ 内底：銅板ナデ	A) 土質 土質 C) 内、黄緑23.5%/ 内、黄緑23.5%/	
134	銅器類	池田	3号墳 瓦葺土層	□80	外底：銅板ナデ・高台部分銅板ナデ 内底：銅板ナデ	A) 土質 100m石少量 B) 土質中土 C) 内底、黄緑37.5%/	
135	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□338 □228 □1018	外底：銅板ナデ・銅板ナデ 内底：銅板ナデ・銅板ナデ蓋ナデ	A) 土質 100m白色土少量 B) 良好 C) 内底、黄緑35.5%/	
136	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□334 □228 □1018	外底：銅板ナデ・銅板ナデ 内底：銅板ナデ・銅板ナデ蓋ナデ	A) 土質 100m白色土少量 B) 良好 C) 内、黄緑36%/ 内、黄緑33.5%/	
137	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□338 □223 □1092	外底：銅板ナデ・銅板ナデ 内底：銅板ナデ・銅板ナデ蓋ナデ	A) 土質 100m石少量 B) 良好 C) 内、黄緑41%/ 内、黄緑39.5%/	
138	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□1036 □214 □1099	外底：銅板ナデ→フラスコ蓋ナデ 内底：銅板ナデ・銅板ナデ蓋ナデ	A) 土質 100m白色土少量 B) 良好 C) 内、黄緑47→23.5%/ 内、黄緑23.5%/	
139	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□1037 □217 □1094	外底：銅板ナデ→フラスコ蓋ナデ 内底：銅板ナデ・銅板ナデ蓋ナデ	A) 土質 100m石少量 B) 土質中土 C) 内、黄緑37.5%/ 内、黄緑47→23.5%/2	
140	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□1041 □242 □1073	外底：銅板ナデ・高台部分銅板ナデ→フラスコ蓋ナデ 内底：銅板ナデナデ	A) 土質 黄緑内底蓋ナデ・100m石少量 B) 良好 C) 内、黄緑23.5%/ 内、黄緑23.5%/	
141	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□1040 □242 □1073	外底：銅板ナデ 内底：銅板ナデ	A) 土質 黄緑内底蓋ナデ・100m石少量 B) 良好 C) 内底、黄緑47%	
142	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□1041 □219 □1110	外底：銅板ナデ→フラスコ蓋ナデ 内底：銅板ナデ	A) 土質 100m石少量 B) 土質中土 C) 内底、黄緑27.1%/	
143	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□1094 □219 □1044	外底：銅板ナデ→フラスコ蓋ナデ 内底：銅板ナデ	A) 土質 100m石少量 B) 土質 C) 内底、黄緑37.5%/	
144	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□1022 □21 □1018	外底：銅板ナデ・銅板ナデ 内底：銅板ナデ・銅板ナデ蓋ナデ	A) 土質 100m石少量 B) 良好 C) 内、黄緑33.5%/ 内、黄緑33.5%/	
145	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□218	外底：銅板ナデ 内底：銅板ナデ	A) 土質 100m石少量 B) 良好 C) 内、黄緑41%	
146	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□1084 □223 □1018	外底：銅板ナデ・銅板ナデ 内底：銅板ナデ・銅板ナデ蓋ナデ	A) 土質 100m白色土少量 B) 良好 C) 内、黄緑36%/ 内、黄緑41%	
147	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□184 □214 □1018	外底：銅板ナデ・銅板ナデ 内底：銅板ナデ・銅板ナデ蓋ナデ	A) 土質 100m石少量 B) 良好 C) 内底、黄緑48%/	
148	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□1026 □216 □1018	外底：銅板ナデ・銅板ナデ 内底：銅板ナデ・銅板ナデ蓋ナデ	A) 土質 100m石少量 B) 良好 C) 内底、黄緑38.5%/	
149	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□1023 □219 □1018	外底：銅板ナデ→フラスコ蓋ナデ 内底：銅板ナデ	A) 土質 100m石少量 B) 良好 C) 内底、黄緑36.5%/	
150	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□1036 □228 □1018	外底：銅板ナデ→フラスコ蓋ナデ 内底：銅板ナデ	A) 土質 100m石少量 B) 良好 C) 内底、黄緑36.5%/	
151	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□1036 □225 □1018	外底：銅板ナデ→フラスコ蓋ナデ 内底：銅板ナデ	A) 土質 100m石少量 B) 良好 C) 内底、黄緑36.5%/	
152	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□141 □219 □1018	外底：銅板ナデ→フラスコ蓋ナデ 内底：銅板ナデ	A) 土質 100m白色土少量 B) 良好 C) 内底、黄緑41%/ 内、黄緑41%	
153	銅器類	群馬	3号墳 瓦葺土層	□112 □223 □1018	外底：銅板ナデ→フラスコ蓋ナデ 内底：銅板ナデ	A) 土質 100m白色土少量 B) 良好 C) 内底、黄緑41%/ 内、黄緑41%	

通称 番号	種類	路線	地上地点	建設(㎡)計 ①行灯設置高(2.0m)以下(柱上高さ) (②橋下・③橋上・④橋脚)	形状、柱状の有無	A: 支柱 B: 基礎 C: 色塗	備考
154	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①147 ②24 ③→②.6尺: 2.1	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 色 黒、R03.0Y56.1 汚、黒R2.5Y56.1	黒色鋼橋脚
155	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①143.5 ②→(1.1)	橋脚: ハンガリー橋脚→鋼筋コンクリート 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 100φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 色 黒、R7.3Y5.1 汚、黒R3.7Y5.1	
156	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①151 ②2.8 ③→②.6尺: 1.9	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼→斜付橋脚鋼筋 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 100φ鋼筋コンクリート支柱 B: 中々支柱 C: 色 黒、R0.9Y1.1 汚、黒R2.5Y56.1	
157	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①158 ②3.7 ③→②.6尺: 2.8	鋼筋コンクリート 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 100φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、オリーブR0.9Y5.1	黒色鋼橋脚
158	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①164.0 ②3.3 ③→②.6尺: 2.9	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 100φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 色 黒、黒R2.5Y5.1 汚、黒R0.9Y5.1	
159	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①162 ②3.0 ③→②.6尺: 1.7	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼→斜付橋脚 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 100φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R2.5Y7.2	
160	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①126 ②2.3 ③→②.6尺: 1.2	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼 橋脚: ハンガリー橋脚	A: 支柱 200φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R4	
161	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①127 ②2.1 ③→②.6尺: 2.4	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 100φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R3.7Y5.1	
162	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①132 ②2.9 ③→②.6尺: 1.8	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R3.7Y5.1	鉄灰色
163	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①136 ②3.0 ③→②.6尺: 1.7	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 100φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R2.5Y6.2 汚、黒R2.5Y7.2	
164	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①138.8 ②1.5 ③→②.6尺: 1.4	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼→斜付橋脚鋼筋 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 100φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R5	
165	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①137 ②3.1 ③→②.6尺: 2.3	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 200φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 色 黒、R0.9Y1.1 汚、オリーブR0.9Y5.1	
166	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①142 ②3.7 ③→②.6尺: 1.8	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼→斜付橋脚鋼筋、鋼筋 →ガラス、鉄骨コンクリート 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 色 黒、R5 汚、黒R6	
167	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①143 ②2.9 ③→②.6尺: 1.4	橋脚: ハンガリー橋脚→鋼筋コンクリート 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 100φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R5.1 汚、黒R2.5Y5.1	
168	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①147 ②1.5 ③→②.6尺: 2.6	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼→斜付橋脚鋼筋 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 色 黒、R0.9Y5.1 汚、黒R2.6Y1.1	
169	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①142 ②2.8 ③→②.6尺: 1.2	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼→斜付橋脚鋼筋 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 200φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 色 黒、R0.9Y1.1 汚、黒R2.6Y1.1	
170	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①142 ②2.5 ③→②.6尺: 1.8	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼→斜付橋脚鋼筋 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R	
171	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①149 ②2.2 ③→②.6尺: 1.9	橋脚: ハンガリー橋脚→鋼筋コンクリート 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 200φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R、黒R0.9Y7.1 汚、黒R2.5Y7.2	
172	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①149 ②1.6 ③→②.6尺: 1.4	橋脚: ハンガリー橋脚→鋼筋コンクリート→斜付橋脚 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 100φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R、黒R6	
173	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①144 ②2.9 ③→②.6尺: 1.8	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼→斜付橋脚鋼筋 橋脚: ハンガリー橋脚	A: 支柱 200φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R、黒R6	
174	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①152 ②3.6 ③→②.6尺: 2.5	橋脚: 鋼筋コンクリート→ガラス 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R、黒R2.5Y7.2	メソシトイロ
175	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①148 ②3.4 ③→②.6尺: 2.0	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 100φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R、黒R0.9Y7.1 汚、黒R2.5Y7.2	
176	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①162 ②3.0 ③→②.6尺: 1.8	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼→斜付橋脚鋼筋 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 100φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R、黒R2.5Y6.1 汚、黒R2.5Y6.2	本体部: 黒鋼
177	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①178 ②3.3 ③→②.6尺: 1.9	橋脚: ハンガリー橋脚→鋼筋コンクリート 橋脚: ハンガリー橋脚	A: 支柱 100φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R、黒R5	
178	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①161.1 ②2.1 ③→②.6尺: 2.2	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼→ガラス鋼筋 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R、黒R2.5Y7.1 汚、黒R2.5Y7.1	メソシトイロ
179	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①174 ②2.3 ③→②.6尺: 2.3	橋脚: 鋼筋コンクリート→ガラス鋼筋 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R、黒R0.9Y7.2	メソシトイロ
180	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①176 ②1.05 ③→②.6尺: 2.2	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 100φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R、黒R1.2Y5.1	本体部: 黒鋼
181	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①206 ②2.6 ③→②.6尺: 2.2	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 100φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R2.5Y7.1	
182	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①1142 Y1144 ②→①.114 Y1209 ③→②.6尺: 1.19 Y1209	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 100φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 色 黒、R3 汚、黒R2.5Y5.1 汚、黒R2.5Y5.1	黒色鋼橋脚
183	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①1192 Y1153 ②→①.112 Y116 ③→②.6尺: 1.12 Y112	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 100φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 色 黒、R3 汚、黒R2.5Y5.1 汚、黒R2.5Y5.1	黒色鋼橋脚
184	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①11174 Y1117 ②→①.121 Y119 ③→②.6尺: 1.20 Y120	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼→斜付橋脚鋼筋 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 100φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 色 黒、R3 汚、黒R2.5Y5.1 汚、黒R2.5Y5.1	
185	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①114	橋脚: ハンガリー橋脚→鋼筋コンクリート→斜付橋脚 橋脚: 鋼筋コンクリート	A: 支柱 100φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R、黒R5	鉄橋
186	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①121.4 ②3.5 ③→②.70	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼→加工鋼骨の鋼管→斜付橋脚 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 100φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R、黒R6	
187	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①121.4 ②3.4 ③→②.70	橋脚: ハンガリー橋脚→鋼筋コンクリート→ガラス 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R、黒R2.5Y5.1	
188	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①121.4 ②2.7 ③→②.60	橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼→斜付橋脚鋼筋 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 100φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R、黒R2.5Y7.1	
189	固定橋	幹線	3号架 架体内側上	①128 ②3.6 ③→②.4	橋脚: ハンガリー橋脚→鋼筋コンクリート→斜付橋脚 橋脚: 鋼筋コンクリート→切り抜き鋼	A: 支柱 100φ鋼筋コンクリート支柱 B: 基礎 C: 汚、黒R、黒R3.6Y1.1	橋脚部: 黒鋼

表紙 番号	種別	等級	出立地点	距離(m)等分 ①口線迄の距離②途中通過する 主要橋りばの名称(距離)③橋りば	距離、自注の標識	Aノ橋上 赤色標 黄色標	備考
190	固定型	特	1号架 津路内側上	①32.2 ②4.3 ③8.6	外側：→ラブリ後ナデ→同敷ナデ→環状 内側：同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26%	
191	固定型	特	1号架 津路内側上	①32.2 ②3.4 ③19.8	外側：同敷ナデ→ラブリ後→ラブリ後ナデ→環状 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26%	橋りば木橋
192	固定型	特	1号架 津路内側上	①32.3 ②3.3 ③18.2	外側：→ラブリ後ナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノやや不 Cノ内、R25% 内、R26%	
193	固定型	特	1号架 津路内側上	①32.3 ②3.4 ③9.8	外側：→ラブリ後ナデ→同敷ナデ→環状 内側：同敷ナデ→同敷ナデ→環状	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26% 内→R25.67%	
194	固定型	特	1号架 津路内側上	①32.2 ②3.3 ③5.9	外側：同敷ナデ→ヨコナデ→同敷ナデ→高直付橋コナデ→同敷ナデ→環状 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26% 内→R25.67%	橋りば木橋
195	固定型	特	1号架 津路内側上	①31.4 ②3.8 ③16.9	外側：→ラブリ後ナデ→環状高直付コナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26%	
196	固定型	特	1号架 津路内側上	①32.4 ②3.8 ③6.8	外側：同敷ナデ→ヨコナデ→ラブリ後ナデ→高直付橋コナデ→環状 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26% 内、R26%	上流川木橋
197	固定型	特	1号架 津路内側上	①32.4 ②4.0 ③7.3	外側：→ラブリ後ナデ→高直付橋コナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26% 内→R25.67%	足石
198	固定型	特	1号架 津路内側上	①32.7 ②4.4 ③16.4	外側：→ラブリ後ナデ→環状高直付コナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26%	
199	固定型	特	1号架 津路内側上	①32.9 ②5.1 ③4.5	外側：同敷ナデ→ラブリ後→高直付橋コナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノやや不 Cノ内、R26% 内→R25.67%	
200	固定型	特	1号架 津路内側上	①33.0 ②4.0 ③7.2	外側：同敷ナデ→ヨコナデ→ラブリ後→ラブリ後→高直付橋コナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26% 内→R25.67%	橋りば木橋
201	固定型	特	1号架 津路内側上	①32.2 ②4.2 ③7.2	外側：→ラブリ後ナデ→高直付橋コナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノやや不 Cノ内、R26% 内→R25.67%	
202	固定型	特	1号架 津路内側上	①33.4 ②4.3 ③9.2	外側：コナデ→環状高直付コナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26% 内、R25.67%	
203	固定型	特	1号架 津路内側上	①33.2 ②4.05 ③16.6	外側：同敷ナデ→ラブリ後→高直付橋コナデ→同敷ナデ→高直付橋コナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R25.67% 内、R25.67%	→ラブリ後→高直付橋
204	固定型	特	1号架 津路内側上	①32.8 ②4.4 ③18.9	外側：→ラブリ後ナデ→高直付橋コナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26% 内、R25.67%	
205	固定型	特	1号架 津路内側上	② ②2.8 ③ ③10.9	外側：→ラブリ後ナデ→高直付橋コナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26% 内、R25.67%	
206	固定型	特	1号架 津路内側上	①33.1 ②3.7 ③11.8	外側：→ラブリ後ナデ→高直付橋コナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノやや不 Cノ内、R25.67%	
207	固定型	特	1号架 津路内側上	①33.4 ②4.7 ③10.0	外側：→ラブリ後→高直付橋コナデ→同敷ナデ→環状 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26% 内、R26%	
208	固定型	特	1号架 津路内側上	①33.8 ②3.8 ③18.9	外側：→ラブリ後ナデ→高直付橋コナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R25.67% 内、R25.67%	
209	固定型	特	1号架 津路内側上	①35.6 ②3.7 ③10.8	外側：→ラブリ後→高直付橋コナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノやや不 Cノ内、R26% 内	
210	固定型	特	1号架 津路内側上	①33.9 ②4.7 ③8.8	外側：→ラブリ後ナデ→環状高直付コナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R25.67%	
211	固定型	特	1号架 津路内側上	①36.0 ②3.7 ③7.9	外側：→ラブリ後ナデ→高直付橋コナデ→同敷ナデ→高直付橋コナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R25.67%	橋りば木橋
212	固定型	特	1号架 津路内側上	①36.1 ②3.9 ③19.1	外側：→ラブリ後ナデ→環状高直付コナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26%	
213	固定型	特	1号架 津路内側上	①36.4 ②5.4 ③18.1	外側：→ラブリ後ナデ→環状高直付コナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26% 内→R25.67%	
214	固定型	特	1号架 津路内側上	①33.9 ②3.9	外側：→ラブリ後ナデ→高直付橋コナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26% 内、R26%	内側→高直付橋
215	固定型	特	1号架 津路内側上	①34.0 ②3.0 ③11.0	外側：→ラブリ後ナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26% 内→R25.67%	
216	固定型	特	1号架 津路内側上	①34.4 ②3.1 ③9.2	外側：→ラブリ後ナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26%	
217	固定型	特	1号架 津路内側上	①34.2 ②3.4 ③11.8	外側：→ラブリ後ナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26%	
218	固定型	特	1号架 津路内側上	①34.8 ②3.7 ③11.8	外側：→ラブリ後ナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26% 内→R25.67%	
219	固定型	特	1号架 津路内側上	①35.0 ②2.2 ③12.2	外側：→ラブリ後ナデ→同敷ナデ→環状 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R25.67% 内、R26%	
220	固定型	特	1号架 津路内側上	①35.2 ②3.8 ③12.2	外側：→ラブリ後ナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26%	
221	固定型	特	1号架 津路内側上	①37.4 ②2.9 ③13.3	外側：→ラブリ後ナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26%	
222	固定型	特	1号架 津路内側上	①37.8 ②3.0 ③13.8	外側：→ラブリ後ナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26% 内、R26%	
223	固定型	特	1号架 津路内側上	①38.0 ②3.0	外側：→ラブリ後ナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26% 内→R25.67%	
224	固定型	特	1号架 津路内側上	①37.8 ②3.8 ③14.0	外側：→ラブリ後ナデ→同敷ナデ 内側：同敷ナデ→同敷ナデ	Aノ橋上 10m石少量 Bノ良好 Cノ内、R26%	

測号	種別	路線	地上地点	経緯(°分)	計測位置(測点)記載(最大距離) (測点、方位角、距離) (測点)	距離、状況の概要	A: 地上、B: 地下、C: 色線	備考
225	測量	Ⅲ	3号東 東洋内側1	①184 ②18 ③184		所内→ア野子線ナゲ→別所ナゲ 所内→別所ナゲ→別所ナゲ	A: 所内 1mm石少量 B: 良好 C: 内、R: 既2137/1	
226	測量	Ⅲ	3号東 東洋内側1	①82 ②23		所内→ア野子線ナゲ→別所ナゲ→別所ナゲ 所内→ア野子線ナゲ以上とア野子→別所ナゲ 所内→ア野子(1号ナゲ)→別所ナゲ	A: 所内 線路石、2mm石(表、2mm石)少量、1号野子(表)少量 C: 内、R: 既2138/2 内、既2138/1	
227	測量	Ⅲ	3号東 東洋内側1	①132.2 ②11340 ③121213 ④140 ⑤下1010		所内→ア野子線ナゲ→別所ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 1mm石少量 B: 良好 C: 内、R: 既2137/2	2号車庫
228	測量	Ⅲ	3号東 東洋内側1	①204 ②24 ③114		所内→別所ナゲ→ア野子線ナゲ→別所ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 1mm石少量 B: 良好 C: 内、オ: オ7923/2 内、既2136/1	2号倉庫
229	測量	Ⅲ	3号東 東洋内側1	① ②(1) ③(1)		所内→オコナダ→ナゲ、シメテ線ナゲ→別所ナゲ→線路 所内→ナゲ→オコナダ→別所ナゲ→線路	A: 所内 1mm石少量 B: 良好 C: 内、R: 既2136/1 線路部分、既2131/1	
230	測量	Ⅲ	3号東 東洋内側1	① ②(1) ③(1)		所内→ア野子線ナゲ→高田町別所ナゲ→別所ナゲ 所内→別所ナゲ→別所ナゲ	A: 所内 線路石少量 B: 良好 C: 内、R: 既2137/2	
231	測量	Ⅲ	3号東 東洋内側1	② ③(4)		所内→別所ナゲ→ア野子線ナゲ 所内→別所ナゲ	A: 所内 1mm石、1mm石少量 B: 良好 C: 内、R: 既2138/1 内、既2138/1	
232	測量	Ⅲ	3号東 東洋内側1	② ③(4) ④徳田(9)		所内→別所ナゲ→ア野子線ナゲ→別所ナゲ 所内→別所ナゲ→ア野子線ナゲ→別所ナゲ	A: 所内 1mm石少量 B: 良好 C: 内、R: 既2138/1	
233	測量	Ⅲ	3号東 東洋内側1	② ③(4) ④141		所内→別所ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→線路	A: 所内 1mm石少量 B: 良好 C: 内、R: 既2138/1 内、既2138/1	
234	測量	Ⅲ	3号東 東洋内側1	② ④(1) ④140		所内→別所ナゲ→線路→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ	A: 所内 線路石、線路石少量 B: 良好 C: 内、R: 既2137/1 内、既2137/1	
235	測量	Ⅲ	3号東 東洋内側1	①170 ②15		所内→ア野子線ナゲ→別所ナゲ 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 1mm石、1mm石、1mm石少量 B: 良好 C: 内、R: 既2138/1	5号車庫(線路、内側→線路)
236	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①1240 ②2 ③→2.8.102.0		所内→別所ナゲ→ア野子線ナゲ 所内→別所ナゲ→別所ナゲ	A: 所内 1mm石、石少量 B: 中々不良 C: 内、R: 既2131/1 内、既2131/1→オコナダ→ア野子線ナゲ	
237	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①12 ② ③(5)		所内→別所ナゲ→ア野子線ナゲ 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 1mm石、石少量 B: 良好 C: 内、R: 既2136/1	
238	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①26 ②1.9 ③→2.8.101.7		所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 線路石少量 B: 良好 C: 内、R: 既2136/1 内、既2136/1	
239	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①22 ②2.0 ③→2.8.101.5		所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 1mm石少量 B: 中々不良 C: 内、R: 既2136/1 内、R: 既2136/1	
240	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①24 ②2.2 ③→2.8.102.2		所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 1mm石、石少量 B: 中々不良 C: 内、R: 既2137/2	徳成製鉄所
241	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①27 ②2.4 ③→2.8.101.4		所内→別所ナゲ→ア野子線ナゲ→別所ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 1mm石少量 B: 良好 C: 内、R: 既2137/1	
242	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①43 ②1.9 ③→2.8.101.6		所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 線路石少量 B: 良好 C: 内、R: 既2136/1 内、既2136/1	
243	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①49 ②2.8 ③→2.8.102.2		所内→別所ナゲ→ア野子線ナゲ→別所ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 1mm石少量 B: 中々不良 C: 内、R: 既2137/2	
244	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①56 ②2.7 ③→2.8.102.0		所内→別所ナゲ→ア野子線ナゲ→別所ナゲ 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 1mm石少量 B: 中々不良 C: 内、R: 既2137/2	2号倉庫
245	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①60 ②2.7 ③→2.8.102.0		所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 1mm石少量 B: 中々不良 C: 内、R: 既2137/2	5号車庫(線路)
246	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①66 ②1.9 ③→2.8.102.5		所内→別所ナゲ→ア野子線ナゲ→高田町→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 2mm石少量 B: 中々不良 C: 内、R: 既2135/1 内、既2135/1	
247	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①74 ②2.1 ③→2.8.102.1		所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 1mm石少量 B: 中々不良 C: 内、R: 既2138/2	5号車庫(線路)
248	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①22.4 ②2.0 ③→2.8.102.2		所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 線路石、線路石少量、1mm石(表、線路石)少量 B: 中々不良 C: 内、R: 既2138/1	
249	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①24.0 ②2.0 ③→2.8.102.3		所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 1mm石少量 B: 良好 C: 内、R: 既2138/1	
250	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①28 ②2.1 ③→2.8.101.7		所内→別所ナゲ→ア野子線ナゲ→別所ナゲ 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 線路石少量 B: 良好 C: 内、R: 既2138/1	
251	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①48 ②1.6 ③→2.8.102.0		所内→別所ナゲ→ア野子線ナゲ→別所ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→線路	A: 所内 1mm石、石少量 B: 良好 C: 内、R: 既2138/1	
252	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①44 ②1.4 ③→2.8.101.9		所内→別所ナゲ→ア野子線ナゲ→別所ナゲ 所内→別所ナゲ→ア野子線ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 1mm石、石少量 B: 中々不良 C: 内、R: 既2137/2	徳成製鉄所
253	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①32 ②3.3 ③→2.8.102.0		所内→別所ナゲ→ア野子線ナゲ→別所ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 線路石少量 B: 中々不良 C: 内、R: 既2137/2	
254	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①37 ②2.3 ③→2.8.102.0		所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 1mm石少量 B: 良好 C: 内、オ: オ7923/2 内、既2136/1	
255	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①68 ②2.1 ③→2.8.102.2		所内→別所ナゲ→ア野子線ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 1mm石、石少量 B: 良好 C: 内、R: 既2137/2	徳成製鉄所
256	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①66 ②3.7 ③→2.8.101.9		所内→別所ナゲ→ア野子線ナゲ 所内→別所ナゲ→線路	A: 所内 2mm石少量 B: 良好 C: 内、R: 既2135/1 内、既2135/1	
257	測量	Ⅲ	3号東 東洋	②0.0 ②3.1 ③→2.8.102.2		所内→別所ナゲ→ア野子線ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 1mm石少量 B: 中々不良 C: 内、R: 既2138/2	
258	測量	Ⅲ	3号東 東洋	① ② ③ ④→2.8.102.1		所内→別所ナゲ→ア野子線ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 1mm石、石少量、線路石少量 B: 中々不良 C: 内、R: 既2136/2 内、既2136/1	徳成製鉄所(2号倉庫)
259	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①24.0 ②2.7 ③(4)		所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→線路	A: 所内 2mm石少量 B: 良好 C: 内、R: 既2135/1 内、既2135/1	
260	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①4.2 ②2.7 ③(4)		所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 1mm石、石少量 B: 良好 C: 内、R: 既2136/1	
261	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①24 ②2.3 ③(4)		所内→別所ナゲ→ア野子線ナゲ 所内→別所ナゲ→線路	A: 所内 2mm石少量 B: 良好 C: 内、R: 既2136/2 内、既2136/2	
262	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①24 ②2.3 ③(2)		所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 1mm石少量 B: 良好 C: 内、R: 既2137/2	徳成製鉄所
263	測量	Ⅲ	3号東 東洋	①3.2 ②3.8 ③(1)		所内→別所ナゲ→ア野子線ナゲ→線路 所内→別所ナゲ→別所ナゲ→線路	A: 所内 1mm石、石少量 B: 良好 C: 内、R: 既2137/1	徳成製鉄所





測号	種別	路線	地上地点	面積(m <sup>2</sup> ) ①(1)計測(2)測量(3)測量(4)測量(5)測量(6)測量(7)測量(8)測量(9)測量(10)測量	用途、用途の種別	A: 地土 地種別 C: 色調			備考
						A	B	C	
303	測量	道	3号東 瓦葺	①(31.1) ②(6.6)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 濃緑石・白色系土・灰色系土 B: 瓦葺 C: 瓦、R2.576/1 内、R1(17.577/1)			
304	測量	公園	3号東 瓦葺	②(9.6) ③(10.0)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 濃緑石・石葺少量 B: 瓦葺 C: 瓦、R2.576/1-R2N4/1 内、R2N6/1		道へ入り	
305	測量	道	3号東 瓦葺	②(14.7) ③(12.0)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 2面0区画 C: 瓦、R1(17.41)-瓦葺R1(17.577/1 内、R1(17.41/1)			
306	測量	駅前街路	3号東 瓦葺	②(7.3)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R2N3/1			
307	測量	道	3号東 瓦葺	②(13.3) ③(9.4)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 瓦、R2.576/1 内、R1(17.577/2)			
308	測量	道	3号東 瓦葺	①(18.6) ②(21.0)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R1(17.577/1)			
309	測量	林	3号東 瓦葺	①(31.3) ②(4.9) ③(9.5)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 濃緑石・1面0区画 B: 瓦葺 C: 内、R2N5/1			
310	測量	駅前街路	3号東 瓦葺	①(21.9) ②(11.7)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R1(17.577/2)-R1(17.578/2)			
311	測量	林	3号東 瓦葺	①(24.1) ②(7.0)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R2N4/1 内、R1(17.577/1)			
312	測量	橋脚	3号東 瓦葺	①(18.0) ②(7.0)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 瓦、R2.576/1 内、R1(17.577/1)			
313	測量	橋脚	3号東 瓦葺	①(16.7) ②(6.9)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 瓦、R2.576/1 内、R1(17.576/1)			
314	測量	雑木	3号東 瓦葺	⑤(6.5) ⑥(12.1)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R2N5/1			
315	測量	不明	3号東 瓦葺	⑤(6.4) ⑥(12.8)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R2N4/1			
316	測量	不明	3号東 瓦葺	②(3.8)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R2N4/1 内、R2N6/1			
317	測量	不明	3号東 瓦葺	②(7.4)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R2N5/1			
318	測量	行路	3号東 瓦葺	①(6.8) ②(2.8) ③(3.7)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R2N5/1 内、R1(17.577/1)			
319	測量	駅前街路	3号東 瓦葺	②(3.0) ③(22.2)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R1(17.578/1 内、R1(17.578/2)			
320	測量	軒差	3号東 P1	①(33.0) ②(2.6)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 濃緑石 C: 内、R2.576/1			
321	測量	軒差	3号東 P1	①(35.2) ②(3.5) ③→②A.01.8	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R2N5/1 内、R2N4/1-R2N2/1		道へ入り	
322	測量	軒差	3号東 P1	①(36.0) ②(3.6)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 濃緑石 C: 内、R2N6/1			
323	測量	軒差	3号東 P1	①(37.8) ②(3.5) ③→②A.01.8	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R2.576/1 内、R2N6/1			
324	測量	軒差	3号東 P1	①(35.8) ②(4.9) ③(9.4)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R2N6/1			
325	測量	軒差	3号東 P1	①(31.1) ②(3.9) ③(7.8)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R2N5/1		道へ入り	
326	測量	軒差	3号東 P1	①(20.6) ②(9.1) ③(12.4)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R1(17.577/1) 内、R1(17.577/2)			
327	測量	道	3号東 P1	①(14.0) ②(1.6) ③(19.2)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R1(17.577/1 内、R2N5/1)			
328	測量	道	3号東 P1	①(8.4) ②(2.4) ③(6.5)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 B: 瓦葺 C: 内、R1(17.578/1)			
329	測量	道	3号東 P1	①(24.7) ②(1.33)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R1(17.577/1)			
330	測量	道	3号東 P1	②(35.3) ③(7.8)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 2面0区画 C: 内、R2.576/1-R2N4/1-R2N5/2 内、R2N6/1			
331	測量	雑草	3号東 P1	①(8.6) ②(4.3)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R2.576/1-R2N4/1 内、R2.576/1			
332	測量	雑草	3号東 P1	①(9.4) ②(3.2) ③(11.2)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 濃緑石 C: 内、R2N5/1 内、R2N5/1			
333	測量	雑草	3号東 P1	①(12.7) ②(9.7)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 2面0区画 C: 内、R2N5/1 内、R2N6/1			
334	測量	道	3号東 P1	①(9.2) ②(22.6)	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R1(17.577/1)			
335	測量	軒差	3号東 P2	①(33.1) ②(4.4) ③→②A.01.8	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R1(17.576/1 内、R2.576/2)		道へ入り	
336	測量	軒差	3号東 P2	①(35.8) ②(1.5) ③→②A.01.8.0	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R1(17.576/1) 内、R1(17.576/2)		道へ入り	
337	測量	軒差	3号東 P2	①(35.8) ②(1.5) ③→②A.01.8.0	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R1(17.576/1)		道へ入り	
338	測量	軒差	3号東 P2	①(35.8) ②(1.9) ③→②A.01.8.2	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 濃緑石・石葺少量 C: 内、R2N5/2 内、R1(17.576/1)		道へ入り	
339	測量	軒差	3号東 P2	①(36.0) ②(2.3) ③→②A.01.8.2	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R1(17.576/1 内、R2.576/1)			
340	測量	軒差	3号東 P2	①(36.2) ②(1.9) ③→②A.01.8.2	瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺 瓦葺	A: 瓦葺 1面0区画 C: 内、R1(17.577/1 内、R1(17.577/2)			

発掘番号	種別	地域	出土地点	調査内容 ①口縁部から出土した土器大群 ②陶器・土器類 (調査区) (種別)	時期、出土の状況	A) 土器 色別 C) 色別	備考
341	塚墓跡	林野	1号墓 P2	①36.0 ②3.3 ③つとみP2.2	外周: 羽振ナデ・羽振ヘラクスラ・羽振羽振ナデ 内周: 羽振ナデ・羽振ナデナデ	A) 黒良 1mm白色器少量 B) 中々不良 C) 内, 羽振P2, 内, ①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺	
342	塚墓跡	林野	1号墓 P2	①33.2 ②4.4 ③	外周: 羽振ナデ・羽振ヘラクスラ・ヘラツリ土器ナデ 内周: 羽振ナデナデ	A) 黒良 黒面黒良・黒面白器ナデ・1mm石少量 B) 黒良 C) 内, 羽振P2/3, 内, 羽振P2/3	
343	塚墓跡	林野	1号墓 P2	①34.9 ②3.7	外周: 羽振ナデ・ヘラツリ土器ナデ 内周: 羽振ナデナデ	A) 黒良 1mm黒面・白器器少量・黒面黒良 B) 中々不良 C) 内, 羽振P2/3④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺	
344	塚墓跡	林野	1号墓 P2	①35.2 ②3.8 ③11.1	外周: 羽振ナデ・ヘラツリ土器ナデ・羽振羽振ナデ 内周: 羽振ナデ・羽振ナデナデ	A) 黒良 2mm石少量 B) 中々不良 C) 内, 羽振P2/3②③	
345	塚墓跡	畑	1号墓 P2	①37.8 ② (R.3)	外周: 羽振ナデ 内周: 羽振ナデ	A) 黒良 黒面黒良・1mm白色器ナデ・1mm石少量 B) 黒良 C) 内, 羽振P2	

表3 石坂窯跡F地点出土遺物観察表

発掘番号	種別	地域	出土地点	調査内容 ①口縁部から出土した土器大群 ②陶器・土器類 (調査区) (種別)	時期、出土の状況	A) 土器 色別 C) 色別	備考
346	塚墓跡	林野	1号墓 表土層	①32.4 ② (2.5)	外周: ココナデ・羽振ヘラクスラ土器ナデ・羽振ナデ 内周: 羽振ナデ・黒面器少量(調整不明)	A) 黒良 1mm白色器少量 1mm石少量 B) 中々不良 C) 内, 羽振P2, 内, 羽振P2	付数物有 気泡有
347	塚墓跡	林野	1号墓 表土層	①32.5 ②3.4	外周: ナデ・羽振ヘラクスラ・羽振ナデ・ヘラツリ器 内周: ナデ(内周は土)・羽振ナデ	A) 黒良 1mm白色器少量 B) 黒良 C) 内, 羽振P2, 内, 羽振P2	ヘラツリ器 器身有 付数物有
348	塚墓跡	林野	1号墓 表土層	① (2.9) ②4.3	外周: ココナデ・ココナデ・調整不明・黒良 内周: 羽振ナデナデ	A) 黒良 1mm石少量 B) 黒良 C) 内, 羽振P2/4, 内, 羽振P2	付数物有
349	塚墓跡	林野	1号墓 表土層	①33.8 ②4.5 ③18.3	外周: 羽振ナデ・ナデ・ヘラツリ器 内周: 羽振ナデナデ	A) 黒良 1-2mm黒面・1mm白色器少量 B) 黒良 C) 内, 羽振P2	黒面ヘラツリ器
350	塚墓跡	林野	1号墓 表土層	① (2.8) ② (9.7)	外周: 羽振ナデ・ナデ・ヘラツリ器 内周: ナデ	A) 黒良 3mm石少量 B) 黒良 C) 内, 羽振P2/4, 内, 羽振P2/6/7	黒面ヘラツリ器
351	塚墓跡	林野	1号墓 表土層	①33.4 ②4.7 ③9.2	外周: 羽振ナデ・ココナデ・ヘラツリ器調整・ヘラツリ器 内周: 羽振ナデナデ	A) 黒良 1mm石少量 1mm白色器少量 B) 黒良 C) 内, 羽振P2/6, 内, 羽振P2/6	ヘラツリ器 器身有 付数物有
352	塚墓跡	林野	1号墓 表土層	①35.2 ②4.0 ③18.3	外周: 羽振ナデナデ 内周: 羽振ナデナデ	A) 黒良 1mm石少量 B) 黒良 C) 内, 羽振P2/3/4, 内, 羽振P2/3	外周調整不明
353	塚墓跡	畑	1号墓 表土層	①32.1 ②3.2 ③17.8	外周: 羽振ナデ・羽振ヘラクスラ・羽振ヘラツリ器 内周: 羽振ナデ・羽振ナデナデ・黒良	A) 黒良 1mm石少量 B) 黒良 C) 内, 羽振P2/6/7, 内, 羽振P2/3	外周に黒良調整有
354	塚墓跡	高杉	1号墓 表土層	①32.0 ② (3.6)	外周: 羽振ナデ・付数物・黒良・羽振ヘラクスラ 内周: 羽振ナデ・調整不明・黒良	A) 黒良 1mm石少量 B) 中々不良 C) 内, 羽振P2, 内, 羽振P2	高杉の樹の上には土層が厚い
355	塚墓跡	高杉	1号墓 表土層	① (3.4)	外周: 羽振ナデ・カゴナデ 内周: ナデ・ヘラツリ器	A) 黒良 黒面白色器ナデ 黒良 C) 内, 羽振P2	内周ヘラツリ器
356	塚墓跡	高杉	1号墓 表土層	① (4.3) ②4.7	外周: 羽振ナデ・調整不明 内周: ナデ・調整不明	A) 黒良 1mm白色器少量 B) 黒良 C) 内, 羽振P2/4	
357	塚墓跡	林	1号墓 表土層	① (3.8) ②7.3	外周: 羽振ナデ・手持ちヘラクスラ・ヘラツリ器調整・ヘラツリ器・黒良 内周: 羽振ナデ	A) 黒良 1mm白色器少量 B) 黒良 C) 内, 羽振P2, 内, 羽振P2/3/4	ヘラツリ器 器身有
358	塚墓跡	高杉畑	1号墓 表土層	①33.7 ② (12.3)	外周: 羽振ナデ 内周: 羽振ナデ・黒良	A) 黒良 1mm石少量 2mm石少量 B) 黒良 C) 内, 羽振P2/6/7, 内, 羽振P2/6/7・①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺	
359	塚墓跡	畑	1号墓 表土層	① (19.2) ② (12.4)	外周: 羽振ナデ・羽振ココナデ・ヘラツリ土器ナデ 内周: 羽振ナデ	A) 黒良 1mm石少量 B) 中々不良 C) 内, 羽振P2, 内, 羽振P2	付数物有
360	塚墓跡	林野	1号墓 遺構跡内周	①34.4 ②2.8	外周: ヘラクスラ土器ナデ・羽振ナデ・つとみP2調整 内周: 羽振ナデ器身不明のナデ・羽振ナデ	A) 黒良 2mm石中々不良 B) 中々不良 C) 内, 羽振P2/6/7, 内, 羽振P2/3/5/6	つとみP2調整有
361	塚墓跡	林野	1号墓 遺構跡内周	①34.4 ②3.2 ③14.3 ④つとみP2.4	外周: 羽振ナデ・羽振ヘラクスラ 内周: 羽振ナデナデ	A) 黒良 黒面・黒面黒良・調整不明 B) 黒良 C) 内, ①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺	土層ヘラツリ器有
362	塚墓跡	林野	1号墓 遺構跡内周	①34.4 ②3.1	外周: ナデ・羽振ヘラクスラ・羽振ナデ 内周: 羽振ナデ	A) 黒良 ①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺ C) 内, ①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺	少し器身有
363	塚墓跡	林野	1号墓 遺構跡内周	①32.2 ②4.4 ③18.3	外周: 羽振ナデ・黒面器調整のナデ・羽振ヘラクスラ 内周: 羽振ナデ・羽振ナデナデ	A) 黒良 1mm白色器少量 B) 中々不良 C) 内, 羽振P2/3/4, 内, 羽振P2/3	
364	塚墓跡	林野	1号墓 遺構跡内周	①33.0 ② (3.6)	外周: 羽振ナデ・黒良 内周: 羽振ナデ	A) 黒良 1mm白色器少量 B) 黒良 C) 内, 羽振P2/7, 内, 羽振P2	
365	塚墓跡	高杉	1号墓 遺構跡内周	① (7.3) ②調整不明R.4	外周: ナデ・羽振ナデ・羽振ナデ・ヘラツリ器 内周: 羽振ナデ・羽振ナデ・羽振ナデ	A) 黒良 2mm石少量 B) 黒良 C) 内, 羽振P2, 内, ①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺	
366	塚墓跡	林野	1号墓 遺構跡内周	①38.2 ②5.9 ③16.1	外周: 羽振ナデ・ナデ・調整不明 内周: 羽振ナデナデ	A) 黒良 3mm石少量 B) 黒良 C) 内, 羽振P2/3/4	黒面ヘラツリ器有
367	塚墓跡	林野	1号墓 遺構跡内周	① (4.0)	外周: 羽振ナデ・ナデ 内周: 羽振ナデナデ	A) 黒良 1mm白色器少量 B) 黒良 C) 内, 羽振P2/3/4	
368	塚墓跡	林野	1号墓 遺構跡内周	①32.7 ② (4.1)	外周: 羽振ナデ 内周: 羽振ナデ	A) 黒良 1mm白色器少量 B) 中々不良 C) 内, 羽振P2/3/4, 内, 羽振P2/3	
369	塚墓跡	林	1号墓 遺構跡内周	①32.1 ②3.1	外周: 羽振ナデ・ナデ・ナデ・羽振ヘラツリ器調整(付) 内周: 羽振ナデ・ナデ・ナデ・調整不明	A) 黒良 1mm石少量 B) 黒良 C) 内, 羽振P2/3/4/5	
370	土庫跡	畑	1号墓 遺構跡内周	① (3.6)	外周: ココナデ・ヘラツリ器調整・ココナデ 内周: ココナデ・ヘラツリ器	A) 黒良 1mm石少量 2mm石少量 B) 黒良 C) 内, 羽振P2/3/5/6, 内, ①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺	
371	塚墓跡	林野	1号墓 埋土	①34.4 ② (1.30)	外周: 羽振ヘラクスラ土器・羽振ナデ 内周: ナデ・羽振ナデ	A) 黒良 1mm白色器少量 B) 黒良 C) 内, 羽振P2, 内, 羽振P2	
372	塚墓跡	林野	1号墓 埋土	①34.8 ② (2.1)	外周: 羽振ナデ・羽振ヘラクスラ 内周: ナデ・羽振ナデ	A) 黒良 1mm白色器少量 B) 黒良 C) 内, 羽振P2/4, 内, 羽振P2/7	
373	塚墓跡	林野	1号墓 埋土	①33.7 ②4.5 ③18.3	外周: 羽振ナデ・羽振ヘラクスラ・ヘラツリ器 内周: 羽振ナデナデ	A) 黒良 1mm白色器少量 1mm石少量 B) 黒良 C) 内, 羽振P2/3/4, 内, 羽振P2/7	
374	塚墓跡	畑	1号墓 埋土	① (2.8)	外周: 羽振ナデ 内周: 羽振ナデ	A) 黒良 1mm石少量 B) 黒良 C) 内, 羽振P2/3/4, 内, 羽振P2/3/4	
375	塚墓跡	林野	1号墓 埋土	① (2.3)	外周: 黒良付羽振ナデ・羽振ヘラクスラ・羽振ナデ 内周: 羽振ナデ	A) 黒良 1mm白色器少量 B) 黒良 C) 内, 羽振P2	







資料 番号	種別	等級	出土地点	経度(°N)		距離、方位の概略	A) 出土 品名 B) 品目 C) 品	備 考
				①	②			
492	銅貨類	五匁幣	4号室 遺跡内出土	103.41	② (4.1)	内庭：銅板ナゲ 内庭：銅板ナゲ	A：銅貨 1mm白色銅子少量 B：良材 C：N、R2/N7/ 内、R2/N4/	
493	銅貨類	神蓋	4号室 遺跡内出土	102.61	②1.8 ③受部跡(15.2)	内庭：銅板→ラウスナゲ・銅板ナゲ 内庭：銅板ナゲ後ナゲ・銅板ナゲ・鋳付部	A：銅貨 1mm白色銅子少量 B：良材 C：N、R6/N5-R3/N 内、R6/N	
494	銅貨類	神蓋	4号室 遺跡内出土	103.61	②2.4 ③受部跡(15.3) ④2.5部跡0	内庭：銅板→ラウスナゲ・銅板ナゲ 内庭：銅板ナゲ	A：銅貨 1mm良多量 B：良材 C：N、R6/N7R2 内、R5/N2/	
495	銅貨類	神蓋	4号室 遺跡内出土	104.01	②1.3 ③→2.5部跡1.8	内庭：銅板ナゲ→鋳込 内庭：銅板ナゲ後ナゲ・銅板ナゲ	A：銅貨 1mm白色銅子少量 B：良材 C：N、R2N5/ 内、R6/R3R1/	
496	銅貨類	神蓋	4号室 遺跡内出土	② (3.7) ③(9.2)		内庭：銅板ナゲ→高直部跡ナゲ→ラ記号 内庭：銅板ナゲ・銅板ナゲ後ナゲ	A：銅貨 1mm白色銅子少量 C：N、R10/R→75Y6/2 内、R10Y1.1/	仔細物有
497	銅貨類	蓋	4号室 遺跡内出土	104.61	②2.0 ③(13.1)	内庭：銅板ナゲ後ナゲ・銅板ナゲ 内庭：銅板ナゲ後ナゲ・銅板ナゲ	A：銅貨 B：良材 C：N、R6/R3G1/ 内、R6/R1G1/	
498	銅貨類	蓋	4号室 遺跡内出土	108.41	②1.8 ③(15.6)	内庭：ナゲ 内庭ナゲ 内庭：→ラ記号鋳込工区跡ニナゲ・銅板ナゲ	A：銅貨 1mm白色銅子少量 B：良材 C：内、R2N2/	
499	銅貨類	蓋	4号室 遺跡内出土	109.01	②2.2 ③(16.5)	内庭：銅板ナゲ後→定方向のナゲ・銅板ナゲ 内庭：板状部跡・銅板→ラ記号後ナゲ・銅板ナゲ	A：銅貨 B) やや多量 C：N、R2/N7/ 内、R6/R2.5Y6/1	
500	銅貨類	蓋	4号室 遺跡内出土	109.21	②1.4 ③(16.0)	内庭：銅板ナゲ・銅板→ラ記号 内庭：銅板ナゲ・不定方向のナゲ	A：銅貨 B) やや多量 C：N、R2N7/ 内、R10Y1/	
501	銅貨類	鏡小	4号室 遺跡内出土	② (11.1)		内庭：鏡いナゲ→ラ記号・鏡子目タタキ・鏡子の鋳付部 内庭：鏡方向の→ラ記号	A：銅貨 1mm良石・1mm白色銅子・1mm白色銅子少量 B：良材	

## 图 版





(1) D地点0号窯跡～  
4号窯跡全景  
(北東から)



(2) D地点0-A号窯跡・  
0-B号窯跡全景  
(南から)



(3) D地点0-A号窯跡  
全景 (南から)





(1) D地点0-A号窯跡  
左側壁（北西から）



(2) D地点0-B号窯跡  
全景（南から）



(3) D地点0-B号窯跡  
右側壁（南東から）

- (1) D地点O-B号窯跡  
左側壁(南西から)



- (2) D地点O-A号窯跡・  
O-B号窯跡  
検出状況(北から)



- (3) D地点O-A号窯跡・  
O-B号窯跡  
検出状況





(1) D地点1号窯跡  
全景（北から）



(2) D地点1号窯跡  
天井部遺存状況  
（北から）

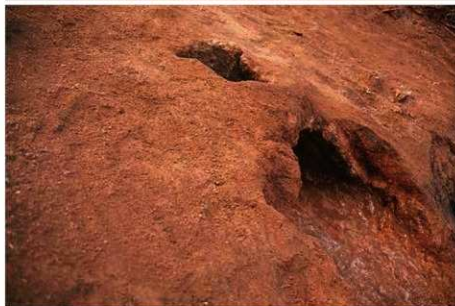


(3) D地点1号窯跡  
煙道部（北から）

(1) D地点1号窯跡  
煙道部(北西から)



(2) D地点1号窯跡  
煙道部(東から)



(3) D地点1号窯跡  
焼成部遺物出土状況  
(北から)





(1) D地点1号窯跡  
焼成部床面断ち割り  
(北から)



(2) D地点1号窯跡  
焼成部床面断ち割り  
(北東から)



(3) D地点1号窯跡  
左壁断ち割り  
(北から)

(1) D地点2号窯跡  
検出状況(東から)



(2) D地点3号窯跡  
検出状況(東から)



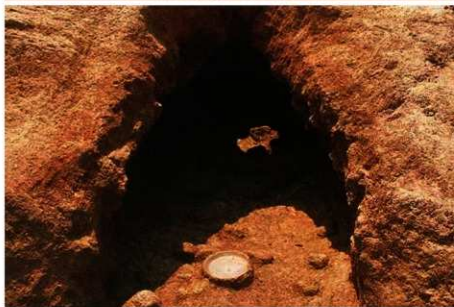
(3) D地点4号窯跡  
検出状況(東から)







(1) D地点5号窯跡  
全景（北東から）



(2) D地点5号窯跡  
焼成部遺物出土状況  
（北東から）



(3) D地点5号窯跡  
焚口部付近遺物  
出土状況（北東から）

(1) D地点5号窯跡  
煙道部(西から)



(2) D地点5号窯跡  
左側壁断ち割り状況  
(北から)



(3) D地点5号窯跡  
右側壁断ち割り状況  
(北東から)





(1) D地点5号窯跡  
灰原土層(東から)



(2) D地点5号窯跡  
P1(北東から)



(3) D地点5号窯跡  
P2全景(北東から)

- (1) D地点5号窯跡  
P2遺物出土状況  
(北東から)



- (2) D地点5号窯跡  
検出状況(北東から)

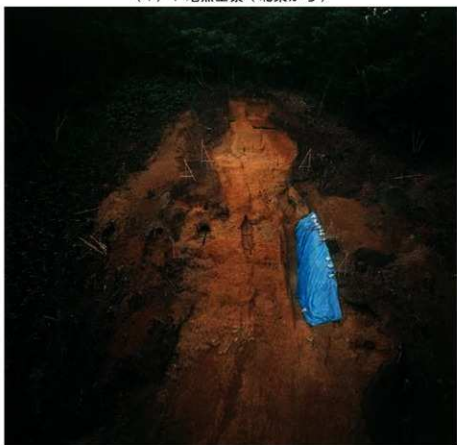


- (3) D地点5号窯跡  
作業風景(北東から)





(1) F地点全景（北東から）



(2) F地点全景（東から）



(1) F地点全景（東から）



(37) F地点全景（上空から：右が北）



(1) F地点1号窯跡  
検出状況(東から)



(2) F地点1号窯跡  
検出状況(西から)



(3) F地点2号窯跡  
検出状況(北から)

(1) F地点3号窯跡  
全景（東から）



(2) F地点3号窯跡  
床面（東から）



(3) F地点3号窯跡  
窯体内土層（東から）







(1) F地点3号窯跡  
焚口側遺物出土状況  
(南東から)



(2) F地点3号窯跡  
遺物出土状況  
(北東から)



(3) F地点3号窯跡  
窯体断ち割り  
(南東から)

(1) F地点3号窯跡  
窯体断ち割り  
(南東から)



(2) F地点3号窯跡  
窯体断ち割り  
(北東から)



(3) F地点3号窯跡  
窯体断ち割り  
(北東から)





(1) F地点4号窯跡  
全景（東から）

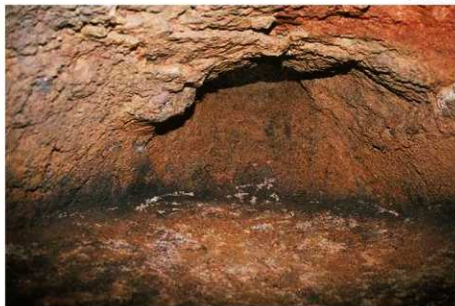


(2) F地点4号窯跡  
左側壁～天井部  
（北東から）



(3) F地点4号窯跡  
右側壁～天井部  
（南東から）

- (1) F地点4号窯跡  
天井部～煙道部  
(東から)



- (2) F地点4号窯跡  
左側壁～奥壁  
(北東から)



- (3) F地点4号窯跡  
右側壁～奥壁  
(南東から)

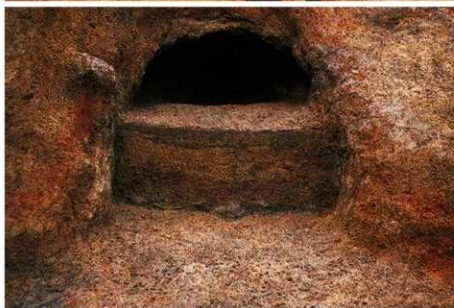




(1) F地点4号窯跡  
断ち割り状況  
(南東から)



(2) F地点4号窯跡  
断ち割り(北東から)



(3) F地点4号窯跡  
窯体内土層(東から)



D地点5号窯出土遺物集合①



D地点5号窯出土遺物集合②

图版 22



D地点杯盖集合



D地点杯·杯身集合



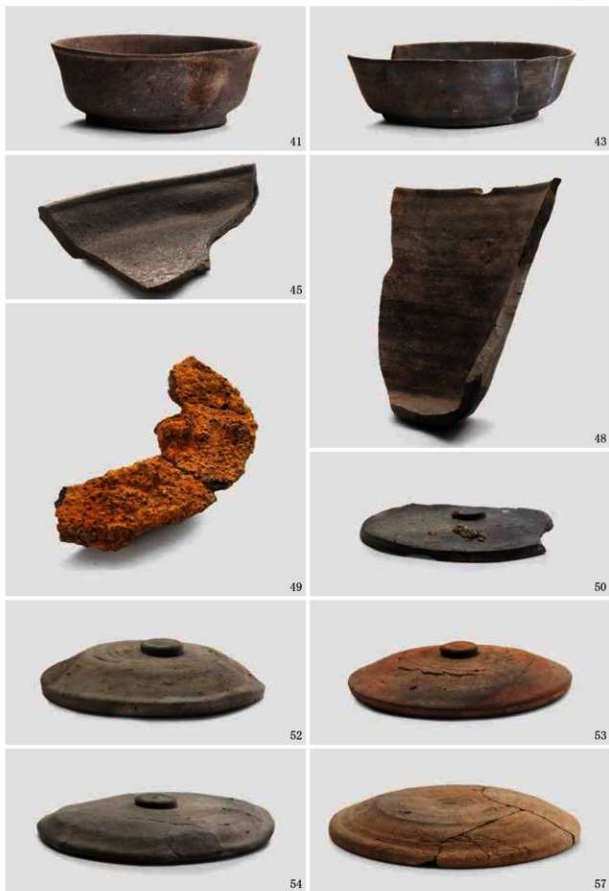
D地点·F地点土師器杯集合



F地点高杯集合







出土遺物②





出土遺物④



135



144



146



147



152



156



157



163



165



166



170



171



出土遺物⑥



184



185



181



189



193



196



201



204



出土遺物⑧





242



243



246



247



248



249



258



259



260



269



276



282



286



288



293



294



298



296



299



301



303



304



306



307



308



313



310



315



出土遺物⑫



333



336



334



340



344



346



353



354





400



410



413



415



417



419



426



428



436



429



出土遺物⑩





468



472



475



474



479



477



480



482



483



出土遺物⑬



## 報告書抄録

ふりがな	うしくびいしざかかまあとぐん3								
書名	牛頭石坂窯跡群3								
副書名	D・F地点								
巻次	3								
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第210集								
編著者名	上田龍児・山元瞭平－澤田康夫・柳本照男・深町祥子(編集)								
発行機関	大野城市								
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目2番1号 電話092(501)2211								
発行年月日	2023年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号	°	°			
いしざかかまあとぐん 石坂窯跡群 ちてん D地点	ふくおかけんおおのじょうしおおあさうしくび 福岡県大野城市大字牛頭2352番5				33° 29' 28"	130° 27' 35"	1990. 5. 22 ～1990. 6. 12	890㎡	土砂採取 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
石坂窯跡群 D地点	生産遺跡	飛鳥時代 奈良時代	須恵器窯跡7基		須恵器		円面硯・円形硯・椀椀		
要約	調査地は牛頭窯跡群の一角にあたり、丘陵斜面に位置する。飛鳥～奈良時代の須恵器窯跡7基を確認し、パンケース45箱分の須恵器が出土した。このうち、5号窯では円面硯・円形硯や椀椀の生産が想定でき、注目される。								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号	°	°			
いしざかかまあとぐん 石坂窯跡群 ちてん F地点	ふくおかけんおおのじょうしおおあさうしくび 福岡県大野城市大字牛頭2190番1 ほか				33° 29' 35"	130° 27' 45"	2005. 6. 9～ 2005. 8. 2	約350㎡	砂防ダム 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
石坂窯跡群 F地点	生産遺跡	飛鳥時代 奈良時代	須恵器窯跡4基		須恵器		中空硯・へら書き須恵器「五」		
要約	調査地は牛頭窯跡群の一角にあたり、丘陵斜面に位置する。飛鳥～奈良時代の須恵器窯跡4基を確認し、パンケース12箱分の須恵器が出土した。このうち、1号窯では中空硯やへら書き須恵器「五」が出土した。								

大野城市文化財調査報告書 第210集

牛頸石坂窯跡群 3

—D・F地点—

令和5年3月31日

発行 大野城市  
福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 株式会社三光  
福岡県福岡市博多区山王1-14-4